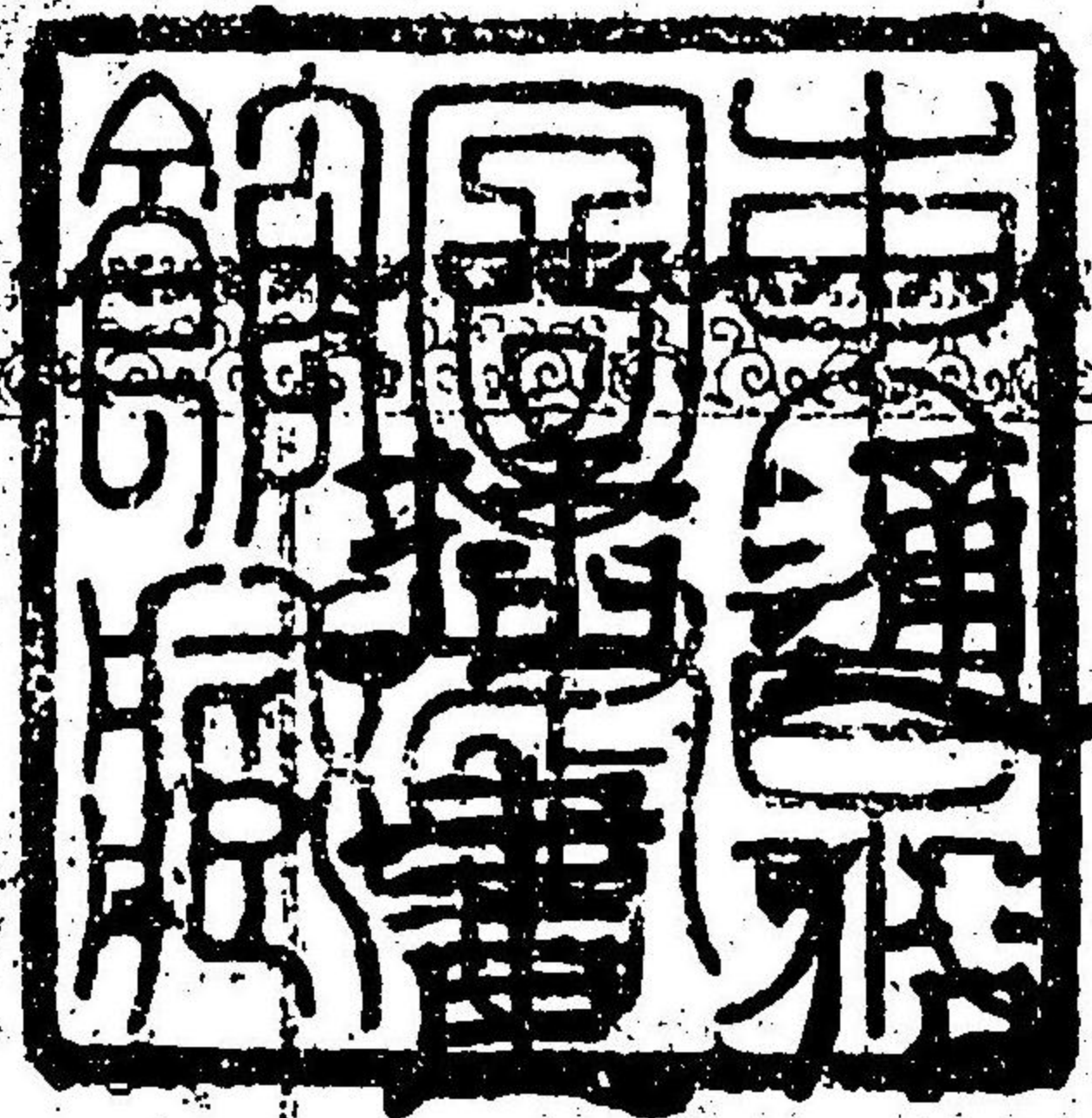


特12
536



藤江卓巖訂正
湯淺元禎原著

內務省圖書寮
4201

常山紀談

和陽館

常山紀談序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士武功也。權謀
 形勢。備矣。於馳驅周旋。蓋獨詳矣。世之君子。動謂兵。顧
 將畧何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此不稽古
 者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出為將。善射
 仰。先士卒。勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。士卒亦以武
 自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。至泯社稷而死
 者。不過千百。則先王之遺也。秦漢以來。文武異官。大將
 不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。擢至將萬人。而黥面
 刺臂。目不識字。士大夫視以為奴隸。人人不自重。惟以
 賞罰威之耳。時將亦制陳法。明懸令。以一切立功。終不
 能使士卒自喜焉。後世之戰。僵尸百萬。功唯數大將。而

二
裨將以下無一傳名者。兵制異也。故謂先王之世不尚
馳驅周旋者。不稽古也。昔者皇朝軍團取法隋唐。第
異邦俊民。皆從事科舉。惟魯亡識者。乃為兵。我邦則
公卿世官。州郡之民不舉朝廷。豪傑之士不在南畝。則
為兵。東夷數叛。源氏世將。恩義下結。武人漸貴。保平之
後。皇綱解紐。自鎌倉至室町氏。日尋干戈。時時皆賴士
卒之勇。以決勝。人自為戰。未暇講兵法也。至甲越二
公稍。有節制。而士愈益。自喜。以接勝國。名垂竹帛者。數
百人。神祖初起。尤名得士。一統宇內。封建諸侯。諸侯亦
各建將帥。為卿大夫。世其祿位。寬永以後。有兵家者流。
潤色甲越遺言。以教人。舉世宗之其人。守一家所傳。不
用心於將士之談話。戰國之事。往往失實。或又謂我國

三
時多屢軍立功者。故諸將不吝爵祿。以畜士。太平已久。
世無喋血。有如萬一。邊圉有警。則莫如遵異邦之法。明
法令。嚴賞罰。以率之。近世將士之談。無所用也。殊不知
異邦之兵。皆卒徒。故唯可以法使也。我邦士大夫。皆
出自武騎。國家待士。養其廉恥。使人人自喜。平生侍
以君子。則臨事不可徒以法令約束之也。故謂馳驅周
旋。非當世所尚者。不通今也。士大夫不聞將士之談。則
無以自勵。人君不聞將士之談。則莫以作士氣。在今兵
法之要。莫先於近古將士之談。今列國士大夫。莫不學
兵法。習武藝。而不用心於將士之談。教者之過也。世多
野史。志戰國之事。真偽雜糅。言無統紀。獨湯君折衷百
家。撮其雋永。以垂不朽。國初以來。未之有也。其書務

崇節義。雖小必錄。末又概載。國朝太平。君臣言之。美以翼名教。蓋其善志也。君世仕西藩。落落寡合。弗為名計。世少知君者。為人博學。篤行。器識高邁。當世未見其倫。此書也。行。人其庶幾。窺豹之一斑矣乎。常山備之望也。君居有常山樓。

明和丁亥九月甲子

龜山松崎惟時撰

常山紀談叙

予嘗慨往事之焚々。若滅若亡。傳於今者。何寥寥哉。蓋載籍未備。世遠磨滅也。夫前言往行者。得失之林。君子可以觀世矣。載籍散佚。不獨吾邦為然而已也。倚相之丘索。惠子之五車。向歆孟堅之所錄。遲々乎零墜。而况吾邦乎。於乎室町氏以前亡論已。及群雄彪闕。並為戰國。網漏吞舟之魚。疆場多壘。采山煮海。塞井夷竈。猶々乎沐猴戲。豐王以竊金黔首。攘臂乎草野。奮其威詐。雷震擊。鞭笞海內。三韓草靡。安知非炕龍絕氣。紫色蛙聲。聖王之驅除乎。宜哉不祀。忽緒其間。仁人義士。齋志吞憤。以沒世者。卓行懿範。湮盡罔聞。豈不悲邪。迨吾神祖聰明神武。革命創制。解民倒懸。列朝重熙。百年

謚。如。或。遇。大。史。氏。采。簡。錄。謀。臣。經。國。之。畧。武。夫。野。戰。之。功。則。何。以。盡。湮。盡。罔。聞。豈。不。惜。乎。予。適。每。有。勝。國。以。來。遺。逸。事。得。諸。敝。篋。斷。簡。聞。長。老。黃。髮。所。謂。記。廼。削。牘。識。之。往。事。之。焚。々。庶。幾。存。十。一。於。千。百。匪。有。意。於。備。不。朽。埃。大。史。氏。之。所。索。也。近。者。取。而。閱。之。其。所。識。多。國。俗。捍。獷。所。憲。技。擊。相。高。賈。勇。搏。人。之。談。犬。鷹。之。事。哉。其。人。骨。已。朽。矣。庸。何。足。傳。乎。後。世。予。於。是。乎。重。慨。之。烏。乎。保。平。之。間。源。平。迭。興。上。義。殮。死。尚。信。伏。節。習。以。成。性。孰。與。元。天。之。際。士。無。常。君。國。亡。定。臣。朝。委。質。而。夕。倒。戈。戎。首。者。乎。哉。風。俗。之。道。士。為。政。前。言。往。行。得。失。之。林。君。子。可。以。觀。世。矣。是。為。序。

元。文。四。年。己。未。五。月。九。日。

湯。元。禎。



武田信玄

上杉謙信

武田勝頼









德川光國

浮田秀家

細川幽齋

北條早雲



木多忠勝

後藤基次

毛利元就



常山紀談凡例

一 凡此書天文永祿の比より泰平に及ぶまでの事實をわづめしるせり戦國の時勢國初の風俗
 武人乃言行是皆世を觀る人の尤識るべき所にして是輯録の本意なり明君賢佐亂臣奸賊の
 勳徳に具ふべき自ら其中に見ゆれば必しも評論をしるべき
 一 吾國の士風源平の世と戦國の世と意同なきに非ざ凡古の風信を尙び義を尊び節操を重
 んじける事ども古き物語に見えたり戦國の士多くの利名を貪るにあり今川氏眞の没落北條
 氏政の滅亡の時死に殉たる人尠しされば節義の士の姓名散逸せん事なげかしくつとめて
 殉難忠臣の姓名をしるせるも又此書の本意なり
 一 戦國の間紀載詳ならず相傳る所誤れる事少からせ一事にて異説多きあり同異孰か是を
 しらざるの其説々をも悉しるせり人の姓名及年月の審ならざるも只記し傳へかたり傳
 ふるまゝにしるせるの比校すべき典籍のなければなり
 一 戦國の武者詞一種あり物わかれくひとめられたると云が如きこれなり皆其傳へたるまゝ
 にしるせり又いひ傳ふる世の詞も其傳ふるまゝにしるせり文字を脩飾せざる事其世代に
 よりて記録の實不實分明なるがゆるるなり左傳の其世の實録にて公毅の二書の後の世にしる

二
せるといふも其詞よりて分る、慮なれをあり然れども大に謀れるに至りて改しるせり
もあり世人甲をかふと胃をよろひとよむが如きの皆改しるせり

常山紀談目次

- 長尾輝虎越後を治めらる事
- 輝虎平家を誦らせて聞れし事
附 佐野天徳寺の事
- 参河國伊田合戦の事
- 荒木安藝守討死の事
- 甲斐國韮崎合戦の事
- 箕平三郎功名の事
- 佐伯惟常高崎城を乗取事
- 北條早雲智計の事
- 毛利元就嚴島合戦 附 盲人問者の事
- 那須の臣大關夕安深慮の事
- 太田持資歌道に志す事
- 持寶京に上りし時の事

附かゝるとききの歌の沙汰

- 木全知矩運歌の事
- 輝虎私市城を攻められし事
- 輝虎太田三樂が子を質に取れし事
- 東照宮大高城へ兵糧を入給ひし事
- 桶はざま合戦今河義元討死の事
- 東照宮大高城を引取給ふ事
- 武田信玄忍びの者を討れし事
- 信玄鹿島傳右衛門を呼れし事
- 備前國竜口落城の事
- 遠藤喜三郎三村家親を打事
并 備前兒島常山合戦の事
- 上杉謙信小田原へ攻入れし事

- 新發田治長が事
- 信濃國川中島合戦の事
- 謙信軍中に青竹を持たし事
- 謙信松山城後巻の事
- 東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事
- 同針崎合戦の事
- 向井與左衛門かへり感狀の事
- 中島元行が母備中經山城を守る事
- 石川數正淺岡某に鞆の緒の結様を習ふ事
- 東照宮三河國一宮城御後巻の事
- 三好松永光瀧院義輝朝臣を弑する事
- 三好實休戦死の事 附 光忠の刀の事
- 浦兵部功各の事

- 姉川合戦の事
- 同礪原二の手功名の事
- 三井角右衛門生瀧平右衛門功名穿鑿の事
- 金松彌五左衛門物見の事
- 信長公朝倉を撃給ひし事
- 笑形原合戦の事
- 同信玄遠謀の事
- 同蓮照宮退口の事
- 山崎長門守詫美越前守討死の事
- 中川重秀和田惟政を撃つ事
- 梶川彌三郎横島先陣の事
- 山内一豊馬を買れし事
- 奥平貞能父子降の事
- 東照宮大井城退口大久保忠世高名の事

- 中村新兵衛永原安藝守一騎打の事

- 北條綱成地黃八幡の旗を捨る事
- 柴田勝家水缸を破て城を守りし事
- 勝家先陣の將となる事
- 坪内某料理の事
- 清洲にて東照宮信長公對面の事
- 信長公伊勢の國司を亡し給ひし事
- 大久保忠隣功名の事
- 高木主水村越與三左衛門後殿の事
- 北條丹後指物の事
- 淺井長政齋藤龍興と軍の事
- 丸毛兵庫助軍配の事
- 馬場美濃守今河の館を焼く事
- 大友義鎮肥前國退口の事

- 渡邊守綱を鎧半藏といふ事
- 謙信單騎佐野城に入れし事
- 大河内政房節義の事
- 鳥居強右衛門忠節の事
- 酒井忠次鷓鴣城を乗取れし事
- 長篠合戦の事
- 多田新藏が事
- 二股城攻内藤櫻井功名の事
- 松平忠次諏訪原城を守らるゝ事
- 山内治大夫進士清三郎功を讓る事
- 長九郎左衛門能登國發向の事
- 越中にて謙信月を賞せられし事
- 信長公松永彈正を恥しめ給ひし事
- 長坂釣願跡部大炊邪佞の事

四

- 栗田刑部幸若が舞所望の事
- 附時田が首實験の事
- 岡田竹右衛門見切の事
- 朝日千介西郷伊豫を討つ事
- 菅沼定盈膽氣
- 附山口五郎作後藤金助討死の事
- 岡崎三郎君の御事
- 攝津國花隈城落る事
- 高天神落城仁科信盛戦死の事
- 勝頼の首穿鑿の事
- 勝頼天目山にて最後の事
- 禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事
- 信忠慧林寺を焼る、事
- 東照宮依田信蕃を助け給ふ事
- 生田木屋之介武功の事

○備前國福岡城合戦福井小次郎歌を遺して討死の事

- 山崎合戦の時堀秀政寶寺の山をとる事
- 則武三大夫功名の事
- 瀧川一益願橋を退く事
- 光秀愛宕山にて連歌の事
- 幸田彦右衛門が母義死の事
- 志津が嶽合戦秀吉智謀の事
- 堀七郎兵衛見切の事
- 志津が嶽七本鎗の事
- 石川兵助戦死の事
- 佐久間盛政生捕る、事
- 五 尾子家の十勇士

○武田信綱誅戮の事

- 小山田信茂誅戮の事
- 明智光秀信長公を弑する事
- 秀吉備中にて光秀が書を取れし事
- 秀吉西國の米を買れし事
- 光秀居城を築く事 附辛崎の松の事
- 森蘭丸才敏の事
- 光秀反狀の事
- 秀吉浮田を欺きて上洛の事
- 黒田孝隆思慮の事
- 池田家の使者筒井順慶を試る事
- 明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事
- 東照宮和泉國堺より御歸國の事
- 小寺黒田始末の事
- 信雄長田を誅せられし事
- 平松金次郎始末の事
- 水野勝成高名の事
- 本多忠勝忠勇の事 并忠信の冑の事
- 榊原康政秀吉を誹りて札を立られし事
- 秀吉東照宮の陣へ戦書を贈られし事
- 東照宮の軍器に依て蟹江城降参の事
- 九鬼嘉隆壁江の湊出船の事
- 中村一氏紀州の一揆を追挽られし事
- 竹中重治の事
- 戦國之士功を讓る事
- 羽柴勝雅敵を免す事
- 前田利家末森城後卷合戦の事
- 利家鳥越城を攻らる、事

六

- 本多重次強諫の事
- 秀吉東照宮に和を乞れし事
- 東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事
- 本多正信遠謀言上の事
- 信長公平手政秀を惜み給ひし事
附 小瀬浦菴信長記太閤記を著し事
- 謙信信玄二將の批評
- 仙石權兵衛九州に問者の事
- 嶋津家久嶋原合戦の事 附 惠藤某が事
- 立花道雪行狀の事
- 道雪仁愛深かりし事
- 立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手に加りる事
附 道雪死去の事
- 稻葉一徹罪人を免さる、事

笠の馬印を免されし事

- 武藏國八王寺城落る事
- 坂部岡江雪免る、事
- 關白鶴ヶ岡參詣の事
- 關白宇都宮にて佐野天徳寺と物語の事
- 蒲生氏郷大志の事
- 奥州葛西大崎一揆の事
- 蒲生家の士大將軍兵調練の事
- 氏郷伊達家の刺客を免されし事
- 氏郷佐々木が鎧を細川忠興に贈る、事
- 本多忠勝萬喜が舊臣を呼出されし事
- 東照宮武田の舊臣を召て物語の事
- 東照宮物具の物語 附 小野木笠の事
- 秤御定の事 附 一步金辨當狹箱始りの事

七

高橋紹運討死の事

- 紹運齋藤鎮實の妹を娶られし事
- 志賀親次山海が嶺に兵を伏る事
- 高畑三河功名の事
- 森迫親正討死辭世の事
- 薩摩勢根白の砦を攻る事
- 巖石城合戦坂小坂先登の事
- 新納武武藏守豪氣の事
- 黒田家岐井谷合戦の事
- 豊臣關白北條征伐出陣の事
附 本多重次放言の事
- 井伊直政關白を討んと言れし事
- 伊奈熊藏兵糧を司る事
- 蒲生氏郷の陣夜討の事 井氏郷金の三階

酒井金三郎本を忘るる事

- 成瀬正成忠信の事
- 豊臣關白五腰の刀の主を察せられし事
- 竹俣兼光の刀の事
- 本庄正宗の刀の事
- 冑の名様々有し事
- 伊藤七藏高名の事
- 馬場重介武功の事
- 澤村大學朱柄の鎗を持する事
- 加藤清正天草の一揆退治の事
- 森本義大夫組討功者の事
- 伊達家の士卒異風出陣の事
- 朝鮮南大門合戦
- 國富源右衛門組討の事

- 加藤光泰大言の事
- 吉田又助川巾を積る事
- 清正虎を狩れし事
- 太閤名護屋にて大言の事
- 菅政利後藤基次虎を斬る事
- 加藤嘉明拔懸高名の事
- 浅野長政諫言の事
- 井口與市主従功名の事
- 清正の武備嚴重なりし事
- 清正の花押筆畫多かりし事
- 後藤基次龜甲の車を造る事
- 和寧館合戦栗山利安武功用意の事
- 日根野備中守黒田家に銀を返す事
- 栗山利安誠言の事

○竹中重治心掛の事

- 峯澤某謙信を撃んとせし事
- 野々口彦助物語の事
- 石谷定清御供に参る事
- 坪内玄蕃心得の事
- 谷太郎左衛門物前心得の事
- 可兒才藏が事
- 石田三成が事
- 關白秀次公生害の事
- 木村常陸介最後の事
- 秀吉有岡城へ使者に行かれし事
- 秀吉公連歌の事
- 谷大膳武勇討死の事
- 黒田如水先見の事

- 秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事
- 直江兼續が事
- 石田三成直江兼續密謀の事
- 石田が黨東照宮を謀奉らんとせし事
- 細川忠興忠告の事
- 東照宮細川家の難を救ひ給ひし事
- 七人の大將石田を討んとせられし事
- 東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立せ給へる事
- 東照宮花房助兵衛に起請文を書と仰られし事
- 下野國小山にて上杉入庵講論の事
- 渡邊惣左衛門野中市左衛門忍て大阪に使者する事

○東照宮小山の途中にて竹を伐せられし事

- 伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事
- 岐阜城攻の事
- 森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事
- 兼松又四郎一柳の陣見切の事
- 後藤又兵衛決断の事
- 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の功名の事
- 神谷小介先登の事
- 寺澤廣高加藤嘉明度量の事
- 村上彦右衛門先見の事
- 株瀬川合戦の事
- 稻次右近功名の事
- 浅香庄次郎働の事
- 林半介殿の事

○伊藤金左衛門三宅平太夫後殿の事
○毛屋主水物見の事

○關ヶ原合戦島左近討死の事

○飯尾甚太夫一騎先駈の事

○蒲生備中父子戦死の事

○大谷吉隆平塚爲廣最後合戦和歌贈答の事

○瀧川内記功名の事

○田邊甚兵衛幼年功名の事

○辻小作中黒道隨が事

○嶋津義弘關ヶ原退口の事

附 大坂の商賈義氣の事

○細川忠興の北の方遺死の事

○安養寺門齋三成を生捕んとせし事

附 姉川合戦の時門齋生捕れし事

○大津城合戦京極家の士戦功の事

附 赤尾伊豆が事

○十時傳右衛門山田三右衛門死骸返しの事

○高次大津の城を出られし事

○立花家足輕鉄炮の用意

附 細川家口薬入吉田大藏猿頭の事

○伏見落城の事

○村上三右衛門大島源二武者振の事

○三刀谷監物田邊城に籠る事

○田邊城勅命に依て和平の事

附 細川幽齋古今集傳授の事

○古田助左衛門思慮の事

○伊勢國阿濃津城軍の事

○長東大藏大輔降参の事

○浮田秀家八丈島へ配流の事

○小早川隆景遺訓の事

○佐竹義宣國替の事 並 車野丹波が事

○前田慶次が事

○出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

○伊達上杉陸奥國松川合戦の事

附 岡野左内が事

○石田が子の借助命の事

○越後國一揆堀直寄武功の事

○世間太兵衛伏兵を知る事

○眞田昌幸父子三人始末の事

○佃次郎兵衛伊豫國松前城を守る事

○堀秀政を名人太郎といひし事

○大久保忠隣忠直の事

○渡邊才兵衛武功の事

○石田三成生捕る、事

○小幡助六郎忠死の事

○河村權七郎が事

○加藤清正の北の方大坂を忍び出られし事

○淺井暇合戦前田丹羽の將士功名の事

附 松平久兵衛軍學鍛煉の事

○山田勘六郎討死の事

○黒田大友石垣原合戦の事

○三宅喜藏武勇の事

○肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事

○福嶋家の士大將 東照宮を拜する事

○加藤清正治亂を論せられし事

○黒田如水豪氣の事

二

- 天野康景廉潔高國寺城を去れし事
- 井上正就駿府へ御使の事
- 東照宮諫言を容給ひし事
- 三河國矢矧橋を修造せられし事
- 東照宮禮を正し給ひし事
- 駿府城中へ水を引んとせられし時の事
- 東照宮御中指の事
- 金の七本骨の扇の御馬印の事
- 加藤忠廣物語 並に飯田覺兵衛が事
- 前田利常戦死の士を吊りし事
- 黒田如水遺言の事
- 本多正信加藤嘉明を諭されし事
- 安藤直次先見並 本多正信遺言の事
- 台徳院願行狀の事

○林道春格言の事

- 藤愼窩秀吉公を論せられし事
- 紀伊大納言頼宣卿諫言を歡び給ふ事
- 由井正雪反逆の時頼宣卿出仕の事
- 水野重長諫言の事
- 松野惣太郎前田權之介賞せらる、事
- 佐々九郎兵衛經濟格論の事
- 不破彦三武備の事
- 井伊直孝衣服儉約の事
- 永井尙政執政の用意を直孝に問れし事
- 中院通茂公幼宮を教訓の事
- 細川忠興胃の立物の説
- 忠興飯河豊前同肥後父子を誅せられし事
- 并 肥後が妻節義に死する事

三

- 黒田瀧徳丸袴着の時母里但馬舞を舞し事
- 吉岡建法狼籍太田忠兵衛手柄
- 并 太田武技を論ぜる事
- 柳生宗矩劍術御師範の事 并 宗矩先見の事
- 板倉重昌肥前國嶋原の賊追討の事
- 并 周防守重宗先見の事
- 川北九大夫肥後國川尻を守る事
- 天草の一揆夜討の事
- 黒田勢天草丸を攻破る事
- 并 黒田睡鷗武畧の事
- 水野勝重父子有馬永純本丸一番乗を論せられし事
- 松野龜右衛門鉄炮修煉の事
- 附 松野才覺の事

- 福島正則領國を召放る、始末の事
- 福島正則信濃國へ赴れし時の事
- 正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事
- 井伊直孝直諫の事
- 明の鄭芝龍援兵を乞ふ事
- 并 稻葉正勝諫言の事
- 大納言頼宣卿援兵の總大將を關ひ給し事
- 墨田川に橋を掛られし事
- 板倉重宗京都所司代の事
- 附 板倉勝重器量の事
- 重宗訴訟を聞れし心得の事
- 毛利勝永大坂に入る事
- 池田忠繼朝臣士を懐けられし事
- 芳賀内藏允武者振の事

四一

- 佐竹勢今瀬口を攻る事
- 并杉原常陸武功の事
- 上杉景勝志貴野口合戦の事
- 井伊直孝陣代の事
- 本多伊豆守出陣聯句の事
- 後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事
- 大坂にて台徳院殿諸將の攻口御巡見の事
- 東照宮志貴野御巡見の事
- 小田切所左衛門平野彌次右衛門武者撥の事
- 異田が丸を攻たる時の事
- 塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事
- 木村重成威状を辭せし説

- 稻田九郎兵衛武功を語らざりし事
- 細川三齋夜討評論の事
- 大坂城中軍評定の事
- 堀直寄見切の事
- 山本權兵衛功名の事
- 毛利孫左衛門對村越中を詰る事
- 井伊木村挑戰重成討死井伊家諸士功名の事
- 横田甚右衛門藤堂高虎を激ます事
- 脇五右衛門某氏三彌武功の事
- 増田兵大夫討死の事
- 青木長屋生捕る、事
- 藤堂家合戦渡邊勘兵衛功名の事
- 井渡邊始末の事
- 横田佐久間井伊家の陣へ御使にゆく事

五一

- 片桐丹後守一番首を取る事
- 松平助十郎先登戦死の事
- 安藤彦四郎討死の事
- 本多忠朝討死の事
- 孕石備前廣瀬左馬助討死の事
- 廣田圖書が事
- 伊藤武藏守馬騷を拾ふ事
- 郡主馬が事
- 野村越中才覺の事
- 長曾我部盛親生捕る、事
- 大野道軒生捕る、事
- 渡邊内藏助が子城を落し事
- 齋藤織部藩武者を助る事
- 澤原孫太郎節義赦免を蒙る事

- 丹羽左平太才覺城を落る事
- 附左平太初陣義氣の事
- 大阪御陣中御支度の事
- 本多落合功を論ずる事
- 後藤又兵衛が事
- 古田重勝滅亡大河内元綱先見の事
- 石川重之功名 隠遁の事
- 直江山城守閻魔王に書を贈て訴訟人を斬る事
- 安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事
- 土屋敷直執政の事
- 并土屋忠直成立の事
- 塚原卜傳劍術鍛煉の事
- 東烈宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言

の事

六一

- 鳥丸光廣卿 行状の事
- 中院通村公 江戸にて和哥を詠給ひし事
- 本多忠義書翰評論の事
- 義經の鞍の事
- 大音左馬助先登を論ぜる事
- 永田治兵衛功名の事 附 櫻井合戦の事
- 奥平家の士の妻髪を切て節を守る事
- 優婆塞の馬の事 附 信玄馬を擇ばれし事
- 森寺藤左衛門池田家興立の事 附 森寺政右衛門武勇の事
- 伴玄札殉死を止る事
- 番大膳二條城へ使よ参る事
- 熊澤了介の畧傳

○小櫃與五右衛門會津神公を諷諭せし事

- 水戸義公御事業の概畧
- 渡邊數馬報讐始末の事
- 多賀孫左衛門同忠大夫仇撃の事
- 大久保家の婢女主の仇を撃し事
- 林田左文劍術妙手の事 附 馬爪源五右衛門先見の事
- 石井兄弟報讐の事
- 尾崎幸右衛門が女親の仇を撃し事
- 伊丹康勝格言の事
- 佐藤直方直言の事
- 常山紀談拾遺目次
- 家康公甲の心得御示の事
- 小幡景憲物語の事

○野間左馬進田螺を以て勝負占物語の事

○家康公駿府にて相討御吟味の事

○紀伊大納言頼宣卿十三歳にて大坂攻御先手を望る、事

○高麗攻南大門合戦物語の事

○津田長門入道道慶物語の事

○伊藤伊右衛門武田勝頼を討しを津田幸庵物がたりの事

○筑前岩出城攻秀康御四十年歳まで武勇御心入の事

○越後浪人大井田監物の事

○朝鮮攻に後藤又兵衛物見の事

○讃州源英公の家士西尾右兵衛が事

○同陣清正の家來矢木八右衛門矢疵の事

○關ヶ原御一戦勝利稻次右近高名の事

○丹羽五郎左衛門物語の事

○榑原の家人黒田彦左衛門の事

○浅野左衛門家人永田治兵衛働の事

○信玄豆州葦山とりつめ山縣同心辻彌兵衛働の事

○榑州花熊城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事

○輝政公武將の重寶を示さる事

○家康公同合戦御自讃の事

○福島正則關ヶ原出陣日柄の事

○同役吉村又右衛門高名を失ふ事

○同役岐阜落城の事

○同役田中兵部太輔長胤の中間水練の事

七

七

- 同役石田三成浮田秀家が謀を用ひざる事
- 同御合戦毛利秀元戰場より東方へ返る事
- 同牧方面に御旗を立られ首御實檢の事
- 瀧川左近將監一益極器に馬上にて川を涉す時水を飼事
- 保科輝正信高遠に籠城の事
- 上杉景勝最上義元と合戦の事
- 美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鉄炮迫合の事
- 甲斐山縣同心長坂重左衛門の事
- 輝政公岐卓攻目吹右衛門が事
- 朝鮮陣の時兵器を塗馬糞にて乾かせし事
- 輝政公關ヶ原行軍願見の事
- 大河を渉る心得の事

- 大坂夏陣井伊家士小笠原傳兵衛手柄の事
- 信玄嫡子義信と不和の事

- 大坂にて石川宗左衛門江坂清次郎組討の事

- 大阪冬陣上泉義郷指物の事

- 大阪の役木村長門守を井伊家へ擧取事

- 松平讃岐守殿具足屋岩井孫四郎物語の事

- 米倉丹後が子彦十郎鉄炮疵妙薬の事

- 佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合戦の事

- 上杉彌五郎が事

- 佐久間河内守物語 渡邊藏助が狂歌の事

- 岐卓攻の時川々洪水によつて後藤又兵衛尋問の事

- 家康公慶長五年七月會津御發向の事

- 城和泉守長盛諷言の事

附録雨夜燈目次

- 權現櫻花女を御使にて台徳院様へ菓子を進せられし事

- 新太郎様夏目氏の忠死を御賞歎の事

- 松前伊豆守用意の事

- 武邊ハ律義者にありといふ事

- 常憲院様越後家の訴訟御叙断の事

- 土倉市正中村忠左衛門を勸めし事

- 毛利元就大内義隆に諫言の事

- 熊澤助右衛門格言の事

- 稻葉一徹文學に依て死を免れし事

- 中院内府幼き宮へ後見の事

- 威恩を以て國を治められし事

- 秀吉尾筋進發の事

- 秀吉岐卓攻の事

- 源君久世三四郎坂部三十郎へ物見仰付らる、事

- 豊前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事

- 赤井惣右衛門武勇の事

- 大坂夏御陣眞田左衛門佐幸村勇戦の事

- 同冬御陣越前忠直卿の手仕寄の事

- 信玄の士小幡豊後物見の事

- 源君御扈從中根左源太勘氣御免の事

- 島原一揆の時紀伊頼宣卿明知の事

- 島原攻並河九兵衛足輕下知の事

- 伴助右衛門水戸家へ召抱らる、事

- 松山新助の勇將中村新兵衛が事

○佐藤五郎左衛門咄の事

常山紀談目次畢

常山紀談

備前 故人 湯淺新兵衛元禎輯錄

攝津 藤江卓藏 訂正

○長尾輝虎の幼名を猿松と云ふ

輝虎始めの景虎といふ後ち京に上り公方より輝の字を賜て輝虎と稱す鎮守府將軍良兼
四代の孫左衛門尉致經の二男村岡五郎忠通が末にて其後長尾と稱す後管領上杉の讓を
得て上杉と稱す

兄を三郎といふ猿松粗莽にして繼母の讒言により父爲景の心にそむき越後の椽原淨安寺に
追ひ出され金津新兵衛供して米山越にかゝる時猿松八歳なりかちの士背に負て山を登り嶺
ある堂に居て破籠を差出す猿松遙かに頸城府内を眺やり涙をたれて云ふやう我れやがて軍
をおこして志しをとげなば此山に登り府内を眼下に見おろす地なりと乳母子本條美作守も
舌を巻悦びけり

一 一説に猿松十二歳のふる諸國をめぐりて風俗を見人情を察し地の利を窺ふといへり

かくて猿松九年の間、だ寺にわれども僧となるべき志なし。天文十四年、爲景越中にて討死す。嫡子三郎暗弱にて、越後みだれ所々敵に掠奪れたり。父の吊軍せんと思ひ、宇佐美駿河守定行をとひ、天文十六年正月十八歳にて元服し、平三景虎と名のり、椋尾の城に旗をあげたり。三郎是を聞き、長尾越前守政景に七千の兵を副て攻しむ。景輝矢倉にありて、敵の今夜引き退くべしと云ふ。定行の曰ふに、攻め來り空しく退くべきやうなしと。景虎の曰ふに、敵は小荷駄なし、久しく圍むべき計にあらざり、ひき退かん處を撃つべしと。疑なしと。因て夜半に打て出る果して、政景の軍みだれけり。景虎又柿崎に於て三郎を打やぶる。景虎米山の東坂本にて我れねむり居る。三郎の兵皆かゝる時を失ふまじと。思時景虎つと起あがり、三郎の軍兵山を三分の一のあたりに越たりと。覺へいざ追討せんと。馬にのり、螺貝吹龜破坂よりあるしうち大に打勝てり。定行歎美して云ふことし、わづか十八歳弓箭をとる事誰やの人か。肩をならべ、なんとぞ。景虎越後を治め得て、高野山に出奔せんと。長尾家の長臣相集り、景虎なくば國を敵に奪はるべしといふとて、まづいかにとめければ、景虎のいはく、我年わか、威重からせ老臣等、我を輕せば、國の根本立せ。此國人の爲に利を求るは、我身の害をまねくなり。是より後、吾命を背くまじとならば、神文を書て得させよと。因て神文を受けとり、三郎を隱居させ、是より威をふるひ、越中を攻め入て父の吊

軍とげられけり。長田の中に二心ある者を、林泉寺といふ處にて腹切せて、國を治めけり。晩年謙信と稱しぬ。

○輝虎ある夜、石坂檢校に平家をかたらせて聞かれけるに、鶯の段を聞て頻りに落涙せり。侍者どもあやしみ思ふ。輝虎の曰く、吾國の武徳も衰へたり。昔鳥羽院の時、禁中に妖怪あり、八幡太郎鳴弦して鎮守府將軍源義家と名乗ければ、妖忽ち消ぬ。其後頼政、鶯を射たれども、猶死せして、井野隼人さしといめたりと。義家鳴弦せしは、天仁元年の事なり。鶯の出しの近衛院仁平三年なれば、僅に四十六年なる。武徳既におとれる事、はるかなり。今又頼政におくる、事四百五十年われ又頼政におとる事、遠かるべけれ。乳おぼはぬ涙の流るゝと語られける。又相似たる物語あり。附記す。相州北條の幕下佐野城主天徳寺なる者ある時、琵琶法師に平家を語らせける。よ法師佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出たりし。よ天徳寺雨車と涙をながして泣たりけり。次に又那須與一が扇の的をかたる半に及で、天徳寺また落涙敷行に及べり。後日に側に仕へし者どもに、過にし日の平家いかゞ聞つるといふに、皆面白き事と返答せり。よつて天徳寺の云ふに、只今迄の各々を頼母しく思ひしが、今の一言にて力を落したり。先佐々木が事をよく心よりかべて見られ、右大將舍弟の蒲冠者にも賜はらぬ。生月を高綱に賜はる。

四

にあらすや若し此馬にて宇治川の先陣せせして人に先をこされなば必ぞ討死して再び歸るまじき其志のいれなりと云つゝ涙をのこひまはしありていひけるは又那須の與一人多き中より撰ばれて只一騎陣頭に出しより馬を海中に乗入て的にむかふに至るまで源平両家喝をしづめて是を見物すもし射損じなば味方の名折たるべし馬上にて腹かき切て海に入んと思ひ定めたる志を察して見れ弓箭とる道はどあはれなるものあらじわれの右の平家を聞時も兩人の心を思ひやり落涙にたへざりし然るに各々の心得にて只一旦の勇氣にまかせて眞實より出るにはなきやと思のれなん夫にて頼母しからせとなげきけるとぞ

○善徳公 諱清康安祥二郎 士卒を憐れみ勇材有り尾張國森山に陣せしとき不慮の事にて安部彌七郎弒しける植村出羽守いまだ新太郎 新六郎とやせしが十六歳にて御側に有合せ彌七郎をばたち所に誅しけり御家人はせありまりて唯あされ居たり植村はせ來る御家人に向て云ふ敵をば既に切て棄て此れより腹切て御供可仕と人々云ふに御身一人 幸に御側に有し事これ神明の冥助とやいふべきされば腹切て冥途の御供やさん事また誰かの御身におとるべきされば各其所存のごとくにふるまひて可然我等の必死近きにあり今日いたづらに腹さらんとも存せせと答ふ植村聞て其必死の如何と問ふ其時抑われら必死のあづか十日を過す

べからせ殿かくならせ賜ひぬとかたきの方に聞えなば彌正忠信秀軍勢をひきめて岡崎に攻來らんと疑ひなし我らの討死の此時に有りと覺ゆ同じく死せん命運速の十日を隔つべしといへば植村聞てげに理かなさらば人々と俱に同じく討死をせんとて岡崎に引返す案にたがひせ織田信秀八千の兵を引率して三河の國に打入り大樹寺に陣とりたり御家人等僅に八百人一同よとつとあささけびてこり打出けれ二九手にわかちて伊田のあなたに打て出づ此人々の義心を神明感じ玉ひけん此の所に見る玉ひし八幡宮の鳥居のかたきの方に向て六尺餘りみづから動さけるこそ不思議といふも餘りあれ人々大に力を得てよせ來たる敵をまちうけ味方野は向かひし軍兵の敵の真中よりこめられ一人ものこらせ討死す植村賤が田より向ひてまつさきをかく味方僅に四百人四千のかたきを打破り敵の散々にみだれ立ち信秀からさいのち生て尾張の國に引返すこれを伊田の合戦とす

五

○大永年中細川武藏守高國と稱す 三好左衛門督と相戦ふ三好桂川を渡りて高國の陣へおしよする波多野備後高國に怨ありて丹波の兵を引具し高國に叛き三好に與しければ高國の軍敗れたり高國の將荒木安藝守百ばかりの兵を引わかち人々に向つて云けるに義を義とせざるの弓箭とる身に非せ各々又眞の士となりてわれと同じく義をふまんやいなと思はん

六

に強へからせいかにといへば皆この口惜き事をも承る日比の所存をしろしめさせか斯る時きたなきふるまひをそべきとて少しも落ちるべき色なし荒木さぞあらん寔に主従の契此世のみにあらずりけりと打笑ひて京軍の崩るるをよそに見てひしと折しき待かけたり阿波丹波の兵競ひかゝるを間近く引うけわれを誰とか思ふ管領の下に荒木安藝守といふ者あるを知らせやと呼り一同に立あがり先鋒の敵十人ばかりつき伏又そこに折しきかゝる敵を待うけてつきしりぞけいく度となく戦ひたるに敵討るる者數をしらせ荒木主従一人ものこらせ討死しける間に高國僅に近江にのがれ得たり荒木平生士卒を愛するに惻情を盡せり古へ乃食を分衣を解樂を同し苦を共にするの風あり人々恩を思ふ事骨髄に徹せりとなん

○武田晴信父を逐の後諏訪頼茂小笠原長時多兵にて甲斐に攻入り韮崎にて一日の中に合戦四度に及べり晴信韮崎に向ふ時諏訪小笠原のもとにゆかりある者原加賀守を始としてあまた甲府に残しければ原人々に向ひけふの合戦に各たち功名をどぐべきにとゞめおかれしん長く弓箭とる躬の恥とならん主君の疑を蒙らんより敵にあひて討死せん事勇士の志なりとわれ先に韮崎にはせ行けり此時晴信軍する事三度戦ひ疲たる所に頼茂長時一手になりて進み來れば既に危く見ゆしかども原が來るに力を得ていさみそとむ晴信原をよびて其志を

感じ日向今井等を後にひかへさせ競ひかゝる敵に當りて打やぶられけり是晴信士を激勵の策にてわざと原等を甲府に残れしふるべし

○織田後備守信秀松平三左衛門忠倫と密に謀りて岡崎の城を攻とらむとす岡崎に泄聞へしかば應政公甚いさどほりて箕平三郎重忠を召上和田に往ていつはりて降参し三左衛門を刺殺し來れ偏に汝を頼むよと仰りしかば箕上和田に至り降参するよししたばかりければ三左衛門岡崎の士心を通るものあれども箕兄弟を味方にせばやと思ふ折かゝなれば大に悦ひて懇にもてなしにけりかくて夜深て後案内よく見とゞけつ忍びよりて賜りたる脇差を以て三左衛門がわき腹を二刀刺てのがれ出づ天文十六年十月の事なり應政公の東照宮の父なり

七

一説脇差を賜りける時これを以て刺殺すべしつき貫きたる刀をぬかば必き聲を立てし然らばおさあつせ追つかけて汝のがれ得じつき棄て還歸れと仰られしかども賜りたる脇差をすてんと本意に非きと思ひぬいて出ければ果して三左衛門聲をあげ人を呼ける故各起合て追かくれども逃れ得て歸るといへり

○天文年中大友義鑑の臣朽網下野親滿謀反して高崎の城を乗とりてたてこもりしに佐伯惟

常の大友家の旗下ありかくと聞杵築より馳來る佐伯平生鷹狩を好む専かりの爲に非ざるして軍だちの爲あり此の時佐伯が士杉谷次郎太郎同次郎三郎とて兄弟あり相共に一番乗を志さし城の堀いづれの方か上るによろしからんと目をくばりけるに堀の隅あり爰に目を附直やりの柄を四五所繩にて足だまりを結び一同に攻かふる時杉谷兄弟兼て心を付け置きし處に初より近づき居て走りつくと鎗をたてかけ終に登りこゑて一番入たり

○北條早雲盲人の無用の物とて小田原領分のめくら法師をからめて海よふしづけに沈んとせられしかば盲人皆四方に逃ちりける其の中を潛り間に用ひられしとぞ

○陶尾張守晴賢大内義隆を弑しければ毛利元就陶を打滅んとはかられけり陶めくら法師一人を問者として元就の謀をしる元就始めのかくともしられざりしかや心付ぬある時

陶が臣永來丹後守われに志を通る晴賢をうち破ん事近きにありと語られけるを彼の法師やがて陶に告たりければ陶大に怒て永來を殺しぬ元就彌々かの法師を近づけ平家をかたり習ふと稱しかたへをはなされき陶傳へ聞て悦ぶ事限なし元就またある夜軍評定せられけるが

敵大軍にて宮島にれしわたらびいかゞのせん是れ吾亡ぶへき運のさめと覺ゆるなり又草津廿日市よおしよせなば岩國の弘中參河守われに心をあしすれば裏切させて陶をうち破る

べしとぞ語られける是れ陶を防がん地に櫻尾の城ならで然るべき要害なし宮島に渡ら

ば乗來る船を焼たて歸路を塞ぎて軍すべしと思ひける故なりけりめくら法師かくと陶に告

ければさらば宮島を攻なんどぬ弘中參河の守隆包然るべからじといへども陶の弘中が二

心を疑て聞も入せ弘治元年十月四萬のまり大船にとり乗り宮島にうち渡り四方を取かこみ

たり元就も今度の十死一生の軍と思ひ定め吉田の城を出わづかに四千計りの兵にて後巻せ

られけりこの時元就のひそかに軍のしたくをなし一手の湖屋明神の前より船よりあがり天

本の御前を多寶如來のかたへを通り宮島の町口へ向ふべし一手の吉田郡山の百姓ばら五千

餘に嫡子隆元を大將として彌山島より西の山々の木末にたいまつを結つけ百姓ばら又手々

にたい松ふたつ持せ夜半の鐘を相圖に同時に火をつけよ吉川元春の船にとり乗浦口に向け

並べたる陶が船どもを焼しづめよと謀を定めらる十月晦日けふ草津に引退く休にもてな

し日もや暮れば俄に唯今宮島へわたり思ふ敵を討ちとるべしとく船に乗べしと下知し

ひたくと打乗簾なともしぞ元就が船の火をしるしにとるへの泥を守れとて酉の刻ばかり

に火立浦を出る折ふし北風はげしう吹たりければおひ手の風ぞといさみそとんで亥の刻は

かりに宮島の西につきて陸よあがり船をば一艘ものこらき火立浦に返されけり斯くて一度

○一 聞の聲をあげ彌山島の木末に結付たるたい松に火を付けたれば陶が軍兵驚きさわぎける處を元就おめいて先をかけたれば陶か軍さんぐも敗北しけり陶の引退きて道場山にあり明れば十一月朔日元就諸軍をあつめ卯の刻より午の時まで十二度の戦に互に討るゝ者數をしら老陶終にかなひで自害しけるを首をとり出して梟せられぬ討とる處の首四千七百八十餘生どり八百五十餘人とかや是より西國元就にあびき従ひけり

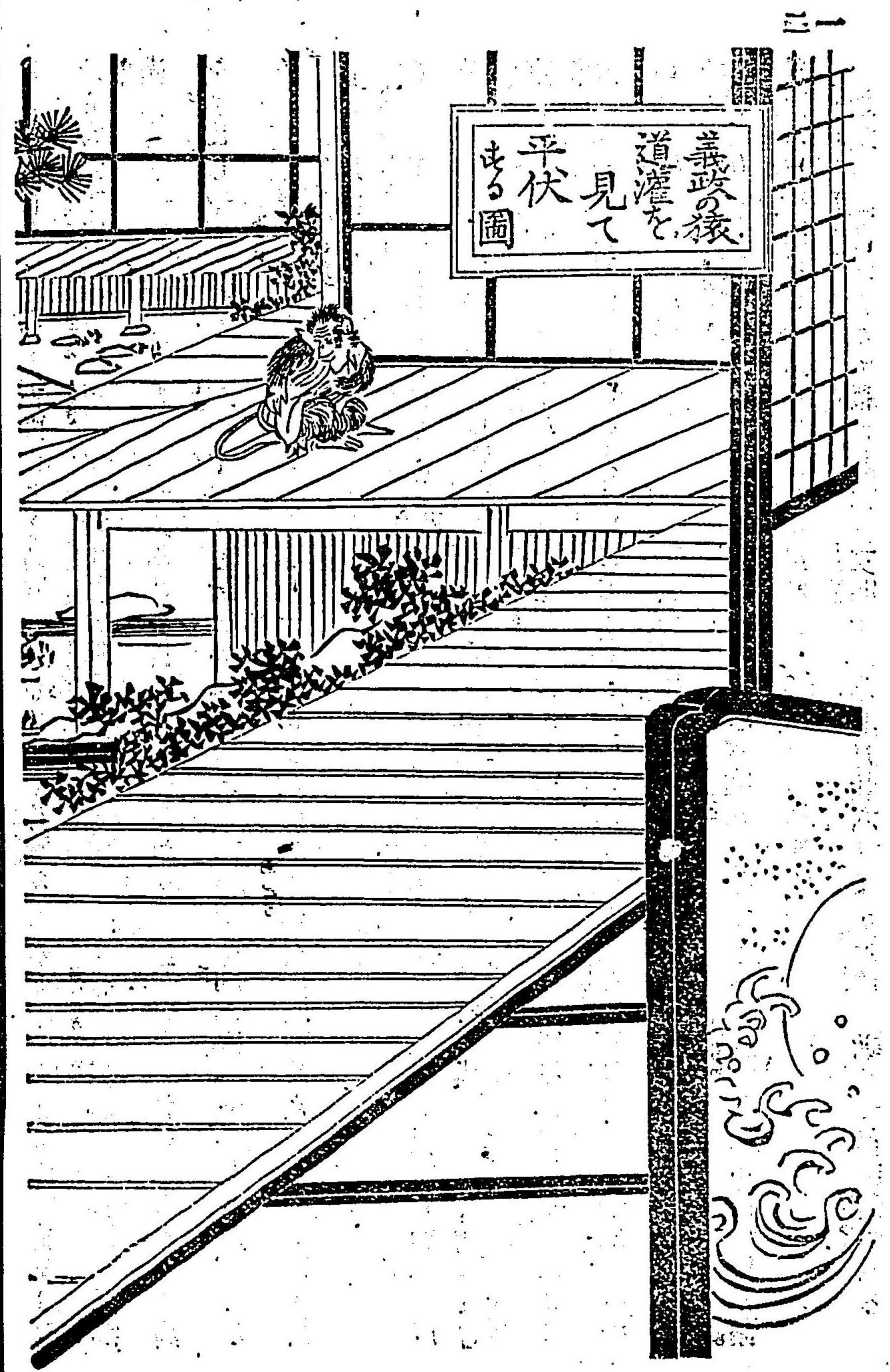
○野州宇都宮の軍那須によせ來りけるを撃破り既に大將をも討とるべかりしを那須の長臣大關夕安兵をまどめて北るを追せ人皆今度宇津宮をも破るべきにといふを夕安聞て「雲のみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな」と云る古歌あり今味方にさせる根本の固もなく宇津宮を攻破らば小田原より那須を敵とせん然らばいかにして那須を守りかゝむべき宇津宮をのこして小田原をあいしらすせ其のひまに那須の根を深く礎を固くして小田原を敵にもしつべしといふ皆人これを感じけり

○太田左衛門大夫持資の上杉宣政の長臣也鷹狩に出て雨に遭ゆる小屋に入て蓑をからんといふにとかき女の何とも物をべいはきして山吹の花一枝折て出だしければ花を求るに非老とて怒り歸りしに是を聞し人のうれの「七重八重花のさけとちやまふさのみのひとつだに

なきぞ悲しき」といふ古歌のこころなるべしといふ持資おどろきてそれより歌に志をよせけり宣政下総の鹿南に軍を出す時山涯の海邊を通るに山上より弩を射かけられんや又潮満たらんや計りがたしとてあやぶみける折ふし夜半の事なり持資いざわれ見來らんとて馬を馳出しやがて歸りて潮の干たりと云いかにしてありたるやと問ふに「遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴言に潮のみちひをぞしる」とよめる歌あり千鳥の聲遠く聞えつといひけり持資後に道灌と稱す

○持資京に上りしとて慈照院殿政饗應せんとなり慈照院殿に一ツの猿あり見しらぬ人をバ必老かさ傷ふといふ事を持資聞て猿づかひに賂して猿をかり旅亭の庭につなぎ出仕の装束して側を通るに猿飛かゝるを鞭を以て思ふさまにたゞ伏たれば後に猿首をたれて恐れ居たり持資猿づかひの人に禮謝して猿をかへしたりかくて饗應の日かぬて慈照院殿かの猿を通るべき所につなぎあきて持資が狼狽するを見んと待れたるに猿の持資を見るや香地に平伏そ持資衣紋ひさつくるひ打過たりければ唯人に非せと大に驚れたり彼の猿を驚きたる戸を猿戸といふうれより猿戸といふ名のおこれるとなり

道鑑の讒言によりて殺されたり文明十八年七月廿六日なり辭世の歌とて世に云傳ふる



「かゝる時こそ命のをしからめかねてあき身と思ひしらすの」松田が家の物語にもかくしるしたり

○安藝佐伯郡に木全知矩といふ者あり後に宗嘯といふ毛利元就に従ひざりければかたみ攻らるゝに兵糧を乏しくなりければ降参をすゝめらるゝに父祖よりうけ傳へたる城をたやすく人に授くべきやとて彌々服従せし宗嘯の連歌に心をよそると元就聞傳へて箭ふみを城中に射入させられけり「秋風にかたき木またの落葉かむ」やがて射かへしけるに「よせ来てしづむ浦浪の月」元就大に感じて圍を解て引返しけり

○輝虎武藏の私市の城をかこまれし時此城の後大なる沼有て堅固の地なり本丸を外より見ゆるやうに築たりけるを打巡り見られしに本丸より二の廓にうつる廊下の橋すのこにて作りたるに地白のかたびらきたる人の影水にうつらひ見へけり其比女の多く着たる物とぞ輝虎是を見る事三度に及べりかゝれば本丸に人質の女童をこめおさつると察しやがて柿崎和泉に下知して大手を攻させられけり城中ありや唯今攻らるゝといふはどにわれ先にと防ける其ひまに近きあたりの民屋を壊ち筏にくみて後の沼に打いれ開の聲をあげあめささけふ本丸の女童大に驚きさわいで二の廓をさして逃まよふ大手に有て防ける兵どもさ

てハ内通の者ありて本丸を打破られたると思ひ或ハ自害し或ハ降人とある輝虎の謀によりて力を勞せせしめて城忽ち落たりけり

○輝虎と北條と武藏の忍にて陣を合す此時太田美濃守資房入道三樂ひそかに謀を北條に通せ輝虎かくと聞て馬副の者も具せし唯一騎三樂が陣に行て三樂が三男安房守十二歳ありしをひしどとらへてよくもおひたちつるよいざわが子よせんとてうちつれて歸られけるに三樂が軍兵ども其猛威に恐れて手さすこともなかりけり是より三樂も誠心服したりけるとかや

○今川義元尾張國大高の城を頼殿三郎長持を置けり織田信長も所々に城をかまへ丹家ハ水野帶刀善照寺に佐久間左京中島に尾川鷺津に飯尾近江守宗定又丸根に佐久間大學助盛重をおきて其外寺部舉母廣瀬にも皆あり大高ハ兵糧を入なば鷺津丸根に貝を吹べし寺部舉母廣瀬の皆より馳集り丹家中島より後結めせよとぞ定られける義元東照宮のもとに使をもて大高に兵糧を運入させたまへと東照宮圍入れて打たちけるを酒井石川等信長の手あてゆるしく中々大高に兵糧入ん事思ひもよらせとせども聞入れ永祿二年四月九日の夜半に大高鷺津丸根をぬきになし寺部の皆へおしよせよと下知し東照宮ハ八百計の

六 兵をひさる兵糧を馬につませ大高の城二十町ばかりわきにひかへけり先陣寺部に向ひ一の木戸口打破り火をかけて又梅坪にねしよせ三の丸まで攻入り火を放て焼たつる其焔天をてらし関の聲ひびきわたりて聞へければ丸根鷺津より是を見て三河の敵はるくどふみ越て攻入たるのいかさま故有と覺ゆるぞとく後詰せよとて寺部梅坪にかけ向ふ其間に東照宮ををどらせたまひ米おはせたる馬千二百匹打つれて事なく大高に運入させけり人々今夜の謀畧及ぶべきに非ぞと申ければ東照宮の云ふに兵法に神速を貴といひ又其の不意に出るといへることあり我れその不意を伐つなりと其の天性人にすぐれたると如斯此十八歳の時な

○永祿三年五月今川義元大軍をひさる織田信長をうつ東照宮此の時陣せさせ給ひ丸根の砦を攻おとし給ふ今川家の軍兵も鷺津を攻落し義元桶はさまに着陣せらる信長の素より鳴海に打て出防戦せんとの志なり老臣共大敵なれば清洲を守り賜へと諫れども聞入を酒宴して猿樂に羅生門の曲舞をまひせられし時敵既に攻來ると告來る信長少もさわか老人間五十年下天内を競れば夢幻の如しといふ處をおし返しうたひて忽螺をふきたてさせ物の具して主従僅よ六騎歩卒二百人ばかりかけ出で熱田の宮に詣で關文を神殿に納らるる中に軍

兵追つゝ來りけり旗をまばらせ間道なる笠寺の東の道を一文字にすゝむで山かげより桶はさまに打向ふ義元は駿州の先陣打勝たりと悦び酒もりして有しに折しも天候にくもり夕だちうつすに似て風雷はげしかりければ信長の兵かゝり來る物音も聞わかき不意の戦にあわてたる計なれば義元の綱代の興を信長見て敵の旗本疑なしとて追たてて戦れしかば義元も返し合せて戦はれしを服部小平太鎗にてつき殺し毛利新助其首をとりたりけり
○義元討死の時東照宮へ大高の城におしせしかば蒔屋の水野下野守信元淺井六之助道忠をもて桶はさまに義元敗軍命をおとされぬとく岡崎へ歸らせられ然るべしと告しかば聞し召下野守のわが母の兄弟なるの誰もしりたるよされども今の敵とわかれたる中なればもしやわれをたばからんどの謀なるをしらで此城を明退なれば逃奔たりといはれん事弓箭とる身の耻辱たるべし淺井ををしとめ置さて味方の告をまちて後こそ參河へ歸らめと仰有ける處に夜に入て岡崎より鳥井伊賀守忠吉義元の變を告奉りたるを聞し召此上の兵をかへすべしされども夜闇くて亂るべしとて月の出るを待て城を打出させ賜ひ淺井を郷導に用られ池鯉鮒の驛につかせ賜へば蒔屋よりも討て出所々一揆起りけるに淺井馬を乗よせ水野下野守使者淺井六之助案内者たるよし大音に呼びければ皆道を開きて恙なく夜中に大樹寺まで引取

せたまひぬ翌日岡崎に歸入せたまひけり是より東照宮の信義厚き事に入々なづき従ひける
 ○甲斐のしのびの者數十人信玄に叛く事有て山小屋にたてこもる信玄謀にてたやそく討ど
 らばやと思ひ残り居けるしのびの者に城中に忍び入るにいかなるが入がたきやと問る、に
 内の守りきびしく夜廻りの聲しげく其体あらひなるのかこたりもまた料り易くいといふ信
 玄いま山小屋にしのび入らんいかにと問るゝにかの者ども既に能其理をしり静りかへり
 て音もせせいへば其便を得せと答ふ信玄それより山小屋に向て陣し守り甚きびしく夜廻り
 透間なく呼らせたり日敷を經てやよおこたり出來ぬる時山小屋より夜討に出けるを素より
 謀りたる事なれば伏兵をおきて討どられけり

○鹿島傳左衛門といふ者伊豆の人なりわかき比武名有けるが後に髪を薙て久閑と稱し伊東
 よ引こもりて居たりけるを信玄聞て三千貫の地をあたへて招けり久閑われ年老たり何の爲
 に奉公すべきとて出ざりけるを尋問べき事ありとてしひて呼出し春より秋まで夜々軍物が
 たりせさせて聞れ自筆とりて是を書しるされけり信玄四方に大國の敵ありて威名をふるは
 れしもかく心を用ひられし故にや

○永祿年中備前上道郡龍口山の城に最所治部元常と云者あり此時浮田直家既に浦上を滅し

沼の城に居て元常と烟類なりしに元常毛利家にかたられ直家に背く直家うち滅さんと
 思へども龍の口の峰高く大川麓に繞り要害よかりければ力攻にして落べきやうもなく矢津
 に砦をかまへ軍兵をこめ置たり直家岡郷介といふ謀ある者に密に手だてをいひ合せある時
 直家郷介のしかくの罪有からめ來れ首を刎んといはれしかば討手の士行向ふにどく出奔
 してけり直家いつはりて怒る事大方ならせ郷介の備中にかくれ居たりけるが西郡の中にて
 乞食の老女の道にふし居たるに立よりこのそも不思議にも恙なくわのしけるよ年比志を盡
 し尋まらせしに行わひぬるこそうれしけれされど淺ましの有さまやさぞ見わすれ給ひた
 らん幼き時立わかれなつかしの母うへよとてつれ歸りぬ乞食の女の怪しき事に思へども俄
 にゆたかなる躬に成けれはしらぬ体にてぞ有けるや、有て郷介龍の口山の川向ひ金山寺山
 の谷山船山の城主須々木豊前がもとに仕へ尋ね出せる乞食の老女をおのが母と名づけて人
 質に出しけり須々木の故有て元常と不和なりある時須々木が東國より求得たる黒の馬を盜
 み出し打乗山下へ馳下る城中より何とて馬に乗るやと呼れども耳にも聞入らず牧石川原を東
 へかけ行けれバ須々木も矢倉に上りこれを見てにくき奴哉討とめよと下知しけれどもどく
 川を打わたり龍の口の城に乗あがり船山の須々木が士にて候故なきに死罪にあひすべき由

○二
を人のしられるも、遁れ参りていわれ見給へ追手の者ども川向にみちてけり城中にかくさ
れ賜へといひければ元常先山下にかくしおさけり須々木が士ども岡に誑されたるをいしら
せかの乞食の老女を川原に引出し歸らせの母を殺せしと聲々に呼びけり岡あの老女の母
にてい今歸りたりとも母子一所に死ん事定りたりとも乗べきいのちを君に奉り此憤りを
散じなんといひける中に彼女をバ礫にして殺しければ郷介悲み怒り母の仇目前にありいか
にして此恨を報ゆべきと齒をかみてなげきければ元常も心ゆるしてけり岡あくまでさか
しくしき者なれば年月経ぶる中に元常が密謀をも聞計に愛せらる岡今の時を得たりと直家
に日を定て矢津の砦の軍兵を龍の口の本丸北の川向に出され小舟をかくし置れよと告やり
て相圖しけり本丸の北の方に閑所の有けるに元常軍評定する所なり其夜も元常の此所の欄
干により居たるを岡つとよわりて引くみて下にころび落るかねて思ひ設たることなれば墜
つく所にて一刀刺し其身もうち損じければ元常が首をとりかくしをきたる小舟に乗り遁れ
得て直家のもとに歸る元常死して後ち竜の口の城落たりければ直家軍兵を入れかへて守ら
せけり

○浮田直家近國を攻とらんとす毛利元就備中松山の城主三村紀伊守家親に下知して美作の
三星の城と攻させらる直家三村と戦ひなば隣敵其隙によせ來るべし謀をもて三村を討ばや
と思ひ遠藤喜三郎といふ新参の士を近づけ汝の三村成羽に有ける時汝も成羽に有て能見知
りたらむ美作に忍行き三村が陣に入て討ん事をたのむ所なりと云ければ遠藤三村のたやす
く討るべき者に非ざされどもかゝる仰を承る事面目なりしのび入て見んものとして作州に赴
けり弟の修理も兄の今度萬死に一生も有べからせ同じ枕に死んとして是も打つけり永祿六
年三村の穂むの興禪寺といふ山寺に陣してありけるを遠藤兄弟夜にまぎれ後の竹林の中よ
りのび入椽の下にかくれ夜ふけてひそかに障子の外に立より内をさしのぞくに家親柱に
よりかゝり居たり天のあたもる所よと鉄炮をさし當火蓋をされ火なの火消けり喜三郎
あされて居しに修理つと外に出夜廻りの人にまぎれかゝりのかたへを通りさまに羽折の齋
に火をつけ高聲に番の者どもいましめるとの所よゆきて兄が火繩に火をうつせばやがて三
村が胸もとをうちぬきたり其鉛子のあと今に柱にありとかや此時三村がかたへ三村孫兵衛
親成といふ老功の兵有けるがちつともさわがせ人々しづまれとて屏風を家親が前にたて外
一の体を聞にしづかなり扱の夜討にてい無りきとて物見を出すに三星より打て出たるけしき
もあし親成下知して今夜備中に引返すべしとて松山に歸りて後家親が死したる事を人皆聞

たりけり成親なかりせば大に騒で敗北すべきにと人皆いひあへり遠藤のよどの竹林にかゝれ居しが三村の死したりと覺ゆるに餘りにしづかなるの心得ぬ事と思ひながら忍びて出けるは鉄炮をわすれたり後にさうたへたりと讒れんも口をしくて又立歸りしのみ行き鉄炮をとりて兄弟共に備前に歸りけりその後直家兒島の常山を攻んとて毛利家の大將小早川伊豆守光重に三村父子元親相加り成羽にて勢揃して六月四日山村兒島に陣し二手にわかれて先陣浦兵部宗勝用吉より宇藤木にかゝりておしよせ六日の朝大手の木戸口へ攻よせたり元親の従弟三村高德の後巻をたのむべき味方なく殊に累年毛利家に弓矢をとりし三村家の謀主なればのがれんと思ひいこそとて嫡子源五郎高秀と共に鉄炮をうち出す高德の弟小七郎高重の箭つぎばやに弓を射出す寄手此三人に防がれて手負ふ者あまたあり七日の曉に及て城中最後の酒宴の聲城外に聞へければわれおどらじと攻よせたり高德の母我先さき立んとて柱に刀の柄をひすび付走りかゝりつらぬかれて死しぬ高秀十五歳御あどに殘らん心がりならんといひて腹を切ぬ二男八ッに成しをひきよせて刺殺しぬ高德の妹なりしが藤州鼻高山の城主の高德の弟なればそこに落ゆかれよといへども思ひもよらぬ事よといひ捨て母の買れたる刀にて乳のあたりをさし通し同じ枕にふしたりけり高德の妻の卅三歳あるが

弓箭どりの女房と成て最期に空しく死する事や有る三村が一族今を限に一軍せんとて紅の薄衣を甲の上にして薙刀れつとりて出けるを局の女どもおしといひれば早とく立忍びて命を全うせよ敵一人をも討とらせして空しく死するやうやあるとてふり切て走り出れば此上の誰かのこらんとて立てたる長柄の鎗をとり突て出る高德の恩顧の士八十三人今日を限に切て出て浦の七百計ひかへたる真中に死狂ひに戦ひければ討る者多しされども小勢にて戦ひ疲ければ高德の妻兵部をよびかけ腰なる刀をぬき出し是の國平が造れる刀にてわが家重代の物なり父にそひ申心にて身をはれさぬこそ武名聞ある兵部殿にまゐらざるありといひて城に歸り自害す高德も腹を切れば弟の高重介錯して其の身も腹切りぬ寄手亂れて首共をとり鞆の津に送りけり常山の山上今に其城跡あり

○永祿三年謙信八千の師を相州小田原に出さる關東の諸將皆々なびき従ひて十五万に及べり旗本の高麗寺山の麓に陣し先陣太田三樂の小磯に陣し北條の兵戦のせして城に引入ければ蓮池まで攻入りそれより鎌倉に赴き鶴岡の八幡宮に詣らる上杉憲政の長臣等も皆群參す成田長安警固の者と争論の事あり誅罰に及ぶべきといへどもこれを宥らる成田謙信の怒を恐れ病して出せ同年六月謙信上京せらる六月廿八日京都に至り七月七日光源院殿輝に謁し

四二

吉光の太刀黄金三十枚を献じけり光源院殿より管領の任又諱の字を賜り兄弟の義に準せらるるの命を承け越後に歸られけり

謙信相州より攻入る時京都より近衛關白前久公を進られて管領の職を承る事此の時より始るとめしへり

○謙信小田原の遺池まで攻め入り明日の鎌倉に赴べしとて軍評定ありし時新發田因幡守治長其の頃十五歳なりしがすゝみ出てかゝる手くばりならば一定味方敗北すべしと申す謙信怒りて舌のやひらかなるまゝと物ないひそといわれしかば治長居直り謹でけふより君臣の義を絶せたまひらば小田原に馳参り北條家の先陣して君を追討まゐらすべし酒匂川のこなたにていたやすく討とり奉らん物をと申す謙信其の時色をやりらげ天晴剛の者よ神妙にも申たる哉明日の後殿をせよと命せられける治長軍だてしかくそとてやがて事よく小田原を引とりたり治長のち景勝の世に及て二心ありければ景勝是を討るゝに新發田五十野両城を守りて三年を経て城落ければ治長染月毛といふ馬に乗三尺五寸有ける光重の刀を抜持て大軍の中に入れ入討死しけり此の馬のさめめて色白き尾かみなりしに茜の汁をばけにて染たれば年月を累て後直紅の糸とみだしかけたるに似たりしとかや井筒女之助

此の馬を得て乗しといへり

○永祿四年七月甲州に謙信より入おかれし間者ども越後に歸りて信州の士二心ある者あまたありしを五月上旬信玄川中島より赴て死罪に行われ是れによりて疑を生ざる者多し又和利が嶽の軍に士卒多く手負討死しける由を告げるを謙信聞て三軍の禍の狐疑より生ぜといへり是一つ勞たるに乗せべき是二つ八月に至て師を川中島に出たすべきとて士大將を盡く呼あつめ各謀を問ひるゝも存ざる旨を書し出して出しけるを擇わかちて上中下の三等とし其の下策を用ゆべしといわれしかば此れ如何哉と怪しみければ謙信のいづく上策の既に敵の察する處にてわれを待つべき謀かこたらざる由を聞待設たる所へ攻め入らんといかてか勝べき中策の數年評議せし所なり下策を用ひて貝津の城をふみ越え西條山に陣し姑く敵の後巻を待ん是れ兵を死地に陥るに非せや信玄おし寄ば其の時勝負を一時に決すべしもし信玄貝津の城に入らば圍み攻ん又信玄川中島に陣とて吾歸路を塞ぐならば吾が軍雨の宮の渡りを涉らせ直に貝津の城に向かひて攻破らんに信玄必救來るべし其の時又一戦してかなはずば討死せし是れ下策を用ふるいわれありとて八月廿四日西條山におし入り陣したりければ信玄後巻して暫く對陣せられしが廣瀬のわたりを越て貝津の城に入たりけりか

五二

六二

くて九月九日の晩謙信士大將をわづめ明日信玄必ぞ打出て戦ふべきよ今夜雨の宮のわたり
六をさか寄して其の不意を撃べし用意せよとて寅の刻に至て川中島へ兵をかし出す先陣の柿
崎和泉後陣の甘粕備後なり果して十日の卯の刻をかりに信玄一万餘の兵を率ひ筑摩川に打
て出て善光寺の要路に待たれし處に謙信軍をすゝめて一と手ぎわの合戦を始む謙信旗本眞
くろになりて切かゝり信玄の旗本をかし崩し甲斐の兵討るゝ者數をしらぞかゝる所に西條
山の甲州の軍兵一騎がけに馳來るを見て謙信兵をまどめ勝を全せられたり甘粕備後々陣の
兵をすゝむるを見て信玄の旗本ふみどゞまりたるが又亂れたちて廣瀬のわたり引退く甘
粕是に因て西の川邊に陣する事三日にして引どれり

是れ謙信實記に據りてしるす所なり川中島の戦異説多く分明ならぞ一説に天文廿三年八
月十八日川中島にて戦あり謙信旗本半町討敗北する處に宇佐美駿河守定行横あひにかゝ
り信玄の兵大に亂れ御幣川へ追ひ入れられ討るゝ者多し信玄の川乃中に馬を立たる處に
謙信緑の曇子にて包たる肩衣にててをさし白き手ぬぐひをみて頭を包み三尺計の刀を抽
もち虎のあれたる如くなる鹿毛の馬よ打のり信玄のいづくに在やと呼る原大隅信玄何事
に爰にゐるべきやうらたへ者よと罵り鎗にて突けれ共つき外す謙信川へ馬を乗こみ信玄

にかけよせ三刀まで斬れしに信玄持たる軍配團扇も切をられ手負て既に危かりしに原大
隅萩原彌右衛門鎗をどりのべたゞみかけて謙信をたゞさけるに馬のさんづにあたり馬川
の深みに飛入ける其間に信玄の馬副の者ども信玄の馬を川岸に引わけて物わかれしたり
と也宇佐美駿河守謙信より賜はりたる感状も天文二十三年八月十八日川中島に於て横鎗
をみて信玄のはた本を突崩したる由のせられたり

○謙信の長さのみ高から老左の脚に氣腫有つてあゆむ時足をひく如く見得しとなり物の具
する事の掛く黒き木綿の胴服を着鉄にて造たる小き車笠をかぶり塵とる事も掛く青竹を三
尺計にして杖の如く提げもちて士卒を下知らせられけり

○永祿五年三月北條氏康父子武田信玄父子數萬の兵を以て武州松山の城をかこまるゝと聞
謙信八千の兵をみて後卷せられしが十五日厩橋に着陣あれは城落けると聞へければされば
みれより山の根の城へおしよせ打破らるべし敵後づめするならば北條武田父子四將の大軍
にうち合せて軍せん事尤望む所なれといふより早く刀根川を打わたりうけたる船橋を切流
させ山の根の城におしよせ忽攻おとし小田助三郎を始として皆あて切にしてけりかくて
七二 使を四將の陣にやりて松山の城に向われし由を承り出向に城早く攻とられ軍をさる事なく

て弓箭の禮義に背き唯今山の根の城を攻るほどに後卷せんと送られしかば氏康かゝりて軍
 せんとす信玄のいはく今勝たりとも謙信に四八してかちたりと人に誹られん事口をしき
 とてしひてとめてきて止けり信玄實のしからせ日頃謙信の勇氣倍々にても戦ひがたさに
 松山の城落て怒をふくみたれば其鋒にむかひがたく虎を恐るゝが如くなりし故とぞ
 ○永祿六年十一月十五日一向宗の黨と厚木坂にて軍ありし時一揆より蜂谷半之丞渡邊源藏
 眞先にさゝみ味方に上村庄右衛門黒田半平鎗を合せ渡邊黒田を突倒したるは味方さうひ
 かゝりて追たつれば蜂谷も渡邊も引退て細なうてにかゝるを水野藤十郎蜂谷いかにのがぞ
 まじと詞をかくれば蜂谷ふみとゞまりにつこと笑て藤十郎いかでかわれらに敵すべきいざ
 参らんとて鎗を地につきたてゝ手につばさをばさかけさらばといふ水野もふみとめて近づ
 き得せ蜂谷さればこそとて又しづかに引退く東照宮馬を乗出され蜂谷め返せと詞をかけら
 るれば跡をも見せして逃くる松平金助のまをまじと追つむれば蜂谷ふみとまり殿なればこ
 そ逃たれ御身にひくまじいといふて取つてかへし金助を五六度もつきしんぞけたりしが
 蜂谷鎗をなげづきにして金助を突倒ふす東照宮降谷めとて又御馬を乗つけさせ給へば蜂谷
 引返し逃退けるとぞ

○永祿七年正月十六日三河一向宗の黨と針崎にて終日のせり合あり中根喜藏と名のりて一
 番鎗を合のす一揆の相手の渡邊半之丞なりしが鎗をすて刀をぬきて飛込たり中根も刀を扱
 互に手負ひ相引にしける處に鶴殿十郎三郎渡邊を目かけ追かけたるを渡邊が父源五左衛門
 たすけ來りて鶴殿を突き伏たるを東照宮御覽じて御手づから鎗を提給ひ鎗ぐみたまひて突
 伏給ふろそ手なりまかば引き退くを見て石川十郎左衛門渡邊源五左衛門鏡ひかゝりて東照
 宮に向ふ内藤甚市弓とり直し源五左衛門が股を射貫ければ半之丞父をかき負て引き退きそ
 れより物わかれせり内藤の渡邊の甥なりけれども御急難の時にあたりける故射倒したると
 なり

○謙信信玄と和平を結んとせられし時長遠寺の僧を使にせらる此僧の遊説の人なり謙信か
 の僧に甲斐の士に向井與左衛門といふ者やあると問へるにこれ有と申す又創の痕や有る
 と問へるに面に刀の癩有りと申す謙信のいづく川中島の戦ひに名乗かけてぬれを後より
 つき通す處をふり願て一と刀斬たりしぞかしよめたすからじと思ひつるにながらへたるよ
 などて萌黄の胴肩衣に鎗のあと有るをとり出し書簡を添て向井よおくられけり此れを世に
 かへり感状といふ其の書中に川中島乃事をのせられたりといへり

三

○尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀駿河に兵一万をうへて備中經山の城を攻させらる此城の中島加賀守が子大炊助元行が守る處なり元行僅二百計の兵なれどもちつとも恐れず頼宮治郎左衛門鸛見九郎二郎に百姓ばら二百人そへて寺屋敷といふ地に伏おき阿部左衛門二郎鸛見五兵衛の鬼ヶ城といふ處にかくし置きけり敵侮ておしよする時門を開て打て出相圖の貝をふけば鬼ヶ城の伏兵後よりまがり又頼宮等百姓に番旗を立てさせ竹鎗をもちて闘乃聲をあぐる尼子が軍兵其前後に敵有りて助け合んとすれども道細く谷深くなだれ落てみだれけりされとも攻具を設どりかこみしに元行の母物の具の上に羽折を着刀を横たへ女房二十人計相具し元行本丸ある時の母出丸を巡り元行出丸を巡れば母本丸を守りて士卒の息を戒む或る夜風雨甚しかりければ元行百人計にて夜討に出半を道に伏置たりかくて亂たれ入り関の聲をあげ火をかけて靜に引き返る處に敵追來れば思ひもよらぬ徑のかたへより伏兵とつと起て敵三百餘うち取たり元行に防がれて尼子の軍引返して復政る事なかりけり

○東照宮今川氏實と御不快の事起りし時兼て駿河に岡崎三郎君といめおかせ給ひしを生害すべきよし聞ゆ石川伯耆守數正此の由聞ていとけなき御身の失れさせ給ひんに御介錯に侍ふ人なからん事こそ口惜けれよしと數正罷向て冥途の御供よこそ参らめとて唯一人

三

駿府におもむくかゝる處に今川家の侍大將頼殿が子二人生ごられ氏眞なげき給ふと聞さわか君の御外祖關口刑部大輔と相はかり若君返させたまひんに頼殿が子返しまゐらせんと望む氏眞悦ひてやがて若君を返し参らす數正肩にのせ岡崎に歸る三方原合戦の時數正の信長の加勢として遠州に向かひけるが武田おしよぞると聞さつて返す美濃の守護土岐家に有といふ淺岡の某弓箭をとりて剛の兵と聞えしかば彼が許に行き此の度本國に歸りなば必ずうち死仕るべし數正弓箭をとり打物とりてかたのことく軍にあふ事度々なり然ども軍に臨むの日躰の緒ひすばん様故實ある事と承りていまだ學せされば死後に躰の緒とせる骨法いらざりしとかたきに笑れなん事骸の上の耻辱なれば敵を率り度とて習ひ傳へ夜を日につぎて馳下り味方原の軍にも殊にすぐれて武勇をふるひたりけり其の後太閤に欺れ岡崎の城を出て上方に登り豊臣家に奉公す太閤和泉をあたへ武者奉行を命せられぬ

○東照宮三河の一の宮の城に本多百助信俊を守りにおかせ給ふ永祿七年五月今川氏眞二万余の兵を以てかこまれけり其中八千を引わかちて武田信虎を大將として後卷の防にせられぬ東照宮かくと聞し召早うち立て一騎がけに馳むかひたまひんと見えしかば敵の味方に比ぶれば十倍もあらん殊に信虎の聞ゆる勇將と老臣ども諫けれども其理の然るべからんさ

二 三
れども人の貴賤にもよらじ信義の二ツによりてこゝ身をたつるならひなれ敵の城攻おとし
其まゝ壇ち棄なばさるゐらんを既に味方を入かきて今さら敵大軍なればとて驚くべきや主
の大事の従者が救け従者の危難の主のたすくるの弓箭とる道なり今の後詰に打まけ屍を戦
場に暴すとも運の盡ぬる處なりと仰ければ是を聞く人々の頼もしき大將かな此殿乃御
爲にの命をすてん事露ちり計む惜からじといさみすゝむ其勢に乗り二千計の兵にて後づ
めに打向のせ給ひ信虎の八千にてひかへたるをよそに見て眞直に城ぎひにおしつけ百助を
召具し城を出て引返したまふ百助今日の戦の身にかけてはげむべくとて手の者四百餘をも
て信虎の軍に向ひ勝利を得たり酒井左衛門尉忠次石川伯耆守數正牧野右馬允康成の後殿と
なり東照宮事なく歸陣せさせたまへり此廿二歳の時なりと

○永祿八年三好義繼松永久秀大和河内より京に打入五月十九日辰の刻光源院殿の館をかこ
み亂れ入れれば防ぐ者ども或の討れ成の自害す沼田上野介と福阿彌といふ者敵の相じるし
竹の葉を腰に挿て外よりさざれ入り光源院殿の御前にまゐり我等二人を始として防ぎ箭仕
り思ふほど戦のん其の間に日比愛せさせ給ふ早足の御馬に召れ東川原にかけ出させたまひ
御運をひらかせ給ふべきと涙を流しやければ尤忠義の志神妙にも申しつるよされど

も汝等討死したる跡に醜りとゞまるべきやとて散々に防戦ひて遂に自害有ける其さりに
五月雨の露か涙かほと、ぎそわが名をあげよ雲の上まで

自ら筆を把て書殘し給ひけるとぞ光源院殿の弟に鹿苑寺の周壽といふ有しが平田和泉守
といふ者迎に遣し北山より出たる道にて討とりしに供せし十三四の童小川の佳人美濃屋小
四郎忽にかの平田を討とりければ世の人ほめあへり

○三好修理大夫長慶の細川讚岐守持隆の臣あり三好の其先甲斐の源氏小笠原の族にて信州
に住せしが三好長房の阿波の守護として世々阿波に在り京都に攻上り細川晴元にて五畿
内の事を執る第二の弟豊後守之長と稱す其弟安宅攝津守冬康其十弟河一存といふ天文二十
一年實休持隆を弑し其後室を已が妾とし悪逆を恣にす永祿五年佐々木義彌京に攻上りし
かば万松院殿の八幡に在て防給ふ畠山尾張守高政佐々木にをみし紀州より泉州にうち出る
により實休阿波より渡海し岸和田の東久米田に陣す久米田寺に橘諸兄公の墓あり實休墓
を堀石の櫛をとり出す聞人眉をひそむ三月五日高政兵をわかち先陣を額が原におし出せ實
休山上より見おろし自眞先に進で高政が先陣を打破る檜木山に伏おきたる高政の兵に根
三三 來法師相加り不意に切てかより三木内匠一番鎗を合せ實休が先陣敗北しけり實休の床机に

四三 腰かけて引な者共と下知し散々に戦ひ残り少く討れしかば實休をば根來左京打とりたり實休討死の刀の光忠が作也信長光忠が刀を好二十五腰まで集られしが堺にて第一の好事木津屋と云へる商家にかの光忠の刀を残りせ見せて此の中に實休光忠や有と問へると一腰とり出して是をらんと云ふ信長何とて見しりたるやと問ると切先の少缺て候の實休討死の時根來左京を劔られしに臨みてに當りてかけたると承りと申せば信長よくしりたりといわれしとぞ

○毛利元就豐前門司の城のかこみを解て引返されし時大友宗麟の士大將瀧田民部只一騎波うち際よ馳來る小早川隆景の士浦兵部宗勝船をさしもどし陸にあがり瀧田を討とりて歸る遠く是を見る人誰ならんといふに元就只一人陸にあがりたらば必き兵部なるべしといわれしに果してたがひざりけり井上伯耆と浦と二人勇名世も高し二人ともちぎれたる物の具をきたり又定りたる得道具もなく瀧田を討し時め人の鎧をとりて返せしとぞ

○佐々木と三好と軍す佐々木の亂に陣し三好の赤山に在り三好使を以て中村新兵衛といふ剛の者ありわれと思はん人あらば出されよ人ませませと戦ひせんといひしかば佐々木が内にて江洲にかくれなき永原安藝守といふ者をすぐり出す修覺寺村石地獄の前出にあひて永

原の直鎗中村の十文字の鎧にて散々に戦ひけるが永原を突伏者をとる世に鎗中村と稱けり○相摸の深澤の軍に北條家の先陣の大將北條左衛門大夫綱成敗北してすてたる旗をひろひ取て譏りけるを信玄聞て逃走きたなく棄たるに非じ必き地利をはかりて戦を心がけたるならん旗を棄し旗さしの罪なりいかでか嘲りわらふべきとて眞田一徳齋が末子の源次郎に左衛門大夫が武勇あやかれとてかの旗をわたへられけり練絹三幅くちは地黃にて八幡といふ二字を染たる物にて世に地黃八幡と云へしなり左衛門大夫かくと傳聞て信玄の詞にて恥辱を雪たりと悦けり

○永祿十二年佐々木承禎柴田勝家が守る所の長光寺の城をかこみて攻る遂に惣がまへを打破る勝家本丸に在て爰を専途と防戦ふ郷民佐々木が陣にゆきて此城の水の手遠く遙なる所より水をとりそれをとり切る程ならば城の保つべからぞと告しらせければ承禎悦て水の手をとり切たり城中是に困めどもよわれる色をあらわさず承禎これを見ん爲に和平せんとて平井甚介を便にして城中よ入たり平井勝家に對面し手水を請ふ缸に水盈たるを小性兩人してかき出たるに平井手を洗けれを小性殘れる水を庭にすてたり平井歸てかくといへば事のがびたる故にあやしみのあへがかくて城中既に水竭ければ勝家明日の討て出切死にせん

六三
とて諸士をあつめ最期の酒宴す残れる水を問へば二斛計入へき缸をかき出せさらば此間の
濁をやめよとて人々涙のみてければ勝家眉尖刀の石づきにて缸を碎たり夜明方に門を開き
打て出る佐々木思ひもよらざれと大に敗北したり勝家首八百餘級を得て岐阜に献せ勝家の
猶は長光寺にあり信長感状をあたへ賞せらるゝ事大方ならず是より勝家を缸わり柴田と世
に稱えけり

○信長勝家をめて先陣の大將とす勝家固く辭すれども再三去ひて後仰を承りぬとて退出
する時安士の城下にて信長の旗本の士に遭たりしに行あたれり勝家無禮を責て遂に切てそ
てたりければ信長怒られけり其時勝家謹んでやけるのさればこそ先陣をば是非とも辭し申
たるなれ子細なくて辭しやべきや先陣の大將たる者威權なき時の下知行のれざる物なりい
かにといへば信長詞あかりけり

○三好家滅し時料理庖丁の上手と聞えし坪内何がしといへる者生となりしが放し四
にして有しよ年経て後菅谷九右衛門に賄やける市原五右衛門坪内の鶴鯉の庖丁の云にも
及ばせ七五三の饗膳の儀式よくしれる者なり其上子ども兩人の既に奉公せばゆるされて
厨の事を司らせやさんといひけるを信長聞て明朝の料理させよ其鹽梅によらんとそこで

坪内をして膳を出させけるを信長食して水くさくさくといれざるよそれ誅せよと怒られしか
ば坪内畏今一度仕らんそれにて御心に應せまば腹切んといへば信長許容せられけりさ
てその翌日膳を出しけるに味のおまき事務の外によりけければ信長悦て祿あたへられけり
坪内辱さ由やてさて昨日の鹽梅の三好家の風なりけさの鹽梅の第三番の鹽梅なり三好家
の長輝より五代公方家の事をとり日本國の政をとりはからひぬれば何事もいやしからま
其好む所第一等の鹽梅を昨日奉りければいやしみ給ふ事ことわりなりけさの風味の野鄙な
るるなか風なりそれよて御こころに入たるなりといひければ聞入信長に恥辱をあたへたる
坪内が詞也といひあへり

○永祿十二年尾張の清洲にて東照宮信長に始て御對面の時他の刀持たる士式臺にとめたる
に植村庄左衛門家政御刀を持って通らんとぞこれをもおしといひれば徳川家の士に誰が下知
にて止るやといひそてふおしとほり御前の白洲に参りたるを信長見て何者ぞと問るゝに東
照宮わが士なりと答給ふ信長植村の聞ゆる勇士也今日の會の大事に非ず心安かるべしあつ
をれよき士あまだ有るとて感せられける

七三
○永祿十二年信長伊勢の國司北畠中納言具教を大河内の城に攻る數月経て城強く去てちつ

ともひるまき信長織田掃部介を便にして信雄を以て具教の子具房の養子として和平すべし
 といはせられしかば人質をとるに同じとて和平事なりぬ信長岐阜に歸り二男茶釜丸十二歳
 ありしが士あまたつけて伊勢に行大河内に至て國司と對面し船江にあり具教の世を具房に
 譲りて三瀬といふ所に閑居せられしが尙信長に背く志ありければ信長國司の家の者共をか
 たらひ天正四年十一月廿五日三瀬にて弑しけり具房の養父なれば大河内におしこめ
 て置れけるが天正十六年に死去具教の弟南都東門院の住僧なりけるが具教弑せられける
 を聞南都を出て伊賀に赴き還俗して北畠具親と稱し三瀬河股多藝小梨の諸士をかたらひ仇
 を報せんとすれども利なくして中國に流落し毛利家をたのみ備後の鞆に居たりけり具親兵
 を起す時天正六年信雄の兵波瀾峯の城を攻めんと六呂木山副波多瀬三郎此三人を生どりた
 りければ死罪にすべきと議せられまに三郎が容貌世にすぐれしかば信雄たすくべしといは
 れしを三郎聞て三人同じく生どられ罪又相同じ二人死して一人たぞかる事面目なし共に誅
 せらるべしといふ二人の年者ぬ惜むべき身に非ず三郎の仰に従ふべしとすむれども聞入
 る途に三人共に礫にかけらるる時に三人君の御爲に命をすつる事士の思ひ出面目これに過
 る事無しとて謠をすたひ物語して誅せられけり三郎此時十五歳をしまぬ人あかりしといへ

り玉井新次郎といふ者具親に心を合せ信雄に背し父兵部少輔と母とめに神戸にかくれ居
 たりしを搜出し櫛田河原にて礫にせらる織田家の刑罰仁者の道にあらま其暴逆終を冷
 せざる事尤ことわりなり

○永祿十二年今川氏實遠州掛川の城没落の時天王山にて合戦に大久保治右衛門忠佐敵をの
 き伏賜の新十郎忠隣に其首とりて汝が功名にせよと呼りければ忠隣十七歳なるが人のくれ
 たる首何にかすべきとて敵の中にかよりて首をとる後に相撲守とせしめ此人なり

○東照宮の内に高木主水清秀村越與三左衛門とて聞ゆる兵二人味方よはなれ細なつてをし
 づくと引退く處に敵十騎計追來る高木鎗おつとり直し一足引まじさぞと呼る村越弓に
 箭をつがひ鎗おきを射ん心づよく鎗をせよといひければ敵しらむゆる二人又引退くかくす
 る事數度に及べりかくて左右沼にて一騎うちの地になりてこ、ぞよき所といふほどこそあ
 れ高木ふみ留り先かけた敵をつき伏れば村越大音あげ其首とれといふま、に敵一人射倒
 す敵ひるむ所を高木いさみ進で又一人つき伏ければ村越も又一人射倒てそれより追ざれば

○北條丹後一尺四方の白練に黒き蟻を繪に書て指物にしけるを謙信見て汝がさし物のまり

○四

に小きいかなる子細ぞと問る、に丹後誠に味方よりの見えがたかるべしさのあれども進
むに先がけし退くにいつも後殿せんに他人の大なる指物も此小四半と敵の見る所の同じか
らんと存するなりとさせば謙信ことわりなりといわれしとぞ

○淺井備前守長政玉淵川をかぎりて齋藤龍興と軍する時長政五百計の兵をすぐり關原野
上の宿に火をかけ樽井の前なる小川に柵の木ゆひて待かけたり龍興一萬計にて出ると長政
聞て百人計を菩提の徑より敵の後へまひらせ自四百計を以て敵のおこたるを夜討にしたり
けり徑よりの兵もはせ來り思ひもよらぬ所より關の聲をあげしかば龍興内通の者あるよと
思ひあひて、岐阜にひき返す長政大垣の邊所々に火をかけさせければ龍興敵勝に乗て大垣
を攻るならんいざたすけよとて岐阜を出しかば長政やがて引返す時足輕の物になれたるを
三十人樽井の士民の家にかくしたり龍興樽井に入て士卒も疲しかば兵糧つかふておこたり
ける時かくしたる足輕ども所々に火をかけて焼たつる長政思ひもよらぬ所へおしよせて敵
々にうち破り龍興大に敗軍し是より長政を恐れて復軍する事無りけり

○丸毛兵庫助長住其の子三郎兵衛長隆龍興に奉公して美濃の多藝郡大塚の城に在り安藤伊
賀守氏家常陸介龍興と叛て大塚におし寄る兵庫父子三百計大塚より一里のまゝり出て陣し城

近き百姓老若男女をいひせかり催し手々に竹竿をもたせ大軍の体にもてなしつひに氏家を
撃破りしかば安藤等も又龍興に降参し丸毛父子に祿を増し感状をあたへられけり

○信玄駿河に攻入時朝比奈兵衛を始めとして軍する者なく今川氏實落られしかば信玄とく
今川の館に馳行て名物の寶ものども奪とり來れと下知せらる馬場美濃守氏房聞るあへぞ唯
一騎鞭に鎧を合て館にかけ入火をかけて焼はらひけり是室物ども奪とりて貪欲の師なりと
嘲られん事を慮りたるなるべし

○元龜元年の春大友左衛門督義鎮肥前乃龍造寺山城守隆信をうつ隆信和を乞しかば大友兵
を加へて肥前と筑後の堺に千栗といへる大川あり吉岡下総の入道宗觀といふ者龍造寺の大
敵なり勝負もわかれず故なく和を乞ひ謀あるべし千栗をわたらん事たやすからじといへ
ば義鎮も尤なりとて豊後の留守に置たる佐伯紀伊守惟教其子彈正少弼惟實田原近江入道紹
恩を呼寄六千の兵を二陣として千栗の渡に備へて川をわたる隆信はばかりて敵の引退ん
所を不意に撃んと謀しよ大友の設有る事を聞きて追ひざりしとなり

一四

○姉川の軍に信長の龍が鼻山を左りにして淺井長政に向ける東照宮の龍が鼻を右にして朝
軍が二方のまゝりに向へせ給ふ時小笠原與八郎氏助二千計先陣に進で川を渉る氏助が兵伏木

二四
久内中山是非之助吉原又兵衛林平六伊達與兵衛門奈左近右衛門渡邊金太夫照七人鎗を合の
せる中にも渡邊の朱の傘に金の短冊十八つけたるさし物をさし堤の上を進む信長見て其夜
召し出して天下の鎗なりといふ感狀に貞宗の刀を添てあたへらる殘る六人の者共憤て各
猶すゝむで鎗を合のせしかども島の中なりし故見とめられを候と申ければ六人共信長感狀
をあたへらる

○姉川にて酒井左衛門尉忠次先陣たり二陣の榊原康政なり酒井を始め小笠原與八郎菅沼新
八郎與平等川を涉てかゝりけるに岸高く上りかねたる處に榊原眞一文宇にすゝむで上りが
たき岸を無二無三におしあがり酒井が先にすゝまんとせるを見て酒井が兵おくれつゝ無念
なりと競かゝりて利を得たり東照宮榊原が二の手のしかた以來の手下也と仰ありたり
○姉川の戦に信長の大将坂井右近が子久藏十六歳にて討死す久藏の十二の時信長始て京に
入し頃近江北郡にて鎗を合せたる剛の者也三井角右衛門生瀬平右衛門二人とも久藏が首を
得たりといふ二人後關白秀次に仕へければ此事沙汰ありて三井がいつなりとて鷹部屋
にかしこめおきて罪に行れんとぞ三井のちを惜むに非ぞ人の功名を盗たる悪名の子孫の
恥とならん事口をしければ今一度詮議してたまのれ證據の淺見藤右衛門に問れば實否正

しかるべしと訟たり淺見を安土より呼れけり淺見の生瀬と久しき友なり三井との日頃中よ
からぞ不通なれの疑もなく三井がいつはりに定るべし三井感亂して淺見を證人にしたりと
誹笑ふ人多しさて聚樂の廣間に奉行列坐して雀部淡路守をみて尋問る淺見承り生瀬の年を
ろの知音也三井と不通なれば是非世の人の評せん事も迷惑なり他人に仰付られよと懇よ
辭し申す中よからぬ三井が虚妄をいふに心よからぬの理なれども證人にひきたるうへにと
く申せと勸らるれども猶辭し申す秀次聞て重て辭すべからせとなりければ其の時淺見今の
已事を得ぞ武義の論少む詐偽まじ坂井が首の三井がとりたるにまぎれなく又其のはたらき
も比類少く生瀬の何と存じ過たるにやといひければ一坐駭とてかく云人なくこれにより
て三井を赦て賞せらる生瀬の秀次に寵せらるゝの故に罪に及ばせ後京極高次に仕へて大津
の城にて武名をあらひしけり

三四
○信長淺井長政をうつ時長政が木造の陣俄にさわぐ体の見えしかば猪子兵助を物見にやら
れけるが又金松彌五左衛門をも出されけり猪子馳歸り敵の引退たりといひおぼはてぬに金松
乘歸り敵おしよせ來ると云すてゝ又先陣にゆいて鎗を合のせたり信長後に二人を呼て汝等
見し處のいかよと問るゝに猪子敵の荷つきたる馬を遙に遠く引のけし故に引退くと見るな

四四

りと申す金松承り見る處の猪子に同じくされども長政ゆゑなくして空しく退くべきやあしよせて戦はん爲と存せると申せしかば信長大にはめられけり

○信長越前より攻入時朝倉義景二万計の兵にて刀根山といふ大山に陣どり麓に信長の先陣ひかへ居たりある日信長井樓に上り敵を見わたし敵の今夜必を引退くべし先陣の者共なかこたりそと使を度々やりて下知せらる是を聞て殿のいかでかくの仰候やとん敵大軍よて山に據り地の利を得て且主戦なれば何餘引退べきとあやしみけり夜に入りても信長の猶井樓よ在て敵陣を睨で目もはあたせして有しが丑の刻ばかりにすのや敵のひくぞといふほどこそわれ螺ふきたてさせ馬に乗り先陣の大ぬる山のやつばふがゆだんしたるに旗本の者共功名せよとて眞一文字にすまれしが果して先陣のあかれて信長の旗本にて勝利を得られけり信長常におこたる者を大ぬる山とてわらわれしとぞ

○元龜三年信玄參河遠江に軍を出たし二股の城を攻落し箕形原に軍をすまひ濱松に織田家の加勢も有と信玄聞てはるるぐ來て客戦のすまじきとてあさへをおくべきやといふ處に三河武者城をおし出すと聞えければ一戦に及べしと備くばり有り濱松の軍兵日既に暮なんとすれどもいさみかよりて一軍すべしと口々に申す鳥井四郎左衛門物見して乗騎り

人々のいかに申とも今日の御合戦の然るべからず敵の大軍なり先陣に使をやり兵をあげさせ給へもし是非御一戦とならむ敵はつたの郷へおしゆかん處をしたひてかゝらせ給へと申そ東照宮聞し召汝の用にもたつべき者と思てけふの物見よりたるに何とておくれたるや目前に敵をおめくと通しての生がひもなしと怒らせ給ふ四郎左衛門承り目のあきたる故にこそ勝敗の利害をば見さのめて申御敗軍をしろし召御かゝりあらん殿の御心のまゝなるべきなり勝敗乃道を知ぬ人こそおくれ者よと以ての外に罵りそこをつと乗出し成瀬藤藏を尋けるに功名したりと聞 卽はれある討死したりけり

味方原の前夜手わけを定らるる時成瀬と鳥井と先後を争ふ事有て既に刺ちがへて死すべき色わらわれしをかたへの人をおしといめたるに鳥井成瀬に向ひて明日信玄と一戦あるべきなり織田家の援兵も來りぬ士の一人も大切の時あるに私の争論して死んぬ不忠あらまや二人共犬死して殿に損かけ奉らんより明日の軍は功名くらべして討死せんといかに成瀬につことわらひいしくも守されたる哉われも左こそ思へ明日討死せんいざとて酒くみかひし深更に及べり東照宮これをしらせ給ひて成瀬の信長の如勢の目付としてあら井本坂よ向ふべし鳥井の濱松先陣の目付せよとぞ仰られける二人は必死を期したれど鳥井

五四

も一所に在り二騎先かけて二万餘の敵に馳向ふ鳥井首三ツ取て成瀬も首三ツとりて行
 めひ共々打めらひて首をば抛すて又かけ向ふ鳥井又首とりて成瀬をとへを只今山縣が陣
 にかけて入て討死し敵其首をとりたりといふを聞て成瀬は先きだ、きしよ汝のどく歸りて
 朋輩にかたるべしと從者にいひそて信玄の旗本をさしてかけ入らんとせしを土屋右衛門
 が手の者どもとりかこみけり鳥井のすぐれてたくましさ剛の者にて三尺餘りの野太刀を
 打ちふり死狂に切て廻はる土屋が背を破よくだけよと斬たりけるに目眩て馬より落る多
 兵四方より鎗すくめにして鳥井をうちとりたり敵も味方もかしあへて惜みあへり
 渡邊半藏守綱も物見して馳歸り是る味方中々危く先陣をよび返へさせ給へとすすされど
 む壯士等いさみか、りて柴田七九郎大久保治右衛門す、みゆくを半藏ひらよ止めといへど
 む聞入を甲斐の先陣小山田に向て足輕をかくる軍始りて先陣亂れ足になりければ石川伯
 耆守數正馬より下りたち鎗を提げ一足も引まじと呼り一陣の士足各折しさて鎗ぶすまを作
 り待かけたり甲斐の兵競か、るを近々と引受一同に立わがりあい、と聲をあげて追かへ
 す外山小作一番鎗を合せたり日暮ければ甲斐の大軍進みか、る東照宮旗下の兵を率ゐて切
 てか、らせ給へば遠江の山家三方小山田追立られ敗れけり申の刻より軍始りて夜ふくるま

での軍に乗寡支がたくて崩れたちしに榊原の東の方西嶋に向て引退く信長の侍大將平手
 汎秀のいなどいふ所にて返合せ討死す鳥井四郎左衛門を始として河澄源五郎長谷川紀伊守
 加藤二郎九郎等逞兵三百餘人討れ敵しきりに追來る本多肥後守忠直後殿して敵近付ばどつ
 て返し遂に討死す甲斐の士大將秋山伯耆守晴近透間なく追かけ奉り御馬まはり残り掛くな
 りしかば東照宮御馬をひきかへさせられし時夏目次郎左衛門吉信こ、の御討死の時にての
 ひはせとやて御馬の口を濱松の方へひき向鎗をとり直し御馬のさんづをた、みかけてた、
 きけれバ御馬かけ出ぬ夏目ふみ止り多勢にとりまかれ鎗の柄の折る、計に戦て討死す爰に
 又水野左近太夫もひきさがり支へけれども敵猶さそひか、れば又御馬をひき返させ給ふ成
 瀬吉右衛門日下部兵右衛門小栗忠藏島田治兵衛歩たちにて御供そ敵六七騎す、み來るを成
 瀬一騎切て落し御馬をかへさせ給へバ六騎の追とまりぬ大久保新十郎忠隣御馬のかたへ
 をはなれ奉らせ大久保七郎右衛門忠世さいがかかけの邊に御旗をおし立敗軍の味方を集むる
 其ひまに濱松に引とらせ給ひけり敵城近くかし寄れば鳥居彦右衛門元忠玄黙口より討て出
 相戦ふ渡邊半藏兄弟勝屋甚五兵衛櫻井庄之介名のりかけて鎗を入敵五人討とりおしか、る
 敵を追はらふ石川伯耆守と大久保七郎右衛門と相はらり鉄砲をつるべ々なしにうちたてさ

八四

そればつめ寄たる敵も皆引返す味方疲はてけるに天野三郎兵衛大久保七郎右衛門と心を合
せ敗軍の中を求めて鉄砲只十六挺ありしを引具し信玄の陣さいかかけに向て打かけしかば
甲斐の軍夜合戦に掛るかどおつて、やうさはくらし案内はしらさきかかけへ落る者其數
をしらせ夜あけて信玄兵をかへしておさかべに越年あり是元龜元年十二月廿二日遠州築形
原の合戦なり

○味方原の軍終りて皆濱松の城を攻んといひけるに信玄勝て胃の緒をしむるといふこと有
とて軍をかへされけり此時信長の白須賀に毛利河内守山中に瀧川伊豫守吉田に稻葉伊豫守
其兵三万あまりにておかれたりもし信玄勝に乘り引とらせし信長二万五千とひきゐておし
よせ毛利瀧川等も思ひもよらぬ所に打てかゝるほどなれば必濱松よりも切て出中にとりて
めて軍せんと吉田より岐阜まで一里に一人のしのびの者をかいて待れけるに信玄ひき返さ
れしより信長の謀空しくなりぬ

○味方原の軍に甲斐の兵はげしく追かけたりしかば東照宮幾たびとなく御馬を返し給ふ大
久保五郎右衛門忠次手負て歩だちになりしが菅沼藤藏定吉に詞をかくれば忠次を馬の前輪
にのらせて退たりけり後菅沼に長光の刀を賜りて賞せさせ給ふ菅沼又引返きて追くる

九四

敵を防けり天野康景長坂源次郎坂部又十郎等もふみといまりて防戦ふ大久保相模守忠隣此
新十馬を射られ歩だちにて成て危かりしを御覽じて小栗忠藏久次門と稱す後に忠衛左に新十郎が武
者なりあれ助けよと仰られしかば久次已が馬に忠隣を抱きのせて引退く敵透間なく追つめ
奉りける武者わりけるを野中三五郎重次返し合せて討とりければ後に信國の刀を賜りぬ畔
柳助九郎御馬のかたへをはなれせ後に金の扇を賜りて賞せさせけり猶敵手しげく追つめ
奉りけるに水野太郎作ふみとまりて防戦ふを御覽じて又御馬を引返さる成願吉右衛門正一
の兄が最後に汝の此あたりの案内よくしれり御供して恙なく引とらせ奉るべき由云たりし
かば御側につき奉りしが引返して敵を追ひしりぞけ終に濱松の城に入らせ給ふ鳥居彦右衛
門元忠に御下知ありて玄黙口の御門をひらきて引とる兵を入せらるたとへ敵したひ來ると
めわがこもる城またやすく討入べきや門を閉せしてかゝり火を所々にたくべしと仰らる此
の日の天曇り雪ちりて寒氣殊に甚し御供して馬より下立城中に入る人々の松平八郎三郎康
定松平彌九郎景忠平岩七之助親吉大久保忠隣菅沼定吉都築惣左衛門秀綱等なり都築の妻粥
を持せ來りて御供の人々よくばりあたふ後に衣服を賜りて賞美あり今日敵の跡をふんで戦
ひ勝へきに味方はやり過て心ならせ敗軍しぬ口惜き事なりと仰あり湯づけ飯を侍女久野

○五

奉りければ三度かへたまひわれつかれたりとて御枕をかたぶけられいびきかきて御睡あり
 山縣城近く攻よせ門の扉をたつるに暇なしと覺たりいかに攻め入らばやといふを馬場美濃
 守聞て打まけて引とりたれば門をとぢ橋を引へきに左のなくてかゝり火白日の如しむし
 謀あるべきかかろしく攻べからせ徳川殿の海道一の弓とりなりよく見届てこそとて
 猶豫しける處に城中より鳥居彦右衛門渡邊半藏同半十郎櫻井莊之助勝屋甚五兵衛を始とし
 てくゆさやちの剛の者ども百餘人突て出しかば甲斐の兵虎口を引退て攻ざりけり
 ○天正元年江北の軍に朝倉敗しかば信長の兵追事急なり朝倉が士大將山崎長門守諸美越前
 守柳瀬にてふみ止り支へけるにはげまされて返し合せて討死する者多し山崎も大軍の中に
 かけ入て討れたり諸美矢立の視どり出し詩一首書て落ゆく者にたのみて故郷にかへしけり
 萬恨千悲有リ勃然一誰識今夜入三黄泉二故園更三莫瀧三愁淚一屍暴三戰場一唯是上天
 かくて散々に戦ひて討死しける其間に義景のがれ得て越前にひきとれり
 ○天正元年將軍義昭織田信長と不和の事出來て和田伊賀守惟政將軍の味方して攝津の國に
 陣す信長和田を始として誰某が首とりたらん者にのしかく賞可と書記して札を立られ
 たり中川瀬兵衛重秀此時の荒木村重に属したりけるが此札を打見筆とりて和田が名に点を

かけ自姓名をしるし家に歸り妻に向ひ事の由を語りて万一生て歸りなば又こそ見參ぞべ
 けれといひしに妻聊思る色なくさらば軍の門出祝たまへとて棄す、め酒とり出したたり其
 夜子の刻をかりに伊賀守が首とつて來りけり村重大におどろきいかでかくたやすう和田を
 討得たるぞといふ重秀さん明日必戦を決すべしされば討る、者少かるべからせ同じ
 く死むいのちを此夜の中にすてなんにの和田が首とり得のべし敵も明日の合戦を大事に思
 ひ淀河の淺深をふみ見んに惟政さる大將なり物見をたのむべからせ自ら來らん必定なり
 あつばれ討とらん物をもし又討死せば多くの敵の中に入て大將の首とらんとて討死した
 りと人いはんの武名の朽じと思ひ定め水をわたりあなたの方の岸の柳かげにふしかくれてまつ
 案の如く和田二陣にひかへて出來るをまされ入り終にうちとりて水中に飛入のがれ得て歸
 めと申ければ人々感じあへる事大方ならせ
 ○天正元年信長靈陽院殿を宇治の槇島の城よ攻る時折しも雨ふりて川水岸をひたせり信長
 馬を水涯に駐て昔の梶原佐々木も鬼神にてのよもあらじといはる、處に武者一騎川へうち
 入たるを見て梶川彌三郎高盛なるべし梶川討すな涉せと下知してそれよりわれ先にどうち
 入てわゑしけり此戦の前に信長黒の馬を梶川にあたへらる其時信長梶川が志重ての軍に與

五一

入てわゑしけり此戦の前に信長黒の馬を梶川にあたへらる其時信長梶川が志重ての軍に與

先かけんぞる者なりとわが笑ひていはれしが果して其詞にたがのざりけり

○山内土佐守一豊其はじめ織田家に仕へたりけり東國第一の駿馬なりとて安土に牽來てあ
まふ者あり織田家の土是を見るに誠に無双の駿足なれど價あまりに貴しとて求むべき人
なくいたづらに牽て歸らんとす一豊其頃猪右衛門といひしが此馬望に堪かねたれどい
かにも叶ふべからざれば家に歸り身貧きは口惜き事なしとひとり言しければ妻つく
くと聞て其價のいか計りにてかひと問ふ黄金十兩と答ふ妻聞てさほどに思ひ給ひんに
其馬求め給へ其料をばまらそべしとて鏡の查の底よりとり出して一豊が前にさし置たり
一豊大におどろき此年ごろ身貧しくて苦しさ事のみ多かりしに此金ありともしらせたまひ
き心強くも包み給ひけん今此馬得べしと思ひもよらざりさと且つ悦び且つ恨む妻仰の旨
ことほりよてこそゆへさりながらこれのわらは此御家に参りし時父此鏡の下に入れ給ひて
よの常の事にゆめく用ふべからせ汝が夫の一大事とあらん時にまゐらせよと戒たまひさ
されば家の食しきも世の常なれば堪忍ても過ぬべし誠に今度京にて馬揃あるべしと承れば
此事天下の見物なり君も又つかの始なりよ馬召て見参せさせたまうさんと存てこそ奉れ
といふ一豊悦ぶ事限なく願て其馬求めてけり程なく京にて馬揃ありし時打乗て出ししか信長

大におどろきあつばれ馬やとて事の由聞給ひ年頃山内久しく浪人して有しと聞か家も貧
しからんに求得たるの信長が家の恥をすきたるうへ弓箭とる身のたしなみ是に過たる事
やあると感じて是より次第に用ひられしとぞ

○天正元年三河作手筑手城主奥平監物貞勝入道々文其子美作守貞能孫九太郎信昌皆勇氣
たくまじき人にて有しに近ごろ道文の武田家に心をよせ勝頼の士大將甘利を作手の本丸に
あき奥平父子の外郭にあり信昌信玄の死しある事をかくせるを悟り居し處に東照宮より本
多豊後守廣孝を以て歸降の事をすめ賜ふ信昌父と大父とにせめて密約をなす武田家奥
平に人質を出せよと下知せらる貞能いかにみすべき謀なくて庶子千丸を出しけり武田に
てい是をわやしむ土屋右衛門直村黒瀬に在けるが使を以て貞能を呼よせ勝頼の掎使城所道
壽も山向ひ二心ある由聞ゆる處にとくも來られけるよ神妙にこそと詞をかくる貞能かゝる
時に父子の間も疑思ふ事世のならひなり然れ共愛子なる千丸を人じちに出せば何の子
細の有べきやと駭くいるなければいさ碁をうたんどいふ貞能心しづかに碁をうち終り暇乞
して門外に出るを道壽又よびもどし湯漬飯を出す貞能これを食するひまに道壽士を門外に
出し待居たる貞能が士に向ひて主人叛逆あられ唯今討れま由をいはせければと奥平六兵

四五

備らちめらひて更に駭くいるなしこれの真能業より武田方にていかなる事をいふとも吾首
を見ざる中の驚く事なかれと固くいひふめし故なりけり

○東照宮と武田の兵と大天龍にての戦に近藤傳次郎手おひて渡邊半藏守綱を見かけ手お
ひたるぞつれて退よといふ心得たりとて手に提げたる首を投すて、傳次郎を肩にかけ三里
あまり引退てたせけられ東照宮聞召味方一騎討るれば敵千騎の強みといふ事あり味方を
たすけたるの七度の鎗を合せたるよりもまさされり今より後鎗半藏といふべしと仰あり後に
半藏人にかたりていはく傳次郎をわれなればこなたすけたれ何としてのけおぼすべきか、
る時の大かたよくする体にもてなし刺殺して棄らるべし味方なればとて頼みよならぬも
のよといひしなり

○天正二年北條氏政三万の兵をもて佐野政綱をかこまる、と聞て鎌信八千計りの兵をひき
ゐ後詰せられけり城危きと聞えければ鎌信後巻のわれにおどらぬ士大將あまたわれが心や
すし佐野の城ころおぼつかなければ先だれの城にかけ入て力をそへなんとて物の具も着せ黒
き木綿の胴服をうちかぶり十文字の鎗を横たへ僅に十三騎ひき具し氏政の陣の前を馬を解
にあゆませ佐野の城に入たるを氏政の軍兵見て夜叉羅刹との是なるべしとて恐れて近づ
く

者もなし氏政圍をといひて引退けり

○天正二年勝頼高天神の城を圍んと師を出せ小笠原與八郎長忠軍の目付大河内源三郎政房
と相議して防ぎけり東照宮後詰を信長にこらせ給ふ勝頼城の巽の嶺に陣し大文字の旗を中
村の内公文といふ所に立る後まで其地を大旗と稱す兵糧竭兵卒疲るれば後巻を待かね姉川
の戦功を捨て給ふと怒て七月二日城を出て降参を軍の目付大河内政房の應政公の妻幸陽
院の甥なり勝頼に降らざりしかば小笠原生どりて石の牢に入置たり勝頼降らば本領も倍し
てあて行ふべしと説せければ志を變せし勝頼怒て牢の口を鎖す政房ことしより高天神
落城に及ぶまで八年の間牢中にあり甲斐の土横田甚五郎高天神に来て在番せしが大河内が
節義を深く感じたりかくて東照宮高天神を攻させ給ひて天正九年三月廿二日の夜城の守將
岡部丹後眞幸横田甚五郎尹松相木市兵衛昌朝己下切て出岡部の討死し横田相木の切ぬけて
甲府に落行けり城落ければ石川伯耆守數正城に入て政房を捜し出せ牢中に年久しく有て足
痿ければひしろにのせて東照宮の御前へ出す多年石の牢に在し難厄いふべがらぞとて御涙
を流され御手づから刀脇差賣金をあたへらるゝに政房生どられし事を口惜く思へる色あら
われしかば人々敵のどきことなる事の小笠原が不義にして武田に降参せし故なれば何方に

五五

六五

のがれ山へさや志の比類有まじき事なれば生どりと成ぬる事なかくはまれとなりたりと口々にいひけるが猶も其心に憤はりけん剃髪して宵空と稱せしが仰によりて尾張の津島の湯に浴し足の瘻も愈けれは遠州稗原の地を賜りしが長久手の戦に討死しけるぞ

○天正三年勝頼奥平九八郎信昌が三州長祿の城をかこみ攻る東照宮援兵を織田家にこらせ賜ひ後卷の謀をめぐらし給ふ處に城中糧米既に盡んとせしかば此旨を告奉らん爲鳥居強右衛門勝頼を命じて密に城を出す鳥居のがれ出る事を得べ向比かんはうが嶺に烟をあぐべし三日過て又かの山に烟を兩度あげば後卷なしとしり給ふべし三度あげなば後卷ある事をしり給へと約しけれは信昌鈴木金七郎を鳥居にそへて五月十四日の夜城の西ある山の岩根をつたひ川に入寄手素より大野川瀧川の水底に繩を張てなる子をかけたれは通るべきやうもなし三八水線の遠者にて川の淺瀬のよぐしりつ小脇指を拙て川底を潜り繩を切て通りしかばからくとなりけるを番の兵どもあやしみけるに其中に一人五月雨にはかゝる川をへ鱈の通るならんといひけれはさてやみぬ二人の早瀬の下廣瀬といふ處に上りかんはうが嶺にて烟をあげ十五日に岡崎に参てしかくの由を力處に信長其日岡崎に着陣せらる鳥居の信昌尙心もどなくやどしのび得て城に入る事を得べ早後卷せし事審よサさんとて引返す鈴

木の信昌が父美作守貞能に告べしと鳥居に別れけり鳥居かんはうが嶺より相圖の烟三度あげて後祿原といふ所にゆき忍入ばやとするに細重々にふりて砂をまさ出入の人の足あとを改めしかば中々入べき様なくてためらひけるを穴山の手の者見付てあやしみて遂にからめられけり

○勝頼長祿の城を圍攻る事甚はげしかりしは信長東照宮と共に後卷あり軍評定の時酒井忠次す、み出今夜わき道より長祿の附城鳴巢へおしよせ攻破らば勝頼必敗北すべしとすもあへぬに信長あざ笑ひ汝の三河遠江の小せり合に慣つれど大軍の計策のしらざりけりと嘲られしかば忠次いふべき詞なくて出ける處に信長東照宮にさ、やき申されけるの左衛門尉がす處尤然るべし又呼出されよとて酒井が側近く居より誠にゆ、しくも計りたる哉されども外に泄聞ぬんかと思てわざといつはりて誹りたりきとく馳向て鳴巢を攻破べしといはれしかば忠次承りて出んとする時又ひきとめ同じくは信長が向ひ度所なりあたら武功を汝に譲りきとすされける忠次大にいさみて夜半計に思もよらぬ所におしよせて武田兵庫頭信實三枝勘解由和田兵部を始としてあまた討どり火をかけたる烟を武田の軍兵願て大に勇氣振て終に敗北のもと、ありける信長後に酒井が功を賞して汝の前は眼有のみにも

七五

非老後にも眼ありといこれしかば忠次申しけるに終に後を見たる事なくと信長笑て前後の計たがひざる事を賞せんとていひ過たりといはれけり

○同じ軍に赤地の唐ありの錦乃下帯したる士を生どり来る唯者に非じ名のれといへども名のらきさらば雜人の手にかけて殺さん士ならば腹切せんといひしかは多田淡路が子なりといふ信長聞て淡路に久藏新藏とて二人の子ありと聞くいづれぞと問る、に新藏なりと申す勇士なりたそけてこそと有ければ生どりと成たる耻辱とて首を刎らるべしと乞たり信長の前にて細をどきしに門外に立かけたる鎗をとりあたりの者をつき殺すによりて遂に新藏を切ころしけり

○天正三年六月東照宮二股の城を攻給ふ城主の依田下野守幸成あり其子右衛門大夫幸致城を出て鳥羽山の下なる小川を隔て防戦ふ内藤彌次右衛門家長強弓の手き、にて散々に射しらます松平彌右衛門忠長が子彦九郎敵に朱のてうちんのさし物あるを見て味方にも此さし物有ければあやまりて敵の中へまぎれ入しを朝比奈彌兵衛一箭にて射伏たり内藤の彦九郎と縁者のしたしみ有べ引返して彌兵衛を射る其箭彌兵衛が乗たる馬の鞍の前輪よりあど輪をかけて射貫く彌兵衛が弟彌藏とせ來りて兄が屍をひき退んとせるをこの矢にて是も射

倒したり城兵二人の屍をひきのけんとせるを本多忠勝等進みかゝりて追つたてたり城兵引退く中に一人手負てひきかねたる者有けるを一人とつて返し是をたすけ門内に引入けるを櫻井莊之助勝次敵の首を一つ取たりしが又す、んで追かけ行く東照宮御覽せられ茜の四半のさし物の櫻井なるべし深入するよと仰られけり其時敵の手負を助くる者やうく一の木戸揚錠門の中に入り手負たる者いまだ半見ゆる處に勝次走りつき手負たる者の足をとりて三間計ひき出し遂に其首をとる其時門内より勝次がさし物を打折ける屍にかゝりてまりしをしらぎして五六間計引とる時従者かくといへば又取て返しさし物をとり得て鳥羽山に歸り首を奉る東照宮唯今の勇氣のいかめしさ誠に無双と覺ゆるなり然れども是より後いゆめく今日のごとく深ばたらさすべからせとて遠州にて祿を増し賜はりけり彼の従者も度々はたらさ有て後士となし内田彦右衛門といひけり

○天正三年八月東照宮諏訪原の城を攻させ給ふ此城の甲州馬場美濃守氏勝が城制の法にてさづきたりし名高き城なりといへども城兵力弱りて廿四日の夜城を棄て小山の城は逃落けり五、東照宮此地の高天神に往來の要路駿州田中持船の敵と大井川一筋を隔たり勝頼必隙を伺ふべし誰か此に在て城を守り敵を防ぐべんと仰有けるよ松平左近忠次す、み出身不肖に

六 是れ此城を守るべしと申ける御威有て松平の姓を賜り御諱の字を下され松平周防守康親と申せしは此時よりの事なり

○諏訪の原の城を甲州より攻来りて合戦あり松平康重の子の士山内治大夫進士清三郎山崎惣左衛門三人殿しけるは山内の精兵の手さにて射拂て引退く時矢だね盡たり山縣源四郎猶追かくる時進士清三郎矢一筋を山内になげやりしかば山内ふみ止りて射けるに志村金右衛門が胸板を射通し後の松の木に射つけたり夫より物わかれず山縣此矢を康重に贈り返して強弓精兵無双なりとどほめたりける康重其矢に進士が姓名の彫付たりしを見て賞する處に是の山内が射申たるは相違なし復山内を呼出してしかくなりやと聞る、に清三郎が射たるとゆづりけり康重兩人に感状をあたへたり世の人兩人を今の孟之反といひあへり

○天正五年島山修理大夫義隆毒殺せられ家臣七尾の城に據て信長に屬し能登大に亂れければ義隆の伯父上杉彌五郎義春越後に在て是を聞謙信にかくと告謙信即師を出して義春助陣して七尾の城を攻めんと此時長九郎左衛門重連七尾にて島山が長臣堀井三宅に殺さる重連が弟恩光寺使僧となりて信長に此由を申せば柴田勝家丹羽長秀長谷川前田利家羽柴秀吉蒲川一益氏家卜全等四万計にて打立八月五日加州手とり川を涉り永島に陣取り謙信の

能登一州悉く旗下につけ八月朔日兵を返して加州にて長が一族の首七つ倉部拍野の間なる濱に竿ゆひ渡しかけ並べ札を書て立られたり松任の城主蕪木右衛門大夫と和平し信長着陣を聞松任にて軍評定し一戦すべしと手くばりあり七尾既に落て謙信これまで打向れたり爰にて合戦無益なりと引退くべしと信長の陣々いりめき立恩光寺人に首を見するに名のみにて面貌異なり上方の軍のおし来るを聞き謀を以て長一族の首をいつはり設たるならん能州をすて松任又在の後詰を防ん爲あるべしといふを聞てさわざもしづまりけり即夜戌の刻に及で恩光寺柴田木下が陣を行先に味方一同に敗北すべきいり有を見てたばかりてやせしなり七つの首は吾父兄弟なりと告しらせしかば爰にて合戦すべからざとて信長引きさかへさる恩光寺是非一軍と乞へども聞入れぬ恩光寺の後信長の命にて還俗し長九郎左衛門連龍といひし此人なり

○謙信越中にて秋の夜諸將をあつめ月を賞して詩あり

霜滿三軍營。秋氣清。數行、過雁月三更。越山並得能州景。任他、家鄉念三遠征。

一六 ○東照宮信長に御對面の時松永彈正久秀かたへにあり信長此老翁は世人のなしがたき事三つなしたる者あり將軍を弑し奉り又巳が主君の三好を殺し南都の大佛殿を焚たる松永とや

す者なりと申されしに松永汗をながして赤面せり

○謙信卒して 天正六年 養子上杉三郎景虎 故政虎實の北子 猶子喜平治 勝遺跡を争ふ 景虎縁の故武田勝頼に援兵を頼む 勝頼兵を出さ 此時景勝謀て 勝頼の寵臣長坂鈞 閉跡部大炊助に使者を送り 勝頼に黄金一万兩 寵臣に二千兩宛を興へて 加勢を乞ふ 兩寵臣勝頼を勸て 政虎を放されたり 是より諸士勝頼をうらみけるが終に勝頼の妹 聿木曾左馬頭儀昌 信長に従ひて 勝頼を叛く 勝頼これを討んとて 軍を信州諏訪原に陣す 小山田左兵衛信茂もこれに従て 御宿監物友綱に送る

汗馬忽々兵革辰。東西戰賊轟。邊恨世上亂逆。依何起。只是黄金五百鈞。

砂金を一朱もどらぬわれらさへ薄恥をか敷入るかな

友綱和韻

甲越和親堅約辰。黄金煤价訟神恨。倍臣屠盡平安國。可惜家名換三万鈞。

薄恥をかくのりものかひなへて世の寂滅するも金の諸行よ

兩寵臣彌よ邪義行なひて武田家滅亡せり

○東照宮高天神の城をかさませたまひ柵を付けて固く守らせらる城中後詰を乞ふも勝頼出

老練盡けり 栗田刑部使をもて 幸若が舞を一曲所望し 是を今生の思ひ出にせんとやしけるを 東照宮聞し 召やさしくもいひけるよとて 幸若に高館を舞せらる 栗田が最愛の小性時田鶴千世といひし者に 絹紙やうの物をもちせ出して 幸若に贈りあたま 其後落城のとき 時田討死しけるを首をとりたれども 女の首なるべしと人々疑へり 東照宮聞し 召れ眼をひらき見よ 女ならば白眼なるべしと仰せ有りければ いらいて見るに 黒眼あり 又幸若忠四郎も高館を舞ひける時見しりたりければ 時田が首に定りけり

○天正八年七月 東照宮田中の城を攻めさせ給ひ 八幡山に御陣有て 苅田はたらきあり 勝頼後巻せんとて 甲州を打出る 松平康親が士岡田竹右衛門元次 此ころ夕立洪水有べき時なり 大井川の一夜水出て 涉りがたし 勝頼血氣の勇將なる故も 俄に押よする事あらん 苅田終らばとく川を涉て 兵をかへされ 然るべしとす 東照宮尤なりとて 川を渡り 兵ををさめ給ふ 果して其夜大雨はげしく 大井川水出たり

○田中此城を攻めらるる時 西郷伊豫といふ剛の者 足輕を引具し 度々打て 出奇手を破りければ 東照宮誰かある 西郷をうつべき者かと仰有けれども 答る人なし 其夜菅沼大膳が陣に入々あつまりて 此事をいひ出したるに 菅沼が小姓朝日千介 後に丹十八歳なりしがす、み出討

四六

ちどるべしといふ菅沼聞て汝癡言をいふやといひしに必定討取申さんといふはばかりの古兵も軍しかねつる西郷なりたやすく討ん事思ひもよらそこ立されと罵りければかたへよりいやとよ千介がつらたましひなみくならそ末頼母しきわか者なりといひなだめけり千介あすを待れよ西郷が首提て参らん物をと獨言して退きけりあくて夜深菅沼が愛せし鉄炮をとり出し陣屋をひそかよ出岡部と藤枝の間ある竹林にかくれ居たり夜明て西郷馬に乗足輕引具して来る東照宮の岡部のかたへの小山に陣してれいせしが敵又出たると仰せ有ける處に千介鉄炮をためそ西郷を馬より打落し走り出て首をとりかけ歸りてかくと申す東照宮わかれ剛の者よとはめさせ給へば是より千介が名高く聞えけり

○天正二年勝頼兵を出して菅沼新八郎定盈が新にかまへたる城を攻んとす定盈が一族を郷導として不意におしよする謀をしりたる者有て告しらせけり●月廿九日の曙に定盈が士ども大敵和田嶺本宮坂二筋に分れて攻め來れりどく退れよといふを聞て一軍もせせ逃落ん事弓箭とる身の恥なりといふ人々永祿年中今川家より攻し時の西郷孫九郎元正加勢したりき今多からぬ士卒打ちたれば早く城を出て運を開くの道こそ然るべからんといへども定盈兵を出して敵の標を見せしむ山縣が軍饒來る由告けるに定盈副にゆきてきたひをうた

五六

ひて出せ足輕の頭山口五郎作しひて諒ければ剛より出手を洗けるが又湯をもて口すきたる休常のごとしきひて諒れば南の郭より退さけるが途中又てわれ等が伏所に火をかけざる事後に敵に嘲らるべし誰かの歸りて城に火をかけ又日頃愛したる鷹を携へ來るべきといひもあへぬに中山與六十八歳なるが引返し城にもどり火をかけ鷹を臂にて出たりけり定盈の宇利を経て西郷へ赴けるあををしたひて與六海倉淵まで退さけるに與六が一族後藤金助追かけ來てきたなくも敵に後を見ざるよと詞をかけたりしかば與六馬ひき返しむせと組て既に金助が首をとらんとせしに多嶺の士あまたかちかさなりて終に討れけり山口の定盈が後殿して主従三騎素綱の瀬を渉る處に敵追來る山口引返して敵あまた射伏たれども馬疲れければ敵の近く鍛田村にかゝり吉祥山に赴く敵猶追かけ來れば散々に射しらしけるが馬動ざりける故乗はなちて歩だちになり山にかゝる箭二筋のみ残り菅沼刑部鹽津傳助追つめければ射たれども中らぞ指添を抽て手裏劍ようつ刑部が頭上をうちかすりけり山口も終にそこよて討死し其墓今にありといへり

○岡崎三郎君天正七年二股の城にて自殺おのしましける事信長より叛逆の志有て勝頼に内通し二股の城へ甲斐の兵を引入べきとの三郎謀あり此事の酒井左衛門尉よく存知た

六六

りと告すされしより事起りてつひに死を賜へりぬ

忠次を信長召寄て三郎君の北の方より告すされし十二條の悪事をあげて忠次を問れしに

忠次是より前三郎君の侍女おふうといひし美人をひそかに巳が妾とせし事によりて三郎

君憤深かりけれバ陳謝の事に及ばせといへり

○攝州花隈の城ハ荒木攝津守村重が一族荒木志摩守元清をめれり天正八年信長の命にて付

城をかまへ花隈の北諏訪が嶺に護國公西の方金剛寺山に士大將伊木清兵衛忠次森寺清

右衛門忠勝南の方生田の森に護國公の嫡子勝九郎之助守り給ひぬいづれも花隈より六七

町計を隔たり三月二日城より兵を出せ勝九郎廿二歳にて組討の功名あり國清公申す後に三

左衛門尉十六歳にてれいせしが是も組討にて首をとり給ふ護國公敵五六人自討とり伊木清

輝政公兵衛秋田嘉兵衛堀與左衛門芳賀五郎右門衛石黒武左衛門佐橋武右衛門後藤市兵衛波多野彌

藏等はげしく戦ひて追崩すある夜護國公森寺政右衛門を呼で城中へ忍入よく見來れと命せ

らる森寺行時泥浦勘兵衛も打つれんとす森寺今夜の物見の大事なり相俣ん事叶べからん

といふ泥浦聞て思ひ立たる事空しく歸るべきや自害するより外おしど中々歸るべき体にあ

らさればうらつれたる陣と城との間に小坂坂あり城中より武者二人鎗を提げ來るに出あひ

二人とも討とり首とハ草の中に匿し搦手の水道より忍び入又水道より出て匿し置たる首を

持歸り實檢に入れ城中の有様を申せハ護國公はや城の攻とりたるこちするよいかにして

かハ此功を賞すべき但泥浦ハ何とて行たるやと問る、に泥浦承りて政右衛門に仰られし

を物かげにて聞けりと申せ護國公近習の人をのけていひつる事を立聞し且軍法を破りたる

と怒りたまふ其時森寺只今 忝き仰を承りささして賞美の望は非らぬ勘兵衛が咎をゆるさ

せ給へかしと申せば護國公さてやみなんと仰けるかくて七月二日に及で生田の森の南へ

馬の草薙に雜人出けるを城中より兵を伏置て追ちらしけるを生田の森の付城より是を見て

勝九郎馬上に鎗を横たへついでけ者共とて馳向ふ棍浦兵七河崎忠三郎大陽寺左平次臼田喜平

次日置清十郎など追つゞき聲をあげて切かゝる竹村喜左衛門乾平右衛門長谷川新次郎鎗わ

さを射る淵本彌兵衛ハ四寸角の柱の一丈餘りなるを打ふりて敵をた、さ伏相戦ふ金剛寺山

の伊木森寺も大手の軍はげしきを見て搦手より乗とらんとおしよする城より野口與一兵衛

といへる者半町ばかり打て出防けるが野口も討死すれば城ぎハへおしつむる大手の戦に密

手多く討れ危かりけれバ引返さんと護國公棍浦に詞をかけらるれば勘兵衛唯今わけんとせ

七六 ば彌みたれあしに成べしささはどハ鉄炮の數少く覺つるに俄にましたるハ搦手より大手へ

八六 救来りぬらん政右衛門早からめ手へねしつめ乗こみすべし然るに只今大手の味方を引どら
ば敵搦手へまはりて政右衛門討死すべしとやを護國公尤なりとくゆきて見來れど仰られし
かへ勘兵衛馳つけてしかくくの事なりといふ政右衛門よくこそいひたれ早乗入べし大手を
攻られよといへといふ勘兵衛此場を見すて、歸らん口をしけれども使の仰せ重ければと
てかけ歸りかくとやせよ護國公無二無三に乘破れと下知せらる勘兵衛の城兵の必き突て出
べき門脇につめよせたり搦手よりも伊木森寺先をあらそひ門を破りて攻入り森寺のこと
しの春案内のよく見たりし故門を破る透間にかたへの屏を踰敵鎗にて突ければも飛こみて
其ま、討とりたり梶浦が察せし如くからめてに防く兵少なかりければ攻入て火をかけた
城兵も大手の門をおしひらき切て出る勘兵衛待請て鎗を合す城兵を切ぬけん死狂に成
て戦ひけるに寄手からめてより攻入たるが敵の後へ切てか、りしかば城兵濱邊をさして敗
北せり兵庫の築島に雜賀孫一郎花隈の加勢として有けるを伊木森寺先陣にておしよせ攻落
す此時湊川にて勝九郎五輪作右衛門といふ剛乃者と鎗を合す森寺政右衛門も馳付たれば作
右衛門引返して退きけるが五輪のさし物を是のつかぬななさし物なり兩人へまゐらすよ
といひて川へ飛こみて進れ得たり黒半に白き五輪の形を染たるなりしとなり信長より

勝九郎國清公に馬をまゐらせらる護國公今度の軍わが目前にて各々功名したるなれば明
に見届ぬ中に就て梶浦が決斷鎗を合せたるよりも忙しき場によくこそ察したれどてかへ
そぐ實美有けるぞ

○天正十年勝頼の弟仁科五郎信盛高遠の城を守る織田信忠僧を使として勝頼の滅ん事近き
にありとく城を出らるべしといひ送りたりければ信盛怒て返答みせ僧の耳鼻をそいで追
出す信忠さらば攻よとておしよせてさびしう攻るに城兵幾りもなく討れ信盛小山田備中
渡邊金大夫照春日河内守原隼人今福安左衛門諏訪莊右衛門已下十八人十二間に七問の廣間
にこもり火をちらして戦ふ信忠淺黄金襦のはるかけて屏あがり梧桐の枝よりつさ下知
せらる、を目にかけて七八度打てか、る此時三十五六歳計の女房の緋おどしの物の具着眉尖
刃を提げ諏訪莊右衛門が妻なりと名のり七八人あき伏て自害しけり信盛を始として死狂に
切てまれば攻めくみたる時森武藏守長可屋根の板引破らせ鉄炮を打こみたりければ信盛
床の上にあがり腹切て腸をつかんでから紙に擲ち倒れ死す大廣間の天井も柱も鎗太刃のわ
どありて血にそまらぬ所なし庭に覆れる雪に血か、りて紫となれりぞ

九六 ○勝頼天目山に落行く時瀧川一益攻入て落人ども討とり勝頼の首をとられたれども誰といふ

○事をしらぎ小溝の中に棄げらるに百姓ばら溝の前にて必き平伏し禮をして打通るいかなる故ぞと問べぬの溝の中に屋形の御首のれりしとすといふとらへて首をみどり出す信忠勝頼の首をわかし置先瀧川義大夫を呼て汝がとりたる首のいつれぞと問る、に是なりとて出す此の土屋総藏昌惟が首なり伊東伊右衛門といふ者す、み出て勝頼の首を見て此こそ伊右衛門門が取たるとす證のいかにと問る、に斬口に乘たる馬の栗毛かす毛の血にまじりてつくなり天目山の麓田野より鞍の四方出に付し故なりとす果して詞にたかのせよりて伊東がとりたるに定りぬ信長勝頼の首を見ていかに汝が父非義不道なりし故天の譴のがれがたき今かくありぬ信玄一度京に赴かんと志しげると聞く汝が首を京におくり女童に見しられよと罵り首を東照宮の御もとよみくられけり東照宮御床几にたのしませしが勝頼の首と聞し召床几をわりさせ給ひ偏にわかさぬ思慮なくかくなりぬと禮議正しく仰せあり是を傳へ聞く甲斐信濃の士ども徳川家に心をよせ奉るもと、なれり

○勝頼滅亡天目山にての事甲州の士民のいひ傳ふる處によれば鶴瀬も勝頼に背しかば天目山をさして落ゆかれしに一揆所々より起りてければ百姓の家は従ひし婦人どもをいれ傍の人家に葉の有けるをはこばせて出入る口を塞がせ火をかけられけり小高き處に上りて武

田の家代々持傳へられし楯無といへる物の具を信勝に着せしめらる土屋總藏肩入の役をしけりさて勝頼進刀を横たへ寄くる一揆に向われしを總藏屋形の新羅三郎より二十八代弓箭の家をつがせたまひ今ののりに及ばせ給ふとも一揆ばらに御首をわたしサさん事口惜くと諫ければ尤きりとて物乃具ぬぎ總藏に介錯せさせて終られまど相從へる人々皆互に刺ちがへて勝頼の供しけり総藏と僧の隣岳と残りといまれるが皆事よく終りしを見といけて後総藏自害しければ隣岳刀を口にくり貫れて死しけるとなり

○勝頼父子の屍田野にあれば信長を恐れて慧林寺の僧を始として斂る人なし田野の西北四里計り中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴院來りて勝頼夫婦信勝已下の屍を、さめ葬る其後東照宮甲州を御をさめ一寺を建立有て景德院と號し田地を寄附あり小宮山内膳友信が弟の僧なりしを住持の僧となしたまへり

○勝頼亡て後武田家尊崇しける慧林寺に前將軍義昭公の使大和淡路守三井寺の上福院佐々木承禎三人かくし置たる聞えありければ早く出べきと信忠下知せらる、事三度に及べども出さぬ信忠怒て累世の且越勝頼をべ少の間も境内にとどめ其遺骨をだにとり斂せして詮なき者かくしたるると津田次郎信治長谷川典次郎等をして寺をとりまいてさかざる、

に三人のどく逃さるぬ僧徒皆山門の樓に上りてこもりたるを其下に燒草を積て火をかけたれば快川を始めとして坐して合掌して焚死す其餘がめささけんで燒死ける者寶泉寺の雪峯東光寺の監田長禪寺の高山等兒童よ到て八十四人なり

○天正十年三月東照宮江尻に御軍を出され成瀬吉右衛門正一を以て田中城を守りける依田右衛門佐信番に降参をす、められ武田の舊臣悉背きて滅亡近きにありとく城を出よと仰せおくられるよ依田從ひ奉らせ武田の長臣共の書簡を得て虚實を定むべき旨をす其後先年遠州二股の城にてゆかりもあれバ大久保忠世に城を渡せべしとやせしかバ東照宮尤なりとて穴山梅雪が書簡を送らせらる信番こに於て城を忠世に渡しければ降参せバ信州の本領をめて行はるべき由仰出されしに依田一承り勝頼の存亡を審に承らざる間仰せを承り難しとやて信州佐久郡葦田に赴けり勝頼既に亡て信長今度勝頼に二た心なき輩といふとも武名ある者の諸將召か、ゆべからせと下知し猶かくれ居る者を搜し出して死罪に行とんとなり東照宮此事をいたませたまひ信番を市川の御陣に召され密旨を蒙り主従六人遠州飼東郡二股の奥小川といふ所にかくさせたまひけり

○天正十年三月武田道遠軒信綱降参しけるを信忠森武藏守長可に下知してころされけり長

可各務兵庫元正を使とし武前采女を添たり信綱刃を膝下に置てはなたせ各務武前行き向ひて武藏守が愛する馬の候なぐさみに見たまひんやといへば庭に出る處を元正一太刃斬たりしに信綱小脇指を抽く處を采女のいいて切伏たり小性河野といふ者信綱の刃を持居たりしが即抽て采女を切る兩士遂に河野をも討どめたり元正鎗を合せ首をとる事廿一ことし高遠の城攻にまさまより親見て群たる真中へ飛入倒れたるが起わがりて散々に切あひ首をとりけるが雞尾の棒のさし物さしてあたりをはらふ有さまを信忠見て誰と問ふ長可わが家の士各務兵庫とすも乃なりといへば誠に今日の見物なりといはれしとぞ

○小山田兵衛尉信茂の武田累世の長臣なりしに勝頼に叛き降参して善光寺に有しを信忠堀尾茂助に下知してころせとなり則武三大夫を討手とす士一人をへて甲冑を送り一體せん時刺殺せとの事なり三大夫善光寺に赴き甲冑を贈りまゐらす由いひけれバ小山田出て一體すれども則武討べき景しきおしや、有て則武しづかに武田の家士大將として數世重恩の身今度主君に叛き不義の至故討手に参たち向これよといふ小山田聞て口おしくも討られけるよとく首を刎られよといへども則武猶動かせ小山田刃に手をかけ是までなりといへば其時則武立あがり首を斬たりけり

四七

○明智日向守光秀信長を弒せばやと思ふ事久し天正十年六月朔日の夜明智左馬助秀俊を寢所によび入れかたへの人をしりぞけ一大事の有るあり蚊屋の中に入れとゆふ秀俊頭を蚊屋の中よさし入て何事なりといふ光秀汝が首を得させよといへば秀俊聞て一人のみかと問ふ光秀三人の命をもらひ猶足ざる故なりと云秀俊いと易き事なり大事ことよく成べしといへば光秀いかにしりたるやと問に事新き仰せと日頃の恨思ひ合ひせてといへば光秀いま信長を討んと思ふなり汝を偏に頼み思ふぞよ先汝に語らんと思ひしに中々諫争ふべし汝力を合せせば志遂がたからん従ひて汝を斬んと思ひしとて盃を出せ秀俊先臣一人に語りたまふならば諫申すべしはや外にも語りたまはんには馴も不及世間にて臍をかむとる益なしとく打立ち給へとて夜半計に俄に軍兵をおし出し明れ三日の曙に信長の宿せられし本能寺をとりかこお森蘭丸長定何事ぞ物さわがしきとて白さかたびらの上に淺黄かの子の小袖をはをり立出て見るに壁外に水色の旗見ゆる信長歎の誰と問はる、に蘭丸明智なりと申しもはてぬに築浦大藏古川九兵衛天野源右衛門等大庭に亂れ入り信長白さひとへ物を着弓持て射られしに弦されたり地臘脂のかたびら着たる廿七八歳計の女房十文字の鎧を持来りけるを信長おつとりしばし防れしが内よつぞ入て障子をひき立たれども燭臺の

五七

まだ瀧し火に信長のかげうつりたるを見て天野鎧をどりのべ刺通を蘭丸弟の坊丸十七歳力丸十六歳なりしが却て出敵死しける隙に内より火をかけ灰燼となりたりけり
 ○明智信長を弒する時秀吉は備中にて毛利家に向て陣せしが秀吉所々にしのびの者を置れしは備中鹿瀬にて匿しげなる飛脚の者を生とりたり秀吉其書を披き見るに信長を討とらば秀吉必敗北すべし秀吉を追撃れよと毛利家へいひ送る書なりもし此の書毛利家に到らばいかなる謀あるべきもしるべからば秀吉の慮淺からばと人いへり
 ○秀吉備中に陣して毛利と和平せん事を計り密に手だてを運し西國の米を價を貴く買れしかば城米を出して賣る者多し小早川隆景一人固く制してうらせし信長弒せられて秀吉と毛利家手ぎれなるべかりしに兵糧のゆたかならざる故終に和平も及べり
 ○明智江州坂本に城を築く時三浦といふ者「波間よりかさねわげさや雪の峰」光秀わきに「磯山つたへしける松村」又光秀丹波龜山より愛宕につづける山に郭をかまへ此の山を周山と名く自ら武王に比し信長を殷の紂王にたとふる心後にあらわれたりと人いひけり又志賀唐崎の松ゆつの頃にか枯たりしを光秀植つぎて今の松なり光秀よめる歌「われならで誰かいらあむひとつ松こゝろしてふけ志賀の浦かせ」

六七 ○森蘭丸の三左衛門可成が子にて信長寵愛厚し十六歳まで五万石の地をあたへらるある時
刀をもたせ置れしに刻鞘の敷をかぞへ居たり後に信長かたへの人をあつめ刻さやの敷いひ
あてなん者に此刀をあたふべき由いはれければ皆みし料ていひけるに森のさきに敷へて覺
えたりとていひ信長其刀を森にあたへられけり信長森が明敏を試らる、事多かりければ
も一度もわやまらなく其才老年の人も及ぶべきに非ず明智が恨める事を察し潜に信長の前
に出て光秀飯をくひながら深く思慮する体にて箸をとり落しやう有て驚たり是はと思ひ
入たる事別の子細のよもあらじ恨奉る事しかくぐなれば大事をたくむならん刺殺せしと
いひけるを信長いやとよ佐和山をへ終に汝にあたふべしといはれけり此の森これより先に
父が討死の跡なれば坂本を賜れとすけるを明智に與へられしかば謔言すると思ひ信せられ
を果して弑せられき

○光秀天正七年六月修驗者を遣して丹波の守護波多野右衛門大夫秀治がもとよ光秀が母を
質に出したばかりければ秀治其弟遠江守秀尙共に本目の城に來りけるを酒もりしてめてな
し兵を伏あきて兄弟を始從者十一人を生とり安土につかはしけり秀治の伏兵と散々に戦ひ
し時傷を蒙り途中にて死す信長秀尙以下を安土にて磔にせられたり丹波に残り居たる者ぞ

も明智が母を磔にしたり明智遂に赤井等を攻めたがへ丹波を信長より賜のりけり又信長の
る時酒宴して七盃入のさかつきをもて光秀にしひらる、光秀思ひもよらずと辭しヤせの信
長脇指を抜き此白刃をのひべきか酒を飲べきかと怒られしかば酒のみてけり其後稻葉伊豫
守家人を明智多くの祿をあたへよび出せしを稻葉求めどももどさき信長もどせと下知せら
れしをも肯のぞ信長怒て明智が髪を掴みひきふせてせめらる、光秀國を賜りつれども身の
爲に致すことなく士を養ふを第一とする由答ければ信長怒あからさてやみけり東照宮上京
のとき光秀に馳走の事を命せらる種々饗禮の設しけるに信長鷹野の時立より見て肉の臭し
けるを草鞋にてふみちらされけり光秀又新に用意しける處に備中へ出陣せよと下知せられ
しかば光秀忍かねて叛しといへりされば信長の暴なるもとより論を待て光秀土地を略せん
爲に老母を質にしてころしぬる不孝を信長の賞せられたる君臣共に惡逆の相あへる終を令
せざることを理なり

七七 ○光秀信長を弑する時秀吉備中より引返さる此時備前の浮田八郎秀家幼少なれども長臣老
將の面々いかなる謀あるや料りがたければ先使を岡山の城にやりて一刻もどく馳上り吊
軍を志岡山にて相謀べしと云せられける浮田のもとより光秀よ心を通しければ秀吉騎の

陣をふさぐべきやぬかッせんといふ處にかゝ告來ればさらば城中にて討とるべし願ふ處の
 幸なりと潜かに院あふて其謀をぞ相議しける秀吉六月七日の明方に高松より引返し
 午の刻ばかりに宮内に着てやがて岡山に趣くべしといひふらしける俄に霍亂したりとて
 うち臥しければ秀家の使來りたるに近習の者共出達て只今霍亂にて吐瀉せしが腹の痛少し
 やみて寢入しとあへしらひて時を移す其間に秀吉の奥州驛といふ名馬に乗雜卒にまじり
 吉井川をたたり片上を過宇根に馳使を岡山にやりて急ぐ事のありぬき道を通りて過ぬとい
 ひせられしかば浮田の人々皆あされけるぞ

○秀吉信長の吊合戦せんとて備中より引返されし時姫路に立よらるべしと人々も思ひける
 に黒田孝隆姫路に馬を駐らるべき事少の間も然るべからむかりそめの旅にも家出の遅々す
 る人情あり今度の主君の仇を討べき爲の軍なれば大和の筒井細川を始め明智がしたしみあ
 る者ども馳加りなばゆゑしき大事なりいかにやせんと思慮のいまだ決せざる中にいそぎて
 おしつけられよと謀りたりければよくこそいひたれとて一人も姫路へよりたらん者をバ忽
 踏すべしとふれさせられけり孝隆先達て人を走らしかし姫路の町人ども河原へ出粥をしたく
 して軍兵にもてなすべしと下知したりければ食着を河原へ持出たりければ立よらせして山

崎表へおし附られけり大闇記に姫路に二日滞留といへるの誤なり

○光秀信長を弑せし時筒井順慶の光秀としたしければ必せ與せしならんと人々思へり池田
 紀伊守其臣日置猪右衛門士倉四郎兵衛丹羽山城三人を使として順慶のもとにやらせらる三
 人承りて順慶もし明智に與せば刺殺すべしと申す紀州公いやとよ汝等死せばわが片手を
 折れたるに同じと制せられしかば三人かさねて順慶と軍せんにいくばくの手おひ耐死か
 らるべきさらば三人をもて多くの味方にかへたまへ順慶をさらば光秀必敗北すべしと
 やて順慶がもとにゆく順慶出ひていかでか光秀が不義にくみすべきとく信長の吊軍せ
 んといふにげにも偽ならぬ体なれば三人悦て歸る道よて山城今日順慶いなどいひんに
 刺殺さんと思ひて坐中をさつと見たりしにかたへに十六七歳ばかりなる男の順慶が刀持て
 居たりしつらたましひ只者ならむ順慶に飛かゝるならば順慶二つに切りわりつべく見ゑしと
 語りければ日置も士倉もさねば我等もさ思ひつる事よといひけりかの小性の牧野兵太とて
 武者修行して世に聞ゆる剛の者となりけり

○光秀信長を弑して安土の城を攻おとし左馬の助秀俊に守らせて山崎に打向かひ秀吉と戦
 て敗北せり秀俊安土を出て光秀を救んと京をさしてすくむ處にはや光秀討れたりと聞えし



明智
左馬之助
一騎
湖水
渡り
圖





明智
左馬之助
一騎
湖水
渡り圖



かべ坂本の城に入ると粟津を北へ大津をさして行く處に秀吉の先陣堀久太郎秀政に行わひ
 けり秀俊小勢なればさち破られぬ本道の敵にふさがれつ湖水に馬をうち入れたよがせけれ
 べ秀吉の軍兵ども汀に並居て溺れんありさまを見よと笑ひあへり秀俊の白練に雲龍を狩野
 永徳にかくせたる羽織を着二の谷といふ兜を着大鹿毛と名づけたる馬に乗年久しく坂本に
 有て大津より唐崎までの遠淺のよくしりたりたやすく唐崎はまに乘あげひとつ松の下にて
 馬にの息ひの薬を飼追くる敵を見て居たりしが又馬に乗坂本に入る時十王堂の前にて馬
 よりかり手綱をもて堂に繋ぎ矢立の硯どり出し明智左馬の助湖水をわたせし馬なりと札に
 書て手とりがみに結つけ坂本の城にいり光秀の妻子の天守にいれ安土より光秀が奪とり來
 れる不動國行二字國後の刀藥研藤四郎の小脇差なら柴の肩衝乙御前の釜などいへる名物の
 器を唐織の肩衣に包み天守より投ふるし其後 女童を刺殺し火をかけて自害せり

○信長弑せらるる時東照宮の泉州堺におひしましけるに小勢にてかゝる亂れにぞるくくと
 三河へいかでか引きたせたまふべきと人々いろを失へり東照宮素より地理をしろしめさ
 れ河州飯森の宮の要害の地なれば其地を守て軍あらんと仰ありて森口に着せ給ひし時本多
 忠勝京都に御使に参りけるが道にて變を聞き引返して來り敵大勢あればとく御歸國然るべ

からんと申そを聞き召案内者いかにすべき敵道を要らんの必定なりやみくと討たれん
 河口をしからせやと仰せ有りける處に信長より馳走につけられし長谷川竹丸當國の交野郡
 津田のあたりの信長の恩を蒙りたる者のあまたわれ道しるべきと申す宇津越を越
 て山城の相樂郡を過ぎ木津川をわたり夫より宇治橋の上一里計東の瀬を涉り江州信樂に出
 てそれより伊賀の上野鹿伏兎越を伊勢の白子に至て船に召れ然るべからんと定られけり忠
 勝崎峠と名づけし鎗を提げ其邊の百姓を打具し此殿の案内申せといひてそれより道々の
 村々にてかくしたりけれ津田より案内者來りぬ其日の山城相樂郡山田村よとまらせ給
 ひ所々より心をよせし人々どもあまた警備し奉る穴山梅雪のこれまで従ひ奉りしがひき別
 れけり

其翌日木津川に至らせたまふ柴船二艘あり忠勝からんといふに肯ざればにくい奴かな切つ
 て棄んといふは恐れてのせ奉るやがて涉りをはらせ給ひて二艘の船皆打わりて棄たり其の
 けの日一揆石原村にあつまりて待かけたり大和より従ひ奉りし吉川善兵衛其子主馬助柏の
 八木を馬じるしにして先がけして追とらふそれより宇治田原の地土山口玄蕃御膳を献じて宇
 三治川に至らせ給へば船なく榎原が土原田佐左衛門馬を乗入瀬ぶみして打わたせ酒井忠次船

一艘をさがし出して渡し奉り雑卒にいたるまで皆わたる事を得たり江州信樂までハ嶮路なれども警備につき従へる人々多く一揆手さそ事もなし多羅尾四郎兵衛光敏ハ世々信樂を領しけるが其子長兵衛御迎ハ参りたり人の心とかりがたしと人々忍るゝ處に忠勝いやしく光敏御敵するならば彼が家に入らせたまひせどものがし奉らじ一向入せ給へと申せば皆尤もなりとて立よらせ給ふに御もてなしを設け人々勞を忘れたり

五日には高見嶺を打越たまふ御供に候ける服部半藏正成ハもと伊州生れ乃人なれば忠勝下知して伊賀の案内者したりけり國士ホまた参りて警備し奉りて上栢植より三里半計鹿伏兎越といふ深山を越たまひて六日に白子の浦に着せたまひて長谷川竹丸秀一後藤五郎を始めとし和州山州伊州の士に御暇たまひり時を得て濱松に参るべきよし懇に仰せを蒙りけりそれより三河に事なく歸らせたまひぬ

○黒田美濃守職隆後宗圓は備前國福岡の人なりしが播磨の小寺藤兵衛政職に仕へて子官兵衛孝隆後如水と稱す共に功名ありて用ひられけり播州ハ其頃所々に人々地に據りて守り軍せしが小寺ハ五着に在て姫路ハ小城をかまへ黒田父子ハ在て秀吉にたのみて信長の旗下に屬す孝隆の子長政其比ハ松千代といひしを人質にして秀吉の居城近江の長濱に置たり此比毛

利家の兵勢強かりしがば小寺約を變せんぞ孝隆此ハ然るべからば信長物あらざ人なれども一旦天下に旗をあげられん行末ハしらせ先時の宜しさに随ふべし松千代を棄るを悲みかくすに非せといさめけり小寺聞入る孝隆父宗圓に父子とも誅せられぬべき密謀を告ぐ宗圓物なれたる士五六人呼あつめ所存を問に官兵衛五着に至られなば危かるべしと云孝隆されば諫ハ尤もなれ共事も見せして姫路にたてこもらんハ君に弓をひくに非せや五着に起さて力を盡し奉公しかあらば自害せん其後人々心を合せ父の御ことたのみまかする由決斷せられしがハ人々父子れじ隔られむいかすすべき只病とて五着の奴原に使をもて媚諂ひ欺くよしくべからば討手來らば力あし其後一戦を遂て五着を打破るべし罪なくて討たんとする惡逆の人天の咎なからんやと口々にいへども孝隆各存ぞる旨ハ誠にことわりなれども今病といはんに實と聞入し必き主君に叛くと人に誹られん事士の志に非ず君に深く思ひ入たる忠の空しくならん運のきりめなれば力なし我一人誅せられたりともいかにかせん此姫路をだに取れれば天下の安危歲月を經せして定るべしとてとゞまる色の見ぬされハ宗圓家の恥を思ひて身をすてむと思ひ定る事士の志なりとく五着にゆきて事かあらば自殺せよあとの事ハ心安く思へ君の志たがふ共われ叛くべからせといひしかば孝隆打ち

わらひさらばとて座を立バ人々只今思し召さられての仰せの遺言にあらざやもし五着にて
 難をのぶれたまはせバ其時人々五着の城を枕にせんと誓ひけり宗圓官兵衛の官兵衛をせよ
 人々の人々の志をせよと下知せられしかバ孝隆五着に赴けり宗圓見おくり子ながらも恥か
 しき事なり先だつべき親の留りて子に死ぬといふこそ口をしけれされども君恩淺からざる
 の人の存る處なり今讒言を信せらる、こそ然しけれ孝隆をやらせして引こもり謀叛して命
 けをしき物ぞと教るの父の道に非らせ仇となりて身を殺すの恥をしる道なりけりとてさめ
 ぐと泣たりけるがさぞ五着にてたばかりて見んに今姫路に弓をひく設なし酒めりして
 時々舞ぢたひて日をおくまといひしとぞ孝隆の五着に行きて心おくべき人のもとに使して
 求め來れる肴ありとて饗し、めやかに語りて打とけたる体なればいかにつくろふとも心の
 外にあらはれぬ事のあらじなどいひおへり又此を疑て黒田父子の謀たくましき者にてよき
 士あまた有り城にこもる用意せん間だに官兵衛を以て欺くべきも計がたしとて姫路の標を
 聞に宗圓金剛に舞まひせて打とけたる体なればさて別の事もあらじといへり此時攝州荒
 木攝津守村重の毛利に属し信長と戦ひ利あらせして有岡の城にひきこもる此の由小寺聞て
 孝隆を呼びてわれ毛利にくみすべきとの内々荒木といひかひしたる故なり今毛利家にたよ

らん事のわが過なりと覺ゆるぞされども此ま、にて手ぎれをせんに表裏者といはれんも口
 をしければとく有岡にゆいて荒木を諷てもし聞入バ秀吉に謀りて信長と荒木和平をとり行
 ふべし攝州信長に従べわれも眞に心をひるがへして信長に従ふべしといへば孝隆聞て信長
 と荒木と和平の思ひよりもあるまじ荒木度々信長に背きたれいかで其言を信せらるべき
 参りたりともいたづら事ならん然ども辭しやせば勇なきに似たりとて有岡に趣く路姫路に
 立よりて父子對面し有岡に至らば必き首をはねべきかかさて四とするか二つの中に過ま
 じ五着に死んより有岡にて死バ信長も聞き又世のはまれともなるべしと思ひ切つたる色を
 宗圓見て涙におせびしばし物をもいはざりしがや、有て誠に困厄の至極なれども名にかへ
 て身をそつるの義を思ふ故なりとて見送りしかバ孝隆有岡に赴きたり小寺兼て村重に密に
 毛利に一味すべきに黒田父子人質の松千代を信長に出し置たればかの父子の織田に内通の
 志ありと告しらせつれば有岡の本丸によび入れ生どりて牢におしこみけり五着に此由聞え
 しかば小寺いつはりて齒がみをなし荒木が狼藉の次第遺恨深し然れども此上の信長に一味
 のこころを易て毛利に興し官兵衛を引とる謀や有べきとぬいせしかバ宗圓怒て官兵衛生ど
 り又成しかば是非の論なし年老たる身の子を失ふ事の誠に力なき次第なり然るに官兵衛を

救ひん事いれなきにあらざれども先松千代を信長に出せし事、君も又臣父子と相謀れる處にて今度官兵衛を有岡にて捕へたる、荒木が横さまのふるまひなり相はかれる處の人とちを棄ておしとめたる者をたすくべきの逆ならせや只順道に隨て天の冥見を待にしかおれわかき時より度々の軍に臨み小寺の家の危難を救ふに今齡かたふさたのみ切つたる長手をしてし事の口をしくわれども首をくだかるゝとも毛利に一味せよとの仰せをバ得承らじとて刀を抜き誓てければ使も言なくて歸りけり宗圓が士ども五着を攻破らんといへども用ひは村重心あらばいふるべしもし五着を攻むる村重も官兵衛を殺害すべししらぬさまにてあれよかくあらんと思ひて官兵衛が女房をバ潜に此頃引どり置たりとて驚かむ村重の小寺にた乃おされて孝隆を生どりたれども己かかたさにも非れはいたはり置けりかくて信長有岡を攻むるよ及びて毛利家の後巻もせされバ城落ありけり孝隆の牢の中にあされて有ける處に栗山備後其時時々有岡にゆきてしのびて商家をかたらひ半比後の沼より姫路の事どもかたりし事度々にて案内をしりたれば牢に走り行て見れば番人も落うせたり此れのと驚き且況て善助すて置たる斧にて鎖を破り引たてければ三年居かゝみ其上に濕瘡を病て起事あたいおかたへなる牢中の人を頼みかさかひせて城を出で寄手の陣よゆきさて姫路に歸

る事を得たり秀吉播州に攻入るに及て小寺の但馬におち行き黒田父子危難を脱るゝ事を得て孝隆に実栗郡を賜り姫路を秀吉の城とす後に加水と稱して智謀たくましく秀吉の功臣第一と聞えしこの孝隆あり

○天正五年黒田孝隆播州佐用の城を攻る時生田木屋之介夜中に忍びて城際に近づきより懐中の小鏢をもて屏樹の根を切目じるしをして翌日城攻にかの柱に鈎繩を付けて引倒し先がけして城に入りけり木屋之介も隅田小介といふ日向國隅田刑部少輔が嫡子なり十六歳の時傍輩を討て出奔し播州に行きて孝隆の士井上九郎右衛門を頼みけるは留置さいやた將而せざる處に其夜隣家に人を殺し取籠りたる者あり夫をからめ出すに付き即時に孝隆に申てそれより奉公しけり攝州生田の城にて高名ありこれよりて生田木屋之介と姓名をたまはる是その高名をながく顯さん爲とかや

九八
○文明十五年十二月十三日備前福岡の戦に福井小次郎のものと京都の人なりしが四歳の比父源左衛門當國の在番の時連下り城中にありしがことし廿一歳あるが其日の軍に父子の間を敵味方におし隔られ父の城中に入りたると思ひ走り歸りて尋るに見得されバ又城外に打ち出て寄手よ向て福井小次郎と名乗たてさま横さまに切つて廻りしがあまりに戦ひ疲れし

と家入肩にかけて城中に引き入りしに淺手深手二十六所被りければ終に死たり父城より歸りて小次郎が手箱を開て見るにあまた書置たる其中に母の方へ幼少より別れまゐらせて此まゝに討死せば御なげき有んこそ心にかゝりひへまべし此世に殘り給ふとも終に逢奉るべきにて候へば思しめしわけてなぐさませ候へとこまぐと書ておくに

生れこし親子の契りいかなれの同じ世にたに隔はつらむ

と書たりしによりて思ひ定めたる討死なりと人皆をしみけるとぞ

○山崎合戦の時堀久太郎秀政の士の子何がしといへる者明智のものと又奉公きて有しが光秀夜のいまだ明ざる内に寶寺の山に兵をおしわぐべしと謀りしを父のもとに告やりておもひ

よら老敵味方となり明日の一戦よ及ばん事を歎きける其書狀を則ち秀政に見せたりければ

秀政夜半に寶寺の山におし上り陣し待かけたりけるをいかで知べき夜明がたに明智が先手

押寄たる處を秀政山上より銃炮を打かけ不意に切てかゝり追崩して一戦に利を得たり

○山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士則武三大夫首を取て吉晴の前に來る吉晴おもひしよりも出

かしたりと詞をかけられしかば則武怒て首を提てすゝみよりかゝる時の大將も目のくらぐ

あつ物かお則武三大夫が取たる首よく御覽われと罵る吉晴もにぞき歎哉といふまゝに刀を

振て斬られしに胃の星を削りたり則武眞一文字に敵の中にかけ入り又首を取て歸る吉晴の

必走則武の討死せんと悔おもひれし處に則武來れば大に悦んで汝をさきにはめたる詞賞を

る餘りにおもひしよりもといへる剛の者にいふべき詞にあらまわが過にてこそあれ汝が二

度の先がけ大きにすぐれしよと感せられけり

○天正十年瀧川左近將監一益の信長の命より關東の管領として諸將の質をとり上野の鹿

橋にありける處に六月七日信長弒せらるゝの變を聞き老臣ども事をかくさんと雖ども一益

悪事千里といふ諺あり秘するもと能はじとて上州嶺の城主小幡上総介信眞鷹巢の城主鷹巢

三河守信尙金山の城主由良信濃守國繁館林の城主長尾但馬守顯長小股の城主澁川相摸守義

勝翁賀野の城主翁賀野淡路守秀景白倉の城主白倉左衛門佐藤岡の城主内藤大和守秋宣安中

の城主安中越前守高山の城主秀景遠江守重光五開の城主五開川部小泉の城主富岡六郎四郎

石倉の城主長根縫殿介大戸の城主大戸民部直光木部の城主木部宮内貞利和田の城主和田右

兵衛の大夫信業那波の城主那波對馬守宗元武州忍比城主成田下総守深谷の城主深谷左兵衛

憲盛松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招き信長の變をつけ各の人質を歸しいそぎ上京

して吊軍すべき旨をかたる諸將大に感じ此一大事を告て人質を歸されんといかてか二心す

二九

べき人質を其ま、置て仰に従ふべしといへば一益諸將の義心謝するに詞あし北條の表裡定めて一益を討取て上野をおし取べきならむ此方より打向ひ一軍せんものをとて城に同姓の彦次郎忠往を守りに置一万計の兵を率ゐて神奈川より押出す

○天正十年五月廿八日光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌しける

と元は今あめが下しる五月かな

水上まざる庭のなつ山

花おつるながれの末をせきとめて

明智本姓土岐氏なれば時と土岐とよみを通りして天下を取の意を含めり秀吉既に光秀を討て後連歌を聞大に怒り紹巴を呼天が下しるといふ時は天下を奪ふの心あらはれたり汝しらざるやと責らる、紹巴其發句の天が下あるとす然らば懷紙を見よとて愛宕山より取來て見るに天が下しると書たり紹巴涙を流して是を見給へ懷紙を削て天が下しると書換たる迹分明なりと申すみなげにも書きかへぬとて秀吉罪をゆるされけり江村鶴松筆把にてあめが下しると書きたれども光秀討れて後紹巴密に西坊に心を合せて削て又始のごとくあめが下しると書きたりけり

光秀

西坊

紹巴

三九

○織田信孝秀吉と弓箭をとる時信孝の乳の人を人質に秀吉のもとに出し置かれしを磔にして誅せらるかの乳の子の幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり是より前秀吉信孝の長且等をかたらひる、に岡本下野守の同心して信孝に背きけれども幸田の背かき幸田が母誅せらるゝに及て子の彦右衛門に書を送りて我今空しく成ことゆめく歎くべからせ親の必子に先たつ習ひなり唯忠義を守りて君になん背き參らせそと云遣のしけれハ聞人感じあへり天正十一年四月十八日秀吉の先陣信孝の地に責入る時幸田兄弟いさぎよく討死したりけり

○佐久間玄蕃盛政柳瀬にて中川清秀を討取りける時秀吉長濱より一騎がけにて來たられけり志津が嶽に到れば日暮ぬ陣の相去る事二里計なり盛政使を以て早く軍を寄られ相待はせに夜明の矢合仕るべしとぞ言送りける秀吉聞て是より申さんにゆゝしくも承る明日潔きよく軍をどぐべしとて使を返えて後吾に怠らせ夜討せんとこの事ならん遠き異國の張良のしらす我を欺るべき者日本に有りとの覺るぞとて野にも山にもかかりを透間なく焚て白日の如し佐久間の敵人馬の行程を急で疲れたる處へするりと押寄打破らんとおもひけるに秀吉の謀に夜討の支度空しく成にけり

○志津が嶽の合戦、堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時其臣堀七郎兵衛押留て日勝家の

四九

陣より佐久間が陣に頻に使來ると見ゆ疾引とれとの事ならむ若引取の玄蕃本の道を歩歸るべからせしからば間近き所にて戰有るべし玄蕃引き取らせの勝家必來て軍あるべし此二つを出つべからせ兵を分たせして待へしといふに玄蕃も退せ柴田も進ざりしかば勝家運盡たりと云しが其して敗北しけり又志津が嶽の事を老功の人に問しに勝家の詞のごとく玄蕃引き取らば勝利を全うすべし玄蕃か言の如く勝家押詰來らば必き敗軍すまじきなり兩將互に猶豫して勝を失ひたりとぞかたりける

○志津が嶽よて佐久間が人数亂るべきを秀吉見て近習の人々も向て爰ぞ鎗を合せよと詞を懸らるれば各競ひ進む福島市松加藤虎之介加藤孫六郎片桐助作平野權平脇坂甚内糟谷助右衛門七人あり其夜秀吉今日の七本鎗の者として呼れけれども誰といふ事を知らせ其時指を折てかぞへられしかば前に進み寄るなり是より賤が嶽の七本鎗と世に唱へけり中にも福島番に進で鎗を合はせたる上首を取たりしかば五千石わたへられけり其餘の皆三千石與へられぬ福島の紙の切裂じなへの指物加藤嘉明の紫はる清正の紙のしで馬れん片桐の銀の切裂えづる平野の紙子の羽織糟谷の金の角取紙のえづる乃指物さ、れたりとぞ

○賤が嶽の前夜石川兵助と福島市松と口論し既に刺違ふべき体なりしを座に在し面々明日

の軍に身を捨て高名を遂らるべきにこのいかなる事ぞと押留ければ石川面々の前よて口も得明ざる市松何とてこはき鎗先よ向ふべき明日わが後影を見よかしと云捨て出けるが直に柳瀬に赴て只一人眞先にす、みて討死しけり人々其勇氣のいかめしけれども其怒りの戒とすべしといひあへり秀吉石川が弟長松に感状を與へられけり其文に曰

今度三七殿依違貳一軍ニ美濃大垣ニ之處柴田修理亮勝家出張柳瀬ニ欲レ一戰ニ之時兄兵助先赴合鎗ヲ令ニ殲死ニ援辭之働也 動發 於ニ眼前ニ見レ之ヲ汝 雖レ爲ニ若輩ニ念ニ兵助之壯志ニ與ニ秩千石ニ向後愈可レ抽ニ忠節ニ者也

天正十一年七月五日 秀吉

石川長松殿

とが、れたり

○賤津が嶽の軍破れて佐久間を生捕來たる秀吉見て汝ハ武勇逞しき者なり助て國を與ふべし二心なからんやと問ふに盛政冷笑ひ我に國を與へなば汝を生捕擣んこと今日我身の上の如くせん新に恩を受るとも柴田を忘れんやといふ死すべきに及びて大紋緋裡廣袖の小袖白帷子に空ださして呉られよ一生の終りに風流を盡したし是れ一つの望みなりと云しかば

五九

秀吉其望みにまかせられしかば大ひに悦んで是を着たりけり又番其時廿七才みな人をしむ

○尼子家十勇士と世に唱へける山中鹿之介敷原次之介五月早苗之介上田稻葉之介尤道理之介早川鮎之介川岸柳之介井筒女之介阿波鳴戸之介破骨障子之介なり

○秀吉信雄を打亡ばさんと謀て先信雄の長臣岡田長門守津川玄番淺井田宮丸瀧川三郎兵衛をまねさ懇にもてなして後信雄に自害をすめよさらば恩賞あつく行ふべしと語られけり聞入れぬの首を刎れぬ氣色ある上へ神文を書よと責らる四人力なく承りぬと云て起請文を書にけり秀吉も約を背かじと神文を出されけり是の一人づゝかたらふべきを一同に招きたるの信雄に告知らする者有て殘る者を誅せせんとの謀なり又皆秀吉に實に心服せども既に神文を書たれば疑ひて一和すべからむと思慮せられたるなるべし瀧川素と僧なりしを價長呼出し四万石の地を賜りし身なれば長島に歸て信雄に斯と告せし頃て三人を誅せんとて長門の飯田半兵衛を番の土方勘兵衛田宮丸の森源三郎と討手を定められけり土方承りて長門をの臣に仰せ付けられよ打留ゆさんといふ飯田既に定りたるうへ何の事條のあるべさぞといへば信雄さらば長門をば土方討て飯田の既に下知したれの討たるに同じとて長

門を土方に譲りけり土方が斯云ひけるに故あり土方の始彦三郎と云ひけるがふとく逞しくより手足に至るまで毛生熊の如くにて勇猛の士也長門常に土方に語りて殿の人の申事輕り々しく信せられて日比我を疎まるよと度々云ひけるを土方夫のたはふれか又の汝の心乃違たるならんといへば長門いやしく此の長門をば必誅せらるべし其時汝討手なるべきよたやすく討るべき身に非せといへば土方聞きて討手の仰を奉らん此勘兵衛ならで又誰か有るべきと語りたるに長門仰に依て此七つ胴切落したる脇指にて汝が頭を斬破んと云ひける詞に依て斯のやせしなり天正十二年三月三日の禮に岡田信雄の前に出けるを相圖とせられけり岡田其日の脇差を横たへて進み出る信雄新に造らせたる鉄砲を見よとて指出し此薄尻の穴の何の爲ぞと問のるよ岡田少し羞うつむく時土方つと寄引組だり岡田已をやといふまゝに脇差を七八寸抜けれども大力に強く抱かれて扱もはなたせぬち合ひける處を信雄土方放せ我自ら切んと詞を懸られしに臣と共に斬せ給へとてとなさす信雄放されいつ迄も斬まじと云れしかば土方岡田を突放し様に小脇差を抜て指通せば信雄をかき切て殺されたり津川の此騒を聞て走り來りけるが信雄に行逢刀を取延て切たりしに廊下の長押に切付たるを飯田傍より刺殺しけり淺井をば森討留たり是よりして秀吉と弓箭をとられけり

○平松金次郎重之の度々口論の時後れ有殊に遠州新井の渡り舟にて柏原新五郎平松が從者を討たるにためくとして有ければ人々嘲笑ふ東照宮聞し召し人の何ともいへ平松が眼ざし剛の者なりと仰せられしが果して長久手にて懸り兼たる處に平松苗の羽織を着十文字の鎧を提す、み出池田家の軍兵の真中に鎧を入れたりける其後出仕の中に諸士に向ひ吾胎内より厚恩を請みだりに一命を捨てと思ひしが今の早思ひ殘す事なし誰にても出られよ撫切にすべし昔の金次郎とな思はれそ殊の外あら者に成たりと大言しける一人も答る者なし平松が勇名高く聞えて先年天王寺勝曼の鎧貝殼塚の鎧備前八濱の鎧をこそ言ひ傳へたれ平松が鎧の近き頃まれなりと世の人賞しけり秀次一万石にて招かれしかば平松立退けるを聞し召小栗又市渡邊半藏河村善七郎坂部治兵衛を追手に出させ給ひ岡崎へ早飛脚にて本多作左衛門にも御下知有り平松終に袋井の北なる可睡齋にて自害せりと

○長久手の軍に水野忠重の嫡子勝成の目を病て兜を着せ鉢巻したりけるを父見て汝が兜のゆばり盡にしたるかど罵られしかば父ながら餘りの詞かな真先かけて首を取るか吾首を敵にとらるか二つの中よといふまゝに馬引寄て打乗もる鎧をわてかけ出す忠重あきいかにとて太田重助といふ士をして呼返されけれども耳にも聞入れも又水野喜右衛門とせ來

り引きとめんとするを勝成はたと睨で煙の上の諫の聞きも入るべし只今大軍の中にかけ入り功名せん時止れとて引返す様や有るかといひすて秀次の將白井備後守が陣に突てかゝり兜首をとりてはせ歸る此日の一番首なり勝成あら者に人を物とせせ忠重の心に忤ひ虚無僧となりて國々をめぐりて武者修行す後に忠重死して東照宮勝成に三州蒔屋を賜はり日向守と稱して大坂の時大和口の先陣として大功有じ人なり

○東照宮小牧に陣しておのしませしが秀吉兵を分ち中入すと聞し召敵の迹に従うて向はせ給ふ小牧に石川伯耆守數正酒井左衛門尉忠次本多平八郎忠勝を殘させ給へり然るに秀吉大軍を出して長久手に向はれけるを見て忠次の秀吉の本陣樂田へ押寄火をかけて攻撃べしと云ひけれども石川秀吉後に變有りて聞て彌怒られなんと強て押へて止りけり忠勝の秀吉の馬じるしを見るより僅に五百計引さ具し小牧をかけ出小川一筋隔て秀吉に相ならび長久手さして馳向ふ路にて足輕を進め鉄炮を打ちかけ一と軍せんとすれども秀吉見ざる休にて取合を龍泉寺の前にて忠勝馬を川に打入口を洗ふ秀吉の鹿乃角の立物の兜を着たるの大將と誰か見知たると問ひるゝに稻葉伊豫守道朝過し年姉川の軍に武者出立見知たり本多平八郎なりと申しめあへぬ秀吉涙をばらくと流し五百に足らぬ士卒をもて吾八萬の軍に

かけ合ひさんどぞる千死せんし一いつし生なまもなきぞかし然るに道みちを際はなせらせ已しが主君しゅくんの軍いくさに勝利しょうりあら
 せんとの志こころ勇ゆうと云忠ちゆうと云誠まことに類たぐひなき本多ほんたかな秀吉ひでゆき運強うんつやうくの軍いくさにかたんなわたら者を討うべか
 らせとて弓鉄炮きゆうてつぱうを制せいせられけり斯かくて忠勝ちゆうかつ長久手ながくでに馳付はせつたれば軍終いくさおわりて敵味方てきみかたどもに見まるるこ
 のいかよといふ所に味方みかた打勝うちかち小畑こはたに入いらせ給たまへりとも聞きもみにもんで追付おつ奉ほうり御馬ごまの側わきに
 乗寄のりよせ云いひなくも小牧こまきに捨すてさせ給たまひかゝる軍いくさよ合あひ不ふ申まをしけれは聞きし召取めいしよあへも汝なが
 躬みづかみの我身われみなりとおもひて小牧こまきにとゞめ後あきらに危あやき事ことなくこそ軍いくさにの勝かちたれと仰おほせりけり其
 後のち天正十八年てんていじゅうはちねん秀吉ひでゆき北條きたじょうを打ち亡なぼし七月廿六日しちがつにじゅうろくにち野州のしゅう宇津宮うつみやにて平八へいぱちを呼よべり忠勝ちゆうかつの下総しもうさ
 の鷹南たかみなみに有あけるが急いそぎ参まゐる秀吉ひでゆき諸大將しよだいじやう並居ならひたる中に呼よび出し熊野くまのより佐藤さとう四郎忠信しろうちゆうじんが旨めいを得
 させたる者もの有あり四郎しろうが忠義ちゆうぎ後世のちのよ迄語傳いたりつたふ四郎しろう又劣せうらぬ人に着きせなんとおもふに誰たれか有あるとい
 はれしに答こたふる人ひとなし其時そのとき秀吉ひでゆき四郎しろうにまされる者ものの平八へいぱちなり子細こさいのしかくなりと長久手ながくで
 の軍物いくさものがたり忠勝ちゆうかつの有様ありさま審まに云いれて則すなはち胃いを忠勝ちゆうかつに賜たまひければ忠勝ちゆうかつ面目めんぼく身にあまる心地
 して出でられけるよ其晚そのばん又忠勝ちゆうかつを招まねき傍そばの人ひとを遣まげ自茶みづぢやを與あたへけふいくらも諸大將しよだいじやう並居ならひた
 る中なかにて汝なが武勇ぶゆうを褒奉ほほうたるの秀吉ひでゆきが恩おんならせや主君しゅくんの恩おんといづれぞと問とはるゝに首くびを低たげ
 て物云ものいふ類しるにははれければ忠勝ちゆうかつ承うけり誠まことに添ましとのやせども累世かさねの主君しゅくんの恩おんとならぶべきに

非あらせとやされしかば秀吉ひでゆき愈々いよいよ感かんせられけり

〇小牧陣こまきじんの時とき榊原康政さかきはらひさゆき秀吉ひでゆきの事を誹そとて札しやくに書かき田家たけに向むひて弓ゆみを引ひく事こと不義ふぎ惡逆あくぎやくの至いたりな
 りと書かて所々ところどころに立たたるを秀吉ひでゆき齒齧はしかみしてゆかり康政ひさゆきが首くびをとらん者ものにの十じゅう万石まんせきの地ちを與あたへん
 とぞ觸ふられける其後そのち東照宮とうしやうみやうと和平へいへいして婚姻こんいんの約やくありける始はじめの使つかひに康政ひさゆきを賜たまはるべしと秀吉ひでゆき
 やされて京みやこに上のぼりしに秀吉ひでゆき對面たいめんし小牧こまきよて札しやくを立たたる時とき汝なが惡にくき首くびを一目見ひとめん事をのみ思
 ひしに今期いまき和睦わくぼくに及およば其の志こころを悦よろこび思おもふなり此事このことを直ただに云いふが爲ために迎むかへたり小平太せいやと
 呼よべりいかいなり叙爵じよかく然るべしとて式部大輔しきぶのだいほふとの此時このときよりぞ申まをしける偕ともて饗禮きやうらい有ありて厚あつく馳走ちしゆ
 わりけるとぞ

〇東照宮とうしやうみやうの小牧こまきの陣じんを秀吉ひでゆき二重湊にじゆうみなとの城しろの櫓やぐらに上のぼり見みやりて高山たかやま右近大夫みぎぢんたいふ幸任ゆきとうを呼よべり小牧こまきに
 書翰しよかんを送おくり一戦いちせんせんと思おもふなり十三万じゅうさんまんの軍兵陣ぐんべいじんを整ととのへて押出おしだし後に柵さくの木結きむすて引き退しりぞぎ
 る手立てだてせんのかにと云いはれしかば高山たかやま是こゝに思おもひ止とどませ給たまへり小牧こまきよりの返書へんしよ必かならず怒いからせ給
 ひん事を申まをす來きるべしといへども秀吉ひでゆき増田長盛まくだながさきに書翰しよかんを書かき長岡忠興ながおかちゆうけいに敵陣てきじんの木戸きどなる道みちに
 立たよと下知したちせらる高山たかやま色いろを變へんじ仰おほせなりとも行いふとぞ制せいしける秀吉ひでゆき忠興ちゆうけいの弓箭きうげんのはげし衆
 所ところへの思おもひもよらじ剛ごうの者ものと使つかひせんと云いはれしかば忠興ちゆうけい高山たかやまを睨にらみてつと立て馬うまに乗のり竹たけに

秀吉
小松塚
を登り
臀を
敲く
圖



書翰を挟み乗行て群だつたる松原の小塚の上に押立て歸るを見て秀吉悦ぶるや有て小牧の陣より月毛の馬に乗紅の母衣掛たる武者書翰を取て歸るしばらく有て金の枇杷へらの指物さし鹿毛なる馬に乗たる武者書翰を竹に挟み元の所に立てけりあれ取來れと云れしか
 野太郎作正重が書簡にて其詞に後に柵結て一足も引くまじきと思ひ定めて軍あらん事免も角もこのことあり三河者下部に至るまで一足も遯ると事露計も不存候とぞ書きたりけり秀吉讀も終らき怒られければ高山されば斯あらんとて申たる事よと居たけ高に成て申そ秀吉冷笑ひ馬卒出させひたと乗僅四五騎計にて松原の小塚に上り鬻を打たさ敵の大將是險へと大音に呼ひるを小牧より唐冠の冑に孔雀の尾の羽織着たるの秀吉よあますなとて鉄炮を打かくる秀吉天下の大將軍にハ矢の中る物かハと云てしづくと歸られけり

○東照宮長久手の軍に勝せ給ひ勢州壁江の城前田與十郎を御政あらんとて打向かハせ給ふ所に加勢多く馳入けるを御覽じて敵いかはども城中へ入れよと仰せられまを酒井左衛門尉忠次承りて何とて押留給ひぬぞやと申す東照宮いかと思ふぞと御尋ありしかバ忠次城の堅固なり多勢こもりあハ争か攻落すべきいかなる御心かと申すを聞し召し大將謀を云や

うや有ると仰られけるが其後援兵の乘來りける船を追拂いせ粮道を絶せハ給ハ粮忽乏しく成て城を渡し降参しけり

○壁江にて井伊直政兵をそとひ秀吉の舟手の大將九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船に乗壁江の湊に漕入れて打上り堤を隔て戦ハんとせしが引退て船に乗るところに入江の湊よ東照宮の兵船角新造といハるを横櫓にして左右よ亂櫓をうち真中に取囲んとぞ直政ハ追かくる九鬼が者共多く討たれ水主揖取驚騒ぎて船を出だし得まかふる處に九鬼が士村田七兵衛鉄炮に藥を込問宮造酒亮が船先よて下知しけるに大音上げて靜に相だめにするを兩軍なりを靜めて見物す其の中に九鬼が者どもひたくと船に乗組たるハ村田が躬を捨てしづめん爲の謀もあなり斯て村田おもふ矢埒に當りて間宮倒れしかバ九鬼が者ども力を得鉄炮を打かけ船を乗淨めて湊を出にけり

○秀吉小牧に陣を出す時紀州の根來雜賀の一揆を押へんため中村式部少輔一氏を岸和田の城に置れけり紀州の一揆秀吉大坂を打立つと聞て三万三千計二九手に分れ一手ハ東の山際より堺に向かひ一手ハ岸和田に押寄るはやり雄の若者ども二騎三騎城を出て寄手に向ひしかハ士大將早川助右衛門川毛惣左衛門引き歸へれと使をやるを一氏聞てかふる時進で行重

りたる武者を引かんとすれば敗北するものよいざ打出んとて鉄蓋が峯と名付し兜の緒をしめ城を乗出す先きに進んだる者共菅笠の馬印をふりかへり見てすのや殿こそ出給へ軍の勝たるよと云程こそあれ一万餘の紀州勢に面もふらず切掛り打破て七筋に分て逃るを追ふ一氏の三百計にて堂の池といふ所に控て先陣の歸るを待つ處に堺海道に馬煙くらう見ゆ是の堺に向ひたる敵の返し來れる也荒手の大軍にかけ合て戦はん事思ひもよら老疾城に楯籠らんと口々にいへば一氏いやく退ならば味方氣挫て打ち負けなん一寸も退く時の先陣を捨殺し城をも攻落さるべし一揆の何百萬もあれ先陣をだに切崩すあらば二陣の忽ち敗北すへし我に任せよとて敵の一同にかゝりおたき地の理を量り堂の池を前にして大敵を待れけり一氏馬をば悉く城へ歸へすべし馬を引き付け置く時の引退たき心の起るぞとて床几に腰かけ旗本三百計の勢鎗を膝の上に置いて折敷たり新藤勘左衛門強弓矢繼早の手利なるが散々に射る射しらまされて手負死人倒れ重りてためらふ時一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば愈指詰引詰射ける矢にあだ矢なかりけり一氏塵を取か、れというて立上る黒田如水の大坂にありしが岸和田に敵押寄すると聞き子の長政十四歳になりしが岸和田にあればいざすくんとて七百計にて敵の後にかけるを一氏見て愈と、みをめささけ

んで切てかゝり追立て八百餘の首をとりたり如水の長政いかにとおもふ所に黃羅紗の羽織着て鹿毛なる馬にのり今朝討取りし首を鞍の四方手に付て馳廻るを見て悦る、事大方ならむ秀吉一氏に感狀賜ひてけり一氏の豊臣家諸將の中にも勝れし勇將なれば加藤嘉明もうらやみ慕ひて吾子の明成を式部少輔になしけるとぞ

○竹中半兵衛重治の美濃の菩提の城主なり後に秀の軍奉行たり謀畧有る人なれども打見たる處の婦人のごとし軍に臨む時も猛威なる事なし馬乃皮にて包める甲を着木綿の羽織一比谷と名付たる岡の緒をしめ静り返へりて居けり重治向ふ度ごとに士卒戦せして既に勝たりと勇みあゝり重治或時軍物語せしに子の左京いまだ幼かりしが座を立ちければ重治軍の國の大事なり何方に行くと問ふと答ふ重治爰は溺をたる、とも軍物語の大事の席と立つ事やあるといかられけり

○稻葉治左衛門の美濃齊藤家乃士戰場にて必き真先に獨進み出て芒の如くなる所に居ける故世の人は是を芒の治左衛門と言けり澤喜藏の美濃飛弾に隠れなく若き頃より功名有芋から鼠の鎗澤一番なりと言を吾にのわらむ稻葉なりと云て互に譲りて決せむ澤の吾早く進みだれども稻葉がはろの手をしひる隙に先に乘込たり實の一番稻葉なりといふ八皆是を賞しけ

り有吉武藏が足輕鉄炮に鎗を持添て鉄炮を打其上に壹番鎗を合せたるが吾一番のちりて園部儀大夫がほろの手をみるを見て駈出ぬ園部が一番なりと譲りしと同事にて戦國にかゝる士いまれなる事にこそ

○羽柴下総守勝雅の許に二藏三藏とて物し有いづれの城にての事にや有し下総守城より出て働き引き取りたるを敵付来る二藏三藏門を固めて揚篋戸を下して敵をたてこめたり勝雄下知して門を明て敵二人を出して討取ら近藤石見守加勢たりしが其子細を問たてこめられたるの死地に入たる敵あり是を討ば城兵餘多死傷すべし打どめたればとて軍の勝敗にあづからせと答ふ石見守武功の人なりし故大に感したり

○瀧川一益佐々成政等信孝を推崇て秀吉と弓箭を取しに天正十二年九月成政八千の兵を率ひて加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永福伊豫守る所の能登の末森の城を圍ひ成政旗下を以て後巻を押へ嚴しく攻る此城だに打破らば能登の一日に討従ふべし後巻なき中に乗取れと下知しけり奥村僅に三百計の士卒にて爰を詮度と防ぎけるに餘りに強く攻められて今は是も也自害せんと云ひけるに助右衛門が妻小袖をかい取鉢巻をし刀を横たへ女房に粥を手桶よ入れさせ堀裡の人々に自ら飲せ昔楠とやらん云ひし大將の日本

國を敵にして城に籠りたりしと聞く明日バ金澤より後詰すべきに只一夜防ぎ給へと云て打廻るを奥村見てけふの振廻男子に優れり此城を女の力にて持得ん口惜と自負の色あり此城たやすく落つべからざるを見て火攻にせんと云者あり成政いやく大手の城門を取て富山の城門とすべし又石動山の衆徒も吾に心を合す火攻にすべからせと下知して既に二三の丸を攻取て夜の明るを待居たり末森より金澤へ行程九里計其日酉の刻に斯と告て夜の明くるまでの堅く守るべしと申送る利家聞きもあへせ金澤の城の廣間へ出利長を呼で汝の城の留守せよと下知せらる利長いやく真先かけて佐々を打ち破るべし残止らん事思ひもよらせとサされければ利家さらば父子打向かひ敵の不意を討に利あらん軍兵を整るに及ぶべからせ馬に鞍だに置くならぬ一騎がけに打出よ一足も疾出るを今宵の功とすべしとて富田與五郎後越に汝津幡に行て不破彦三に末森の後巻の先手せよといへと下知せらる富田巴の宿所に馳歸り馬引出し打乗諸鎧を合せてかけ行けり利家士卒みる汁をかけて飯をくへとて物具せらる庭に黒の馬を引立てたり利家の北の方春院せられ扱人々聞給へ我れの利長の母なり今日の後巻の誠に大事の軍なるべし各心を合せ功名し給へ末森を敵に取られぬ各達も討死し給へ我れも人手にかゝるまじとて利家の

側近く進みより末森を敵攻落しなげ討死せさせ給へ利長も母が此詞を能聞れし生死の別れなりといわれしかば利家あらし心よや成政を打破らん事必定ありといひもわへ物具の上帯を結べる端を切つて捨て馬に打乗る父子の兵五百計に過ぎりけり利家馬上にて味方の小勢の吉事なり佐々が思ひもよらざる所に切つてかゝり打勝べし奥村討たせなば生がひなしと云つ津幡の町を北へ打過さられたる時富田乗來る津幡の金澤より四里餘りの行程あり利家汝いづくに寝て有けるぞと罵らるるを富田聞きて津幡に馳付不破が門を叩き申渡し不破物具着たるを見て打出づればや門外に旗を指出しぬ何國にか寝申べさといふ利家尙聞き入れざりしもの富田怒て其日の一番鎗を合のせけり是れ利家士を激するの術なるべし利家の士卒追々馳付ければ三千餘りに成けるを二陣に分一陣敵の後に打かゝり一陣の敵の旗本に突てかゝる成政軍兵疲れし上思ひ寄ざる所に奥村も門を開きて打て出しかば成政大に敗北せり是天正十二年九月十一日の軍あり

○天正十三年四月八日前田利家金澤を打出鳥越の城へ押寄らる鳥越の城の金澤よりも兵を入れ置きたるが去年末森の時城を明退て成政の軍兵入替り守りければ利家は憤りて政落さんとの志なり城兵も久瀬但馬守其外撰みたる者共五百計門を開て突て出で利家の先陣

を追立つる利家のかたへなる山の尾崎に陣して馬を立られしに味方敗北するを見て山崎少兵衛の如何したるやは返すべき塩合なるよと云も終らぬに白き羽織にて進み出たる者のありといへば利家山崎出たるよ早味方勝たるよと云れけり旗本の早りをの者どもかけ出んとするを敵の勢競ひ懸りて足の陥止がたき時なり今少し待べしと下知せらる徳山五兵衛只今鎗を合たると見えたり地煙立たりと云けり然るに近邊の越中乃兵城々より助來て敵の陣の黒みけれども山崎が與力鷲津九藏と名乗鎗を打入り早かゝられかし左なく九藏危しといへども山崎静れと云詞の中に九藏倒れたるを見て山崎進み出て鎗を打入れ押崩して城際まで追打にしたりけり城兵門を指固めければ利家強て攻めて引返されぬ此軍の前利家の近習の士九里少藏勘氣を蒙り居たるが成政馬廻りの將杉江彦四郎と組打して谷へ落組しかれ杉江刀に手をかけたる處を下より少藏小脇指にて具足の鎖のはづれを刺通し刃返しけれども氣つかれて首を取とを得ざりしに片山内膳が従卒來りて少藏を押のけ相討と云て首を取たり利家細やかに事を糺明して少藏が功名に定り勘氣をゆるし鞍置馬を與へられけり

○天正十三年三月東照宮濱松の城にて疔を病せ給ひ近習の若き人に膿を強く押せ給ひしに

九御遺言を仰出されしに本多作左衛門重次参りて先年臣を療養せし精谷政利入道長閑が薬
 を付させられよと申ければも聞し召入させ給ひざりしかば作左衛門大に怒り殿は徒に死し
 給ひんよ此作左衛門の年老ぬれば只今自害して待奉るべしとて座を立てけるを御覽じていか
 よ作左衛門氣狂ひたるか未なづらへたるに自害との何事ぞ吾なからん後こそ大事なれど仰
 られし時作左衛門夫の人の人によりての事なり若き時より幾度となき軍場に数ヶ所の手を負世
 の中の時となり今日まで殿の御情にて人がましくもある也只今殿過させなば北條を始とし
 て敵國より攻來らんに殿におくれ奉りはかぐしく軍をさる者やあるべき國の忽ち滅亡すべ
 し其時作左衛門の路の邊に餓死せんながらへたらばあれこそ徳川家に奉公せし本多作左衛
 門よ何を頼みにながらへたるなど人に嘲り笑ひるべし近き頃武田の内にて甘利殿とて人の
 敬ひたる人も武田の運盡ぬれば今の本多平八郎が組となりかゝ居るを見るも哀なり是
 の人の上ならせ勝頼の不道よて滅したるも殿の薬をさらひ給ふも同じ理なりと申せば東照
 宮尤也とて長閑を召頼て薬を奉り灸を大にして作左衛門を奉りければ夫より痛み漸く輕
 くならせ給ひければ作左衛門聲を上泣て悦びしとぞ

○天正十四年正月秀吉織田源五郎長益羽柴下總守勝雅天野佐左衛門三人を使として東照宮

に和平を乞れけり三人歸て和平おもひより重て來らば首を切らんと徳川殿申されし由
 申入る又かさねて三人を三河へ遣し強て和平を請せらる東照宮三河の吉良にて左の手に鷹
 を居させ給ひて三人に御對面より三人申しける信雄卿の厚恩を忘れての事にはあらねど
 も秀吉計略を瀧川三郎兵衛に羽柴の姓を與へ下總守になし神戸の城主とし三万石の加祿し
 其外數多都に妻子を置人質と成りぬさまぐの謀なれば此度和睦致さば秀吉軍を出し清洲
 にて勢揃して打向ふべきとなり四國中國の兵も相加り去々年小牧の時より兵十万も多か
 るべしゆゑしき事を申ければ東照宮聞し召去年十一月伊勢の奈合にて信雄卿と和平の時わ
 が方にも已來別の事ありしなど云たるも我をたがかるの謀よて吾家の石川伯耆守に十萬
 石與へて我に背かせたり吾弓箭を取て發向せんと思ひしかども織田殿の國を打過て軍せん
 事いかにと怒を押へて止ぬるに無禮の事どもなり秀吉清洲にて勢揃せんことを望む所なれ鳴
 海表にて一軍をゐるべし然らば東美濃に打出て土岐遠山惠奈三郡を切取べしとてむちを
 指上られ此鷹一もとにて手配すべしとて打笑ひせ給へば三人歸て秀吉にかくと申す秀吉聞
 てさての大勇將かな今夜思慮すべしと云れし時丹羽長重進み出必軍の思召止り給へ長重
 が士ども刀の鞘袋を設し故子細を問に鞘に三ツおさを拵へ合戦の時ハ鞘袋を捨て三河武者

に紛れ命を助るべき支度と申しも果ぬに蒲生氏郷堀秀政も皆く士卒其心得に之あり方に
 一つも利あらねばと云へば秀吉よしく徳川家を打破りて各々に見せん物をとて止みけれ
 ば三人退出し道にて彼猿の死所なくて物に狂ふやと私語たり翌日諸將をあつめ三河を打滅
 さんは安けれども智勇の大將なれば吾日本を治むべき事を相談せん爲に縁を組妹を嫁し
 て和平せんとて又三人をやられしかば東照宮三ヶ條の誓文を御所望有り秀吉許諾して和平
 に及ばせ給ひけり四月秀吉の妹濱松にねはしまして後に京に登らせ給ふべきひねを秀吉
 請て秀吉の母大政所質とせられしかば都に登らせ給ふべきに定りけり長臣ども是の危き
 事也然るべからざる由諫め申せども聞召入給はず其時申しけるの和平又破れ秀吉攻來ると
 も素より餘先の強きの云までなく何十万の大敵なりとも打負まじ強て思召し止り給へど申
 ければ東照宮聞し召諫る旨尤理なりされども秀吉に畏れて行にのわらぞ日本久しく兵
 亂にて四民安堵せむ此頃や治りたるに復秀吉と弓箭をとらばいつの世にかの静謐せん只
 とく秀吉に對面して日本太平の基とせん若危難に及びなんにの万民の命に替らんにか何か惜
 かるべきとて九月廿日濱松を御首途有けるに定りければ人々廿日の四ヶの悪日とて千人出
 て一人も歸ぞと申し傳へ一日御延引然るべからんと申す東照宮千人行てこそ大事もあらめ

我今度一万二千の軍兵を引具し上京す此軍兵一人も生て歸らざり吾爲の大吉事なりとぞ仰
 られける井伊直政を御留守居とし此度若し秀吉詐を構へ變に及ぶとも危からし尾張大納言
 信雄の必ず吾に告知せて味方たるべし丹羽五郎左衛門秀吉に恨われべ心を合せなん其外吾
 に志を寄る人多し去ども我も亦其備なからんや秀吉不意に謀をなすならば京都に火をか
 け東寺は楯籠るべし其時素より立置たる汝が組一万を五百づゝ二十に分ち外に酒井柳原が
 今度京に上る供の外留置たる兵一万是も二十に分ち佐屋の渡を越千種を押上るべし若大津
 にて支るならば武田四郎が長篠にて懸りし如く切つてかゝらば上方武者一支もすべからず
 又瀬田の橋を焚たらば宇治より攻め入るべし新七籠之介と云角力取二人の宇治の案内者な
 れば召具すべし斯の如くならば秀吉聚樂を退て大坂に引取ん所を東寺と清水と兩方より挾
 て打破らんに恐るゝに足る秀吉詐妄の謀をなさば吾天下を掌に握るべき兆なりと仰られ御
 出馬有り秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけり
 ○東照宮聚樂にて秀吉に御對面禮有ける日秀吉白き紙子の羽織に繕したるを着られけり
 淺野彈正長政彼羽織を御所望あるへしと私語ければ東照宮漫に人の物をもらひたる事なし
 と仰あり長政又御所望ありなば秀吉大に悦るべし素此の羽織の物の具の上に着んどの設

なれば一旦の辭し申されんを強て乞得させられなば秀吉何事比悦か是に増るべきとしひ申せば東照宮止事を得せして許容ましくけり楮聚樂の城門にて毛利浮田を始め居並びて拜調しさて茶を奉て後東照宮彼羽織の事を仰せ出されしかば秀吉悦びて手づから着せ奉り扱大名に向ひ我に物具させまじとの事ならせや誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なりとぞ語られける東照宮歸らせ給ひて後長臣達に聚樂の事ども御物がたりありける時吾に羽織を贈りて後秀吉吾に物具させまじさとの志なりと諸大名に向ひて云れし斯る後の争か秀吉の辭先に向ふべきと中國西國に語りつぎ云ついで普く世人の口に有べし筑紫の末までも聞えなん是天下の大名に威を示すの謀畧なり其遠大の謀輒く測るべきにあらん力を以て是を推んとするとも及難き秀吉なり

○太閤東照宮と饗禮有しよかけ盤を始め器不殘葵の御紋を蒔繪にし誠に美を盡したる次第ありしを東照宮本多正信に語らせ給ひ如何なる思慮や有らんと仰られしかば正信承りされば小笠原興八郎氏次の勇將の譽れ世上に聞えてたれくも旗下につけやと志し有しに氏次同心仕らで御家の旗下仰に従ひさ彼が内々の志の信長と朝倉と一戦有らん時必ず三河より御加勢に御出馬有べし其隙をうかひ御家の領國の己が掌の内に握らんとて偽

て二た心なき有様にし彼が計りし如く姉川の合戦信長援兵を乞れしに小笠原を先陣に命せられし故心中に狭む所ありといへども辭すべきやうなくて姉川にて御勝軍なりき小笠原が二た心なき体に見えしに御乗あがら御心に乘せられぬ所有し故姉川の先陣小笠原と御定有て彼が支度相違せり人の乗る所をのらじとするも一物有てなり乗る處を乗ながら乘ぬ心あるを善とす豊臣家の乗る所を右の謀にてあへしらはせなん事しかるべしと申ければ東照宮尤なりと深く信じ給はせけり

○信長弓箭盛にして幾内を打從へられし比近習の者共諂て斯く強大に及ばせ給ふ事を知らで平手中務が自害しけるの短慮なりとやけるを信長怒て色を變じ吾斯弓箭を取る事みな中務が諫めて死けるに恥悔て過を改めし故なり古今に例なき中務を短慮なりといふ汝等が志無下に口惜き事なりと云ひれけり

小瀬浦庵後に此事を傳へ聞て信長記を編ざる己前ならば必ず其の中に書き入るべき事を遅く聞て殘多しと云ひけると也中務大輔政秀の備後守より信長の傳に附られたり信長甚たよからぬ事多かりしかば度々諫争ひて後國の亡ん事を料りつゝ一封の書を留置て自害して失たる事世に普く知たれば具に記させ中務始の清秀と云ける故諸書にのみな清秀

と記されども後に政秀と改めける故諫死の後信長尾州名護屋に一寺を建られ政秀寺と稱し寺領二百石寄附せられ臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて中務の墓も其寺に在り寺の縁起に政秀葬送の時信長櫓よ手を懸られたる由記せり小瀬浦庵の町醫にて加州金澤に居利家の臣横山山城守長知の許に心安く常に來て毎夜伽しけり長知は尾州の人にて織田家の事能覺たりし故信長の事を浦庵毎夜尋問且秀吉の事をも問ける故長知或の委しく或ひのなるく語り聞せけるを浦庵退て書記し信長記太閤記二部の書を著し世上へ出しけるを長知聞て信長太閤の事を書記さんために尋問たらんにの答へんやうの有べきに遺漏も多く殘多き事なり其事を聊もしらせざるに依て只一座の物語に云聞せたるを其儘に書著したるの今に於て甚遺憾あり

○信玄死れし事を深く隠したるに北條氏政泄聞て謙信の許に告やられけり謙信の春日山に湯漬飯を食せられしが是を死く打驚きて箸を捨て飯を吐出し英雄どの此人なり關東の弓箭柱を失たりとて惜まれけり信玄の將畧の謙信に及ばざる故に高野の成慶院にて大成徳明王の法を修し謙信を呪詛せられし其文今に高野山に傳はりけるといふ

信玄勇才の人に超たりと稱せし父を逐ひ子を殺し降將を殺して其子を妻とし其餘不

仁怨毒數へ盡そべからむ始く此二事を併見ても二將の賢否論をまたせして明なり

○秀吉島津を討んどおもふ事年久し天正十三年仙石權兵衛を商人の体にして九州に問者とし山々浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見兵を分ち攻入べき道々を計られけり

○島津中務大輔家久肥前に攻入り島原の城を攻め落したる所に龍造寺隆信大軍にて押寄せり家久わづかに三千計なりしを幾重ともむく取圍む家久是を物ともせせ明日の合戦吾先陣すべし貝を相圖に切懸るべしと定て夜の明るを待つ朝霧深く物の色も分かれ家久將机に倚てはれ間を待ちやう朝日出て晴わたりしに子の又七郎豊久十五歳になりけるを近付け天晴武者振よ只上帯の結びかくするものぞとて結び直し脇指を抜て其端を切て後よく聞け若軍に打勝て打死せせ此上帯我解べしけふの軍に屍を戰場にさらさんに島津が家に生れたる者の思ひ切たりと敵もしり我も黄泉に悦ん物をといひもあへき貝吹立させ真先に隆信の旗下へ切てかゝる島津家の弓箭の先駆の兵の矢一筋持せ射放ちて弓を捨長さ刀を抜て切てかゝるけふも又しがしたりけり隆信の旗下亂れ立ち敗北すれば隆信きたなし返せと下知し遂に踏止り討死せられけり家久勝てはこらむ人数をまどめ陣を整へける所に龍造寺の臣惠藤を乳がし首一つ血に染たる刀に持添大將の何國におひしませぞ功名の印と云ひて家久に

近付寄り首を投捨て馬の上なる家久を一ト太刀斬たりしに家久心疾く馬より飛下りたれば左の草摺を切て餘る刀膝にあたりけり惠藤を中に取こめて討むとすれば家久あゝら者を討ちと下知しければ生捕んとすれども素よりけふを最期と思ひ定め切て廻りしほどに終に討れけり惠藤どのみいひて名をバ名乗せ家久惠藤が首を膝の上に置並びなき剛の者義勇の士との是をこそ云べけれ生捕て對面し龍造寺に送り返さんと思ひしに思ひ切たる戦死せられしかバ力及はずとて近所の僧を請じ惠藤が吊ひの事念頃に沙汰し其有様詳かに記して其僧に頼み故郷にやられけり楮豊久を呼て今朝の約の如く上帯を解たりしとかや家久の島津家の士六將なり豊久後又中務と稱したり關ヶ原に於て義弘の身に代り討死有し此人なり

○立花道雪の

始戸次といふ立花の跡を嗣し故立花と稱す始の名の鑑連男子なく高橋紹運の子を養ひて嗣とす

若かりし時雷に震れ足癩歩行心に任せ常に手輿に乗り累代大友家に属す大友家衰へけれども道雪心を變せせ武勇たくましき人にて士卒を見る事子を愛するが如し戦ひに臨む時二尺七寸有ける刀と種ヶ島の鉄炮を手輿に入れ三尺計の棒に腕貫をして手に提げ乗れ長き

刀挿たる若き士百餘人手輿の左右に引具し軍始れば手輿を此士にかゝせ棒を取て手輿をたさえいとうと聲をあげ此輿を敵の真中にかさ入よとて拍子取通さ時輿の前後をたゝかれけるに敵に北たるよりも耻として面もふらぎかさ入れれば手輿の左右の士三尺餘りの刀を抽連て一文字に切てかゝりけるに先陣の者どもすいや例の音頭よといひもあへぞ我先に競ひかゝりいかなる堅陣をも切崩さぞといふ事なし若先陣追立らるゝ時道雪大音上て我を敵の中へ身入れよ命惜く其のち述よと眼を見出し下知せられしほどに守り返して勝ざる事をし斯れば道雪の士の一日に幾度鎗を合せたりといふ者多し又道雪常に士によわき者のなきもの也若よわき者あらば其人の悪さにあらで其大將の屬さざるの罪なり吾士のいふにや及ぶ下部に至ても度々功名なきのあらせ他の家にて後れたる士あらば吾方に来り仕へよ取かひて逸物にせん吾士の四月朔日左兵衛の若き時初て後れし事の有しにいつの頃よりか血臭死事にあひて次第に物に慣れ今の五六人の剛の者と世にいひるゝぞかしとてたましく武功なき士のあれバ明塞ぎの有る武功の事と弱からざるの我見定めたり明日にも軍に出んに人にそゞろかさされ必ぞ援懸して討死し給ふな夫の不忠なり身を全うして道雪を見つぎ給われ各を打連たればこそ斯年老たる身の敵の真中に有てひるみたる色を見せざるぞ

といと懇に睦じくいひて酒酌かはし其頃はやりける武具取出して與へられければ是より勵まされて重て軍のあらん時必ぞ人に後れじと勇みて聊も武者ぶりの能見ゆれば呼出してわれ入る見よかし此道雪が見し所に違ふべきにあらざとて勝れたる剛の者の名を呼て頼むほどに能引廻してよといひ又人との心を合せらる、事此道雪の天の冥加に叶ひたる事よと勇め立若わかき士の脛上にて心得違たる事のある時客の前を呼出し打笑ひ道雪が士ふつ、かにこそあれされども軍に臨て火花を散し鎗の此人こそ能すれとて鎗追取たるまぬして響られしかば人と感じ涙を流し此人の爲に命を捨てはげみけり

○道雪の側に仕ふる女に心をかよはす者ありけるをしらぬ休にてぞ有ける是をしるもの有てある夜物語の時申けるの東國の大將に誰と申しらぬ寵愛の女に密に情を通りす者を誅せられさどあらぬ事を憚といひて道雪の答を試みけり道雪打笑ひ若きもの、色に迷ひたるの必きしも誅せまとも有なん人の上に居て君と仰がれんに、飯初に事に人を殺せば人背くもどるよ國の大法を犯したるに、異なりとぞ語られける彼者傳へ聞て心に慙又道雪の仁愛に感き其後薩摩の軍、鎧が嶽の城を攻るとき道雪城を出て戦ひしに大軍押懸り危かりしに彼者大音上亂ける味方を耻しめて散るに戦ひける其ひまに道雪城ちかく引取りたるに敵猶さ

びしく進み来て城門をたてあへぬ計也ければかの者又取て返し武士の討死すべき所い愛にあり各是にて討死せば城をば敵に奪われ返せや人とといふまゝに鎗を横たへ折取ければ返合のする者三人あり而もふらむ戦ひて討死しける間に城門を閉たりける

○天正十二年大友宗麟猫尾の城を圍て數十日攻むれども落せ大友の兵長陣も氣疲れたりと立花道雲高橋紹運聞て宗麟に馳加のり然るべしと相謀り俄に兵を出し二夜の腰兵糧を付よと陣觸して八月十八日打立たり士卒是の何方へ向る、にやと怪みなが下知に従ひて三笠郡内山江原へ打上る是より黒木の猫尾へ押行べしと下知し紹運先陣たり今宵のはや夜半過たり月傾きぬ筑後川の邊にて夜明なん然とバ敵の中數十里押通る事いかゝあらんと紹運の從士言ければ道雪へかくと云送らるゝに道雪色をかへらはれ早く夜の明よかし見晴して敵出づ撫切にして通るべしとて乗物を叩かれしかば使者に行ける萩尾大學よしなき使をして耻辱に逢たるぞとて馳歸る紹運の從卒の謀しごとく筑後川へ押着れり夜明けり渡る處のかたの瀬といへり瀬踏にも不及混と打入れ押渡る秋月種實の士芥川兵庫といふ者五十騎計にて星野城より番代りして歸りけるがいつ方より誰の軍を押せらんやと問紹運餘それと下知し取巻て一人も不殘討取り首を小高き所に並べ軍陣の血祭したりとて夫より石垣原へ

四二一

押出し後陣を待揃へ耳納山を越んとする處に秋月種實筑紫廣門の兵其所より方より兵を出し爰のつまりかしこの切所に待らけ鉄砲を打かくる事敷をしらせ中にも大木を小楯にして其陰より顔計出して鉄砲を打者あり殊に手だれよて手負數多し及べり道雪の乗物昇たる人にも中りて倒れしかば乗物をのたど落しぬ道雪怒てあれをうてと下知して傍より頻に鉄砲を打かけられども面計りさしのぞきて鉄砲を打ち出せばねらふべき透間なくて中へあたらざりしかば道雪いかに紹運の士に手だれのおはさぬかあれうたせ給へと詞をかくれば紹運市川平兵衛といふ士に命せられけり平兵衛承れりというて鉄砲を構へ待所に又かの木陰より面をさし出しけれバ市川手さ、早に打たりし眉間に中り轉び出てうつふしに倒れ死ぞ敵前後より取挟みけれバ後陣の由布雪加より道雪へ使を以て唯今討死を遂べしと申送るを聞て紹運大返しに歸さぞバ味方の後陣危くて此切所を越がたかるべしとて取て返し敵を搦て耳納山の嶺に押上たりしかばはや夕日に及べり諸卒はるるぐと押來りしかば疲を休めよ今宵の爰に陣すべしとて曠原に折敷せたり俄に雨降來れども兩將打廻りて士卒に詞をかけたいたるるに本より兩將の恩惠になづき服したるものどもなればちつとも疲れを覺えざりしとぞ斯て一夜はそこ陣し明の夜黒木に押付られしかば翌後の兵競ひあへり宗麟も兩

五二一

將の舉動鬼神のわざ成べしと崇敬し諸卒に及ぶまでもてなしせられけりされども宗麟に人々思ひ放れたりし故田原親家も俄に心替りして兵を引具して豊後に歸りけれバ思ひくにて事ゆかき宗麟も引返されしかば兩將も高良山に陣して其年も暮ぬ明る天正十三年の夏に及びけれバ陣がへすべしとて紹運の赤司に屯をかへ道雪の北野村天神の壇に移られしに病付て次第に重くなりしかば我死したらば屍に甲冑と着せ高良山の好巳の岳に柳川の方へ向て埋ひべし此事背さなば我魂魄必き祟をなすべしと遺言して九月十一日七十二歳にて終られけり斯て此よし十時攝津守を使として立花の城にやり統虎にかくと申す尸骸を只一人樂置んこと人の誹も免れがたし立花へ歸し入べき旨答へらる十時陣所に歸り此由をいへば由布雪加されバ仰せの趣の不可なるに非れ共遺言の重ければ背さがたし雪加先爰にて腹を切御供に參るべしといひけれバ由布大炊某も腹を切り右勝の御供に我立べしといへば誰も争か残るべきと殉死すべき人餘多に及べり其時原尻宮内少輔熟々と聞て各々達唯名聞を好みみんなにの然るべけれども統虎公の御爲によりなりや夫程に存るならば嗣君にも御腹召せたらんこそよからめと荒らかにいひけれバ雪加聞て尤ものとなり然る上の我思ひ止るべし棺をば立花へ歸し參らせん事然るべし祟のあらんに雪加が一族罰を蒙るべしとて九

月廿四日陣拂して道雪の棺の供して立花へ引取りけり

○稻葉伊豫守一徹下人罪有て死罪に行ふ時聲を上げて泣く命をしきやと云へば彼の罪人いや
く命をくしみて泣にあらせ命あらば一太刀恨むべきに斯成果る事の口惜くて泣なりとい
ふを人々悪き奴哉とく斬棄よとひしめくを伊豫守聞てそれ助よとて細を解せいかにも
して我に一太刀打よとて追放ちければ忝なれよし再三いひて立ち去けり其後年經て一徹
病重くなりし時彼下人來て力を盡せしに本意を透せとて又泣く頓て一徹死て葬の後彼の
下人一徹の墓に詣で吾けふまでながらへたるの君を一太刀恨みやべしと申せしが故也君隠
れさせ給ひしに生て居たらむにの刑死に及で泣しの命惜れに泣たるなりと人のやさん事恥
しくとて腹搔切て死しけり是を以て見るに戦國の時上の人下の人其情の太平無爲の化に浴
したる時の人よ異なるを思ひしるべきなり

○島津義久島津圖書忠長伊集院右衛門の大夫忠棟を大將として兵五萬を以て筑前若屋の城
主高橋紹運を攻若屋の要害の地にあらせ寶滿が嶽に精籠て防ぐべしといふ者有紹運爰を去
て寶滿が嶽に入ればとて勝べきにあらせ敵に恐れて遁たりと誹られんも口惜し此城を墓
に定めたりとてちつとも動かせ四方を圍て嚴しく攻たりけれども驚く色もなし義久の士大

將新納武藏守忠元矢留をこて城中に申べき事のありけると呼はりけれバ紹運聞て何事なら
んと問に新納申けるハ紹運の武勇世に名高しといへども大友家に組せられ亡衰へられん
事近きにあり大友家の切支丹を崇め無道よして復家の興るべきにあらせ古き詞に一張一弛
と申事あり疾義久と和平せらる可しと云けれバ紹運聞て斯すの高橋家にて麻布外記とヤ
者にて只今承の旨紹運にやす程の事にも非せ聊議の當れる所をすべし人々能聞れよか
し凡盛衰消長の時の運にて古の細川畠山赤松山名を始めとして今川武田近國にて尼子大
内等一度の盛にて一度の衰へせといふとなし紹運今の限りに成てよも胃を脱て降参せうと
存せべきや大友の家も右大將頼朝卿の時より子孫國を受傳へぬれど日向の軍に敗しより貳
心ある者多く出來て今かく衰へたりされども今にも秀吉公大軍よて九州に渡らせ給ひ薩摩
に攻入られんに鹿兒島の破れん事も遠からじ勢ひ盡運衰へぬるを見て志を換るハ弓箭取
身の耻辱にて人に爪弾せらるべし松壽千年終に朽る事ぞかし人生の朝露の日影を待が如し
只永く世に残らんもの義名よこそわれ降参の仕らじと高聲に呼はりけれバ新納も又いふ
事もなかりけり外記との名乗けれども紹運ならてかゝる詞だゝかひせん人やあると云あへ
りかくて猶降参をぞよめて莊嚴寺の僧を便にしけれども聞入せさらば攻よとて天正十四年

七月廿七日四方より押寄閣の聲を作りかけぬい〜聲を出して攻たりけり城中よの思ひ設けたる事なれば爰を限りに防ぎけれども終に打破られけり三原紹心の

うつ太刀のかねのひゞき久かたの天津空にも聞ゆるべき

と一首の歌を塀の柱に書殘して討死す弓削平内ハ強弓の手さゝなり矢倉に雨がさしつめ引つめ箆種を惜まぞ射伏けるが左の手に痛手を負ひ敵の中にかけて討れたり高橋越前守伊部九藏も開ゆる弓の手だれにて物の具の爽かなる敵を目にかけてあまた射倒し矢種盡ければ太刀の切先を揃へて討つて出散々に戦ひ一足も引かぞ討死しけり尾山中務が子太郎次郎十六才なるが父と一所に死んとて出けるを母袖を扣へけるに振切て敵の中へかけ入討死しけり其片袖母の手に殘けるとなり寄手も討れし屍に四方の谷を埋みぬ既に城兵残り少くなりしかば何しに猶豫すべきとて討て出をめき叫んで戦ひけるが最期の軍よも人に笑われじいざとて或ハ腹を切或ハ敵と引組で刺違へ枕を並べて討死す紹運ハ江淵右衛門の大夫三浦式部黒岩隼人に女童ども皆刺殺して敵の手に懸ぞと下知し薙刀打振薙で廻られしが今ハ是まで也とて和歌を門の扉にといめられけり

ながれての末の世遠く埋れぬ名をやいはやの苦の下水

かくて行年三十九才にて自害して失られけり士卒をわかれみ深く義厚かりしかば救もなき城を守りて千八百人の士卒一人も逃散者のなかりしハ例少き事なり紹運初ハ鎮種と申けり○紹運若き時彌七郎といひし頃兄の鑑理齋藤鎮實の妹を彌七郎よ妻せられよと約束せられけり其御豊前中國と軍有て殊に騒しくて迎へ取せして打過ぎぬ其後彌七郎鎮實に對面の折から兄が申しかばせし如く迎取べきに軍の最中にて斯ハ運はりけり頼て迎へやさんと語られしに鎮實げに申かひせしハ可忘ハあらぬと其後妹ハ痘瘡を煩ひて以ての外に見苦るまゝ成ぬ中々かれが有様にて見届らるべきにあらせ今にてハ參らせん事叶ひがたしといひし時彌七郎色をかへ夫の存も寄ざる仰せを承りぬるなり齋藤家の先祖大友家にて武勇たくましき弓取にておのれれば兄よもものゝ迎へやさんと約束しつる事にあん夫に辭退もあるまじ我の少も色を好む心に非せとて頼て婚禮あり其腹に二人の男子出來にけり此迎へどりし頃紹運二十才に及びたりしとかや

○島津義久大友を攻め所々に亂れ入る志賀太郎親次獨義久に降らせ義久松の尾の城に在て秀吉大軍にて九州に渡らると聞て薩州に引退く親次大きに悦び嶮岨の地に兵を伏て打破るべしとて鉄炮の手利廿八擇み出し山海が嶺の林に待せけん然る處に首藤五郎太夫堀八郎と

一三〇

いふ者此度の撰に残りけるを口惜き事にかきひ密に道へ隠て薩摩武者二騎打落してけり扱
の伏兵有ぞといふ程こそわれ大軍林に入草を分てさがしければ二十人の者ども力なく薬を
惜まき散々に打かけ追くる者共打殺して引退ぞく親次大息ついで義久をバ山海の嶺へ越す
まじき物を天の祐に逢たる義久なりと言れけり

○豊後國合志常陸介を大友義鎮攻る時佐伯紀伊守一説に彈惟教大將たり佐伯が士大將高畑

三河一日に十三度の功名あり其後人間て僅に鎗刀一兩度迫り合ても大に疲れ息切て小兒に

め負べきに一日十三度の功名のたとひ志の飽まで剛ありとも力も息もされぬることいふか

しけれといふ高畑聞て打笑ひ別の子細もなき事也我戰場に打臨て勿論の事といひながら

死生存亡の間に於て少しの思案を費すべき事なしさる故に人の騒がしくても我の静なり大

かたの鎗を合せ大刀を打ち、がへざる巴前に力を出し氣を張ならん是に依て精神草臥疲れ

たるならん我敵と逢ふ時の我首を敵にとらするか敵の首を我取か此二ツの中天命に有とあ

むひて初の緩さに似たれども打合ふ時一決して一鎗の中に勝負分るゝ故に疲るゝ事あさな

り不入處にて氣を苦しめざるも幾度事に逢ひても胸中安閑なりと答へけるとぞ

○同じ城攻に佐伯に属したる森迫一本關三十郎親正首を取又戦ひて討死する時に十七才な

り常陸介が従兵山本十郎といふ者其首をとる小鐵形三本菖蒲の冑なり短冊を付たり

命より名こそをしけれ武士の道にかふべきみらしなけれ

常陸介感じて其首死屍を高畑が許に送り返しけり親正の豊後大野郡三重郷の人なり

一三一

○天正十五年二月秀吉島津を討るゝ時大和納言秀長近江中納言秀次八萬餘島津の豊後の
府内より薩摩へ引退ぞく跡を追ふて亂れ入り高城段部の城を取圍み附城五十一ヶ所築きた
り中にも耳川を越て根白の砦に宮部善祥坊繼潤木下平大夫貞基龜井新十郎廣政塙屋隱岐
守光成福原右馬助直高一萬餘にて守りけり是の島津の後巻を防ん爲なり頃の四月十七日の
朝島津使を根白にたて高城の城を渡すべし士卒を助け給れと云送りければ宮部五十丁隔
たる秀次へ此旨申て後兎角の返答を申さんとて使を返して後斯欺て怠らせ思もよらぬ所
へ寄べき謀也其用意せよとて人夫千人俄に山々の竹木を伐せ陣の前に深き二間廣さ三間計
のから柵をかまへ柵木を結ひて我もゝと物具して待所に物聞に出したる者ども走歸り敵
押し寄たりと云も果ぬ義弘一万六千餘の兵を率る間を揚て攻寄たり宮部木戸口に進み出
一番鎗と名乗て相戦ふ田中九介其子彦六國友半右衛門三村三郎右衛門を始め大剛の兵ども
先を争ひて切て出で相戦ふ義弘の義久の子にて素より聞ゆる勇將なり薙刀を提げ眞先かけ

て只今此城陷破れ者共と呼り多勢堀を越胃の鏝を傾け蟻の如く柵の木に付て引破んとす
 る時兼て巧みたればひかへの綱を断て柵の中へ倒せしかば薩摩武者討る者八百餘人
 に及びり義弘愈々怒り進で屍を踏越て内の柵に攻め寄せ透間もなく戦ひけるが内の柵をも
 打破り十八日の朝三の丸を攻取たり宮部を始め愈々死地に入たれを爰を限と防ぎ戦ふ斯り
 しかば秀長三万計にて耳川に打向ひ根白の方を見渡せば薩摩の軍兵雲の如く取巻て鉄砲の
 音聞の聲矢叫び相交り天地も動く計あり川を渡らんと進まれけるに尾藤左衛門尉知宣秀長
 の馬の轡を取て義弘が鋒 武田四郎が長篠の掛り口に似たり關白吉もかなはせ給ふべか
 らせと強て留けれバ既に川へ打入たる馬を扣て進み得る藤堂高虎の手勢を率る川を渡し搦
 手より根白にかけ入り自ら鎗おつとり敵數多突伏て宮部に力を合せけり黒田孝隆同長政も
 手の者を引分け進み行き道より村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣して唯今秀長六万の兵にて
 後巻せられたりと呼ひらせけれバ宮部を始め大に勇み悦べり長政の士栗山後藤川を涉り義
 弘の陣に切てかゝる秀長の士大將羽根田長門守も千計の兵にて黒田父子に劣らじと鎗を打
 入れ攻戦ふ小早川隆景も三千計にて耳川に來る秀長今敵陣にかゝるべきと存れども人々同
 心せられど如何すべきと問るれども隆景冷笑て物をいはせかゝる所に井上伯耆就遠浦兵部

宗勝古き背破の物具着て進み出島津のけふの客人あり訪來るに出迎ひせり弓箭の禮儀に違
 ふべし軍評定と事やと秀長を嘲りけれども進むけしきのなかりけれバ隆景馬と打入て
 川を渡り敵の後陣を取切んと進まれければ是より薩摩の軍亂れて敗北しけれバ義弘の従弟
 三郎忠親踏止りて討死しけり黒田小早川使を秀長の陣へ遣ひして味方の八方に餘れり鉄砲
 三千計左右の嶺を取り切り打立つるはどならバ義弘を打取ん事掌の中にありと申されけり
 ども知宣堅く留めて追ざりしかば義弘敗軍の士卒を集め所々に火をかけ引取たり後れたる
 士卒五十餘人戦ひ疲れたるを生捕て引來たる助て蹄さんいかにといへば是れ見られよ生て
 又歸らじと紙に書て 誓に結付けたりとぞ疾首を刎られよとて皆殺されにけり薩摩の人の
 勇氣とてゆゑしけれ秀吉宮部に日本無双といふ感状を與へ尾藤の領國讚州を召放されけ
 るとかや
 ○秀吉島津を伐る時蒲生氏郷前田利長巖石の城を攻らるゝに氏郷の先陣蒲生源右衛門此
 頃の坂小坂といひけるが真先に進でかなにてはちばんと墨黒に書たる白き吹貫を門の真中
 に押立てめさきけんて相戦ふ雨の降如く鉄砲を打出せば吹貫の芭蕉の秋風に破れたるがど
 とし大音上げて一と足も引く者共と下知し而もふらせ攻め入りけるを後陣より是ぞ聞ゆ

る蒲生が内の士大將小坂といへる大剛の者よと口々にぞ譽たりける寺島美濃守此頃ハ半右衛門といひけるが是ハ黒き吹貫おし立坂に續きたり利長の士松原久兵衛を始めとして先を争ひ攻め入り終に城を攻落して首四百餘打取たり秀吉氏郷に感狀を興へられ小坂に金銀十匹羽織を賜りぬ

○新納武藏守忠元の島津家の士大將也勇名をもて指を折る時第一なりとて大指武藏と稱しけり義久秀吉に降參の時新納ハ肥後の堺泉の城あり一説ハ大日本國の軍を引き受け一戰をせせして降參せんハ弓箭の無體なり疾陣を寄せ給へ一軍して討死仕らんとぞや送りける秀吉頓て師を城下に進めらるゝにかの城の路三四里か程ハ馬の鞍をおろし韃の紐を解ばかりの嶮難にて輒く打ち入りがたし武藏守暫く支へて後一説に義久斯と聞て大ハ驚き疾り今ハ是までなり主君既に降參せし上の家臣の身として争でその心に背んや弓箭の禮義をめてかくやたるなり日本の軍を城に引受る事士の一面目にて此上怨みのあらざとて城を出にけり

一説に島津降參の後鹿兒島の外の城々の壞つべき由秀吉下知せられしに新納ハ城に籠り専ら防戰の手段をなし其身も病と稱して引籠り居たりしに秀吉聞ぬ体にして歸京ありけり

り其後島津上京し武藏守も供したりしに程經て秀吉何とて新納が城をば壞捨て合戰の設したるや怪しき事なりと問われしに武藏守人々の答を待せ進み出て仰せ出されし旨義久下知せしかども承入せして軍を志し居たりしに踏過て通らせ給ひしこそ恐多くハわれども恨しきと限りなし其子細ハ城を開く事も古より其例なき事にあらざ只今日本の主と世に稱し奉る關白様はるかに筑紫のはてまで引き出し奉り鹿兒島に申請し事の島津が家の譽とや申さん新納の城を破棄すハ惡き奴め踏潰せとて軍兵を向られんハ必定なり其時一戰仕らば關白の御馬を向けさせられたる城なりと末代までも申傳へんにハ子孫の面目是に過たる事あるまじ討て出火花を散し一足も引せ討死したりとも是又武名とやヤベき敵に箭一筋も射かけせして城を破捨る事口をし新納ハ日向口に在て宮部善祥坊を始めとして先陣の人々に追合たりしハ島津降參のよし告來り引き返へしぬ島津が兵を以て日本國の大軍を引受合戰終始の勝利を計るべきにハあらねども新納肥後口を防ぎたらんにハ地の嶮なり關白殿下いかに智謀たくましくおのしますとも輒く攻め入り給ハん事ハ思ひもよらざる事也皆々谷々より種々島の鉄炮を打かけ思ひのまゝに先陣を打ちなやましヤベきに今に至て残念なる事どもなりと恐るゝ所なく申しけるを秀吉聞て新納ハ聞

及びたる勇將なりとて大言の咎は更になかりけり

○秀吉黒田勘解由孝隆に豊前國を興へられしに一揆處々も起る中にも岐井谷友房いもと下野國宇都宮彌三郎友綱が次男鎌倉の比より地を領したる子孫なり毛利壹岐守勝信に誘れ地士をかり催し民屋を放火す黒田父子の馬の岳といふ城に有けるを城下に押寄る長政其時十六歳岐井を討べきと勇まれければ孝隆同心せられ長政其頃の吉兵衛といひけるが若士ども引具し切て出れば一揆ども一支もせざ敗北するを追かけたり岐井の山中の險路にそびき入れ多くの大石の陰に逃隠れたり大野小辨といふ若武者眞先に進みたるを一揆起合せ七八人取巻て馬より突落しけり後藤又兵衛小河傳右衛門久野四兵衛馬の首を引返し敗北しければ長政の馬廻りの眞丸に成て一揆勝に乗押詰ければ鎗を合せ一揆の木蔭谷かげより五人十人かけ出狩場の鹿を射るごとく竹の鏃の矢よて雨の降襟も射たりけり長政馬より下り立討死すべき色なりしを近習の者共馬を搔乗せ退さければ一揆頻に追かけり長政の馬矢に中りしかば爰にて自害せんと云れしを菅六之介政利己が馬に召れよといへども聞入を早上帯を解んとせられけるを三宅三大夫後に走寄大將の自害の所にていあらせとてかき抱き馬に打のせ片手に馬を牽き片手に長政をとらへて我等生残りたるに殿を追討とや念

もなく地の利を見て引返し一揆の奴原追崩しやさんとて引退く菅の長政の鞆の組違ひに手をかけて少しも離れぬ木屋兵右衛門の長政の鎗を持って歩立にて續きたり一揆長政と見知り餘さじと付幕ふ三宅菅木屋を始めとして岡本彌兵衛小川久大夫坂本七左衛門已下五十八計丸く成て思ひ切たる色を見て靜に詰寄て二里計追かけて其後の暮のざりけり後藤のいかゞしたりけん狸々緋の羽織を脱捨たりしを長政とらせ歸られけり
孝隆の馬の岳の矢倉に上り長政の敗軍を見て笑ひ居られしかば側より疾加勢をさせ給へと口々にいひければもいやく引かくれたる味方の眞丸になり静々と道を引退く吉兵衛長政なるべし危ぶげもなしといひれしが果して長政事故なく引返されたり長政敗軍を口惜しとて引こもり夜の物討被て臥居たり孝隆物主を呼て弱敵をバ恐れよ初の勝を勝にするもの也勝すくれば必敗の本なりと戒られけり鹽屋善七郎といふ侍長政の近習に仕へしが京に使に行此日の暮頃に歸て長政の寢所に行きけふの敗軍是非もあき事なりさばかりの者共小弁を捨殺し殿をも捨て逃たりと承り殿もよき討死の所なり何とて敵に後を見せ給ふや父祖の高名に瑕付申こそ口惜けれ善七郎が御馬の傍に在ならぬ鎗を合せ一揆の奴原追立て引き取るべきに後藤めらさたなき振舞なるかな重て一揆と軍あらんに必死と思召定められよと

塵を立ちければ長政も鬚を拂ひ思ひ切たる体なり翌日善七郎又申しけるのあながち口惜
 とな思存さる可し一揆押寄來らば眞先かけて切崩し耻を雪ぎ給へ善七郎の御馬の先にて討
 死せん逃たる奴原も勵まされて軍するほどならば鬼神なりとも恐るゝに足せと云慰めけれ
 ば長政起上り物語せられけり長政の面目なしとて父の前に出せ孝隆扱の必死を期したるな
 りと察し老功の者餘多長政に差添てはやりたる下知を禁せられけり一揆又上毛郡へ押寄せ
 れば長政火隈の海近き所に山に上り待かけて思ふ圖に引受け一同に乗出し馬のかけ場よか
 りければ縦横に乗割一揆敗北する處を追立たり鬼木鹽田兼といふ者討れ散々に成にけるを
 長政鹽田内記を手づから討取り尙もかけんとせられしを老臣をも馬より飛下り押へて陣を
 壁へけり鹽屋善七郎の敵の中に乗入鬼木掃部が首を取り右の方を見れば長政敵の首を取ら
 りしかば又馬引寄せ打ち乗り追詰て首二つ取しが痛手負て精神も亂れたるが尙も若殿の功
 名と問聞て嬉しや先日の際辱を雪がせ給ひぬ此の上のれもひ置事なしと云ひけり長政善七
 郎が枕元に居よられしかば長政の手をとり此の後能心得給へ殿に討死し給へと申者のなき
 ものにてと云べ長政涙を流し汝を先だつる事の殘多きよと咽ばるれば善七眼を見開き先の
 頃諫めせしめし必死を思ひ定めたるゆゑなり今度の功名こそめでたけれ今生の御目見只今

を限りなり人の一代名の未代と申事の有りといひも終らぬ空しくなりけるとぞ比類なき者
 なりと云あへり翌日孝隆火隈に來りて對面し若き者の怒る事なくして思慮の練ぬものぞか
 し終の勝を計れ只勝べきとのみ思へば敗を取なり良將の時により緩に見ゆれども卒爾の軍
 合せざるゆゑに終の勝を全うするよと教へられぬ長政又押寄んと云はれしを孝隆制して要
 害を設け兵糧の道を塞ぎ馬の岳に歸られけり
 ○秀吉北條を討るゝ時諸將浮島が原に並居て秀吉をまつ秀吉糸緋威の物具着て唐冠の貫黄
 金をちりちめたる太刀佩て土俵の大なる羽置に征矢一筋指仙石權兵衛が參らせし朱の滋藤
 の弓持て七寸有ける馬に金の瓔珞の馬甲かけ靜に歩ませて打通られけるが東照宮信雄と共
 に出迎ひ給ふを見て馬より下りいかに貳心有と聞たりいざ一太刀參らんと太刀の柄に手を
 懸らる東照宮左右の人に向せ給ひ軍始に太刀に手を懸られ門出の目出度と高らかに仰有
 ければ秀吉何ともいはせして又馬に打乗り通られけり
 秀吉此出陣の時濱松の城に宿せらる本多作左衛門折節御使に參て歸けるが旅装の儘にて
 諸將の中に進出東照宮を見かけ奉りていかに暇のいつより斯愚になり給へるや國を持つ
 人の城を人にかす事のあらめさらば女房をも人にかし給はんかとを罵りける東照宮彼

本多作左衛門と申剛の者にして家久しく睦みて只今のやぎなる無禮の詞を申せなりと仰有りければ人々承り儲の承り及びたる本多殿にてありけるよかゝる事申人多く有べきやと賞しあへり作左衛門物あらし人なりけるに三奉行の中に命せられ政を執しに甚だ仁愛の事のみにて獄訟を断るに理正しく四民陸々服しけり東照宮の神慮淺からぬ御事也

〇東照宮小田原又向のせ給ふ時先陣の榊原康政と命せられ井伊直政御旗本と定めたまふ直政毎も先陣を好まれしに此時の少しも辭退の氣色なかりしに小田原にて秀吉かたへの人僅に引具せられしを見て唯今取圍みて討取べきと進め申せしを東照宮聞し召入れられざりしかばさらば先陣たらんといわれしとぞ

〇小田原を圍む時東照宮伊奈熊藏を召て仰出さるゝ事どもあり其時伊奈去年より兵糧の用意して沼津に運ひたりさ然るに此の箱根山中に穀物の價江尻沼津と相同じ遙に運漕せんより愛にて求める事然るべし心得がたき事なりと申けるを東照宮聞し召夫の長東大藏の大輔が謀なり長東の武功勝れたるにもあらざれども斯る謀の長じたる者なれば秀吉城主として寵せらるゝぞかし汝が職にて兵糧運漕の事よく心得べきに心得がたしといふの吾も心得がたしと仰せ有りければ伊奈汗を流して退出しけり

〇同時蒲生氏郷金の三蓋菅笠の馬印ゆるされよとすされしに秀吉夫の聞ゆる佐々成政が馬印にてたやそくの免しがたし今度小田原の武功によりて望む所にまかせん物をといわれしかば氏郷今度の軍に人の目を驚かすかささらの討死とおもひ定め繪像をかゝせて日野の菩提寺に籠め打立れける期て五月三日の夜かき曇りけるに紛れ城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけり氏郷も今夜の夜討入べきよ解るなど下知せられしに果して廣澤兵庫秀信一作大將にて押寄たり氏郷の物見の兵田野万右衛門に行逢ぬ弓取直し指詰引詰射れども叶のせして引返せば敵進み來て柵の木を打破る蒲生源左衛門郷成田丸中務直政田野右近幸和切て出爰を専途と戦ひけり氏郷銀の鯨の尾の冑の緒をしめ兼て一丈餘の鎗を設け置れしを提げ追立く進まれけるに廣澤兼て鉄炮を後陣に並べ置たれば追來る寄手を打立けり廣澤の聞ゆる剛の者なるが鎗を横たへ片足を堀の中へ踏入れ大音上一鎗參らんと呼るを氏郷聞て飛かゝり突合ければ蒲生左衛門郷可同五郎兵衛郷治佃又右衛門等かけ來りをめささけんで攻戦ふ廣澤の今宵夜討の大將廣澤兵庫一番鎗と高らかに呼りけるを氏郷目にかけて堀の中に飛入て撃とらんと而もふらぞ冑の鎧を傾け鎗を取延たゝき立られしに敵兵二人氏郷の鎗を取んとする事七八度に及びしかば氏郷廣澤を討もらされけり寄手餘りとげし

く戦ひければ廣澤もかなのじとや思ひけん城をさして引退く氏郷いづくまでと云まゝに先に進んで追れしかども門を閉て鉄炮を打出せば引返されしに胃に矢二筋折かけ物具に鎗の疵透間なく十文字の鎗さゝらの如くなりしかば秀吉感状にかの馬印免されけり

○武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭の小田原に有て家臣留守したりしに前田利家上杉景勝攻むとて先に降参しける北條氏邦に使を城にやらせ小田原既に破れぬとく城を渡せと言送る中山近藤狩野等従へり氏昭降参せば證書を賜りて城を出べき旨下知すべし然らざして降参せば士の瓊璫也氏邦が如き臆病者の一人も城中にこれなくと答へけり利家景勝も其義に感せといへども扱止べからざれば一万五千の兵をもて圍れけり甘糟清長攻入て火をかくる狩野一庵近藤出羽助實金子三郎右衛門家重死狂ひに切て出討死す横地監物ハ氏昭の第一の長臣なり火もあされば今日を限りに散々に戦ひける者多し中山勘解由家範ハ武勇の將殊に入條修理滿朝が取法を傳へ關東無双と世に稱せらるる人なり大敵少しむひるまき二百計にて突て出爰を最後と切て廻るに奇手新入替攻ければ僅十五六人に討ちなされたり利家誰か中山ゆかりあると問へるに松山の降人根岸主計定直か妻ハ中山が妻ハ兄弟なり小岩井雅樂助ハ中山が取法の弟子なるよしを申す利家疾中山ハ味方に属せよといふべしとて兩人を城中へ入れられしに中山既に自害して其妻も自害したるがまだ息かゝりて有りければ詞をかりして馳歸り斯といへば利家大に惜まれけり監物ハ切ぬけて逃出けり北條家關原の城々多しといへども豆州葦山の城の外ハ多く降参しけるに八王寺の兵城を枕に戦死せり

○北條滅亡の後秀吉坂部岡江雪齋に汝先年北條の使として上京し約せし所忽背て名胡桃の城を取る事氏直の姦計にや又汝が詐なるかと責問るゝに直に申さんと答へしかば秀吉大に怒り手枷足枷を並べ江雪を呼出し刀を奪ひ取り左右の手を引張庭上に引居て後秀吉罵て曰く汝が約せし所に背くこと誠に憎むに餘り有且日本國の兵を動かし主君の國を滅せし事汝に於て快きやと詈らるゝに江雪色も變せり氏直更に約に背くの心なきに邊鄙の士愚にて名胡桃を取終る弓箭に及て北條の家亡びぬる事江雪が思慮いかんともすべき様なし誠

に家の亡ぶべき運命にやあらんされども日本國の兵を引受ること北條家の面目なり此外やべき事なし疾首を劓られよといふ秀吉顔色打どけて汝ハ京に引上げせ礫に懸んと思ひしに大言を吐て主君を辱しめぞ大丈夫といふべし命を助ん吾に仕へよとて許されけり坂部岡を改めて岡と稱えけるハ此時よりの事あり

○秀吉鎌倉の鶴ヶ岡に詣りて八幡宮の戸を開かせ、照朝の像を見られしが脊中を打たさず、微賤より出て日本を掌に握る事我と御邊と二人なりまがれども、照義父子鎮守府將軍として東國の者ども久しく親しみ多かりき、蛙が小島より兵を起されしに、關東の驛を從へるも、謂れなきにあらざり我の士民の中より、斯日本を思ひの儘にすれば、功尚高しといふべしといはれけり。

○秀吉陸奥に趣く時、宇都宮にて佐野天德寺を呼物語させて聞かれしに、武田上杉の弓矢盛なりし事をやければ、秀吉冷笑ひいかに天德寺謙信信玄といふ坊主も疾死たるこそ、幸なれ令にながらへ居る一人に、薙刀をかたげさせ一人よの吾輿の先なる朱傘を持せて馬の前に召具すべきに、此の世になければ力なし何條車かより坐備みなたのことなりとぞいはれける。

○秀吉陸奥に赴き、蒲生氏郷に八十万石の地を賜へりけり、氏郷退出し柱に倚かよりて涙ぐみけるを山崎の某居寄て、辱く思はれん事尤なりといひしに、氏郷私語て吾都近き所にて小き國一つ賜へらば、遂に天下に旗を揚ぐんに、邊鄙に棄られたれば、何事か仕出さべき志の空しく成たるによりて、おぼね涙の流るゝよとぞ語られける。

○天正十八年、奥州葛西大崎一揆の時、氏郷名生の城にあり、會津に飛脚をもて鉄炮の玉薬を入に見とがめられざるやうを計りて、運び來れと下知せられしかば、山伏をかたらひ、笈の中よ玉薬を入れて、頭巾、螺貝、杖を携て湯殿山に詣るありさまして、送りけり、是蒲生左文が謀なり。

○蒲生氏郷笠井大崎にての軍に、佐久間備前、同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知せる事、氏郷の心に叶ひ、此兄弟の元秀吉に属せしが、秀吉より氏郷に賜りたる侍、大將也、氏郷明日の軍の神田修理外池信濃岡野左内、蒲生源左衛門等先陣せよ、佐久間兄弟の見物せよとぞ下知せられける、先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立おしきとて、斯仰承りぬれのく討死したりとも、己が躬を捨て、只汚名を出さざるまでの事に、て斯仰せを承りたるかひもなく、ての御大將の耻辱也、然らば進退の節内ならしせせ、バ叶ふまじとて、先陣の軍兵を打具し、平野に押出し、かけ引きのならし五度に及びければ、ども尙調の老六人、そこにて明日の軍の殊々大事なる故かやうに馴しに及びぬるよ、人々の進退以の外調の老いかに、も能心得たりと再三詳に申聞せ、さて宰配を取下知するに、進退節にあたりしかば、さらば明日の軍のおもふ儘なるべしと悦び、いさみて果して敵を切なびけ、大勝を得たり、淺野長政秀吉の命にて、陸奥國に在しかば、其軍の有様、腫引の圖に當りたる終に見聞に及ぶる所なりと褒られたり也、氏郷も大方ならせ悦びて六人に感状を與へて、いろくの物添て賞美ありけり。

○伊達政宗、蒲生氏郷の威に壓るゝ事を心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、敷

六四一

代家に仕へし者の子に清十郎といへる十六才も成ける者容貌勝れて艶ありしに密にたくめ
る事を語りさかせ田丸中務少輔が兒小姓に出して奉公させられけり田丸の氏郷と姻家の親
しみあれは來られん時便を伺ひて刺殺せとの事なり清十郎が父の方へ遣しける書を關所に
て改め見しより事起りて其の謀 泄たりしかば清十郎を獄に押入れ此事を秀吉に告ると
心へども秀吉遠く慮りて強て伊達家と和平させられぬ氏郷清十郎を呼出し吾過て罪
なき義士を獄に入れ辱を與へたるよ其君の爲に命を捨て忠をいたさ賞するに餘りありとく
く伊達家に歸るべしと禮義正しくもてなして歸されけり

○氏郷の許に佐々木が鎧といへる名高き器あり細川忠興いと懇に我に賜われと乞れしか
ば亘理某是の世久しく傳へる物なるを以て似たる鎧を贈り給へといひければ氏郷
なき名ぞと人にいひてやみなまし心のとひいかに答へん

といふ歌の耻かしきよとてかの鎧を贈られけり蒲生もも江州の士にて佐々木の臣なり

○本多中務大輔忠勝に上総の小籠十万石を賜へりしかば小籠に趣き土岐彈正少弼頼定
入道慶岸の士どもを呼出して祿與へたり彈正の同國万喜の城に居し故世に万喜少弼と稱
して武勇の譽有し人なれば此を間に舊臣の万喜常に房州の里見義高と弓箭を取しが敵を

急らせん爲に舞臺を設け踊りをさせ城門を明かふるとて果さず船着のけりしきを平して里
見が將正木大膳時綱寄せ來り船より上る時慶岸城にかざりたる紙旗を絹の旗に立換るとひ
としく古き門より不意に打て出忽切崩したり是より土岐が地に攻め入る事あらざと語り
ければ忠勝聞て土岐の甲越の両雄將にも劣らぬ人なりと稱し其後舊臣に其家の事を問時
必き万喜殿とぞいはれける

○勝頼亡びて後東照宮武田家の土横田甚右衛門等を召て信玄の事ども物がたりさせて聞し
召る時御坊の時火細のいかいしたると御尋あり柿の澁に石灰を入れて火細を染れば年經て
も用らるべしとす横田又の城意趣などに信玄の事を御坊と仰せ有けるとぞ又武田家に
て鐵をゆるくつめたるの敵の肉の中に鐵の残り爲なりとすを聞き召士の軍に臨むのみ
な其君の爲ぞかし射ふせられば吾軍の利となるべし後まで人を苦しむるの不仁の業にこそ
あれ今日より我家の士の鐵を堅く詰よと仰出されけり

七四一
○東照宮仰せに物具の美麗なるの無益の事なり又重くするも益なし井伊兵部の力も有て重
き物具しつれども度々手負しなり本多中務のさもなく薄手負たる事もなし只戦ひ易から
んやうを必懸へさなり下部の薄心鉄の笠を着せたるぞよき急なる時の飯をも炊ぐべしとぞ

○東照宮關東御打入の後甲州に有ける秤を造る守隨兵三郎といふ者井伊直政に於て關東黄金白銀等を商賣するに定りたる秤を用ひられん事を願ひければそれより今の制り定めさせ給ひけり

京に後藤徳乗といふ彫物師あり東照宮關東打ち入りの、ち徳乗が弟子を召けるに遠國を嫌ひしに後藤庄三郎われ行んとて關東に至り寵せられしかば後天下を知し召ば願のいつ叶へ給へと申す何事ぞ易き事よと仰せ有さらば黄金を四つに切て通用せよと望みけり果して海内東照宮に歸しければ庄三郎が志のごとく仰せ出されけるより今の壹歩金といふの始まれり但し甲州に信玄の時碁石金といふ物ありされば夫より前に碁石金の外にのなかりしにや一步金の碁石金に效ひたるにやあるべき又信長の時今の弁當といふものの安土より始まれり其はじめの小芋ほどの中にいかで色々の物入られんとて人信せざりきといへり挾箱も同じ頃造り始めたりといふ又大坂の津田長門守始めて造り出せどもぬへり

○原吉丸酒井金三郎どもに東照宮の近習につかへ申しけり伏見にて庭に出させ給ふとき原太刀を持って庭にかり草履はくに違なく跳にて碁石の上の有けるに酒井草履をわたへければ人々譏りけるを聞き召子細を尋られば酒井承り原の元下総の笛井の城主原一郎が子にて臣が先祖原に仕へしと承りぬ昔の主君のゆかり跳にて炎大に居たるを見るに堪かねたりと申ければ本を忘れざるの士なり吾子孫にも如斯なるべしと大に感せられたり

○秀吉大坂にて馬揃の時千貫矢倉に上り見られしに黒き馬の太くたくましく乗て紅の沓を後輪に付たる者あり何者ぞと問る、に徳川家の士成瀬小吉なりと申す祿のいかにと問るゝに東照宮二千石與へおきたりと仰られしに秀吉おのれ吾に奉公せば五万石與ふべきといはれしに其後東照宮成瀬を召てしかぐ事ありき秀吉お仕へなんやと仰有りければ成瀬承りこの御情なき事かなと申すいやと汝秀吉に奉公せば我爲にめよかりなんと仰られしに成瀬涙を流し不肖の身祿を貧りて主君を捨奉らん者と思召けるを知ざりけるか只疾自害して心をわかさんものをと申ければ其よしを秀吉に物語有りけり後に東照宮長臣あまた召れ古に聞し三尺の孤を託せべきといひし人は成瀬にてこそあれと仰せられけり小吉正成後隼人正といひまなり

○秀吉伏見にてある日廣間も出られしに五腰の刀を見て試に其名をいへんとてさぐれしに違ひざりければ前田玄以賊に神智のあせしと驚きたりければ秀吉笑て何の子細もなきぞ

とよ秀家の美麗を好むが故に黄金をちりばめたる刀是なるべし景勝の父の時より長剣を好めり寸の延たる刀を是にありたりき利家の又左衛門と云し時より先陣後殿の武功により今大國を領すれども昔をわすれを草卷たる柄の刀是他の主に非ずと思へり輝元の異風を好む異なる体にかざりなせる刀是ならん江戸大納言の大勇にして一劍を頼むの心なし取繕ひたる事もなく又美麗もなき刀其志に叶ひたり此を以て察しけるに違ひざりけりと云れけり江戸大納言との東照宮の事なり

○謙信の許に赤小豆粥竹俣兼光谷切とて三の刀あり竹俣兼光のものと越後の百姓持たりしにある時山中を通りしに雷烈しく鳴たりしかばあいや落かゝるかと思ひて刀を抽頭より指當目をふさぎ居たりやと有て空晴しに刀の鋒より血流れ般にそみたり又或時大豆を袋に入れて歸るさに袋の綻びより一粒づつこぼれけるが鞘にあたりて二つに成しかば怪しみ見しに鞘のわれて刃の機に出たりしに當りし故なり双あき刀とて竹俣三河守乞得しが謙信後にさくれけり弘治年中川中島合戦に信玄の兵輪形月平大夫といふ者鉄炮をもてぬらひしを謙信馬を乗寄せ一ト刀に切伏てかけ通られけり後に甲斐の兵ども是を見るに輪形月の物具かけて切られ持たる一兩筒の二の見通の上より切放したりいかなる刀にてかく切れしといひあ

へるに則ちかの兼光の刀なりけり景勝の時京にて研せしを越後にて人々に見せて京の水もて測れば鏝の光殊更勝れしと悦れしに三河守熱々と見て此の價物なり仔細に此刀はいさより上一寸背に馬の毛の通るべき計の穴あるべきに是を知人外にいなしと申すさらばとて竹俣を京にやりてさがし求に眞の兼光の刀を清水の南坂より取出すかくと石田三成に告げて價物したる者十三八日の間よて死刑せられけり竹俣越後に持歸りてかの穴に馬の毛を通して景勝に見せけり其後此刀大閤に奉る秀頼亡て落武者取て和泉河内の方へ行たりと聞えしかば此刀を献せざる者に黄金三百枚賜るべきよし仰せ出されしかども其行方終る知る人なしとぞ

○本庄越前守繁長の越後の勇將なり後景勝上杉十郎憲景が祿を本庄よわたへらる本庄出羽の庄内大寶寺義興と戦勝て二男千勝丸に庄内を與へけり本庄最上兼光と出羽の千安が表にて軍しける時最上の軍敗北せしに兼光の士大將東漸寺右馬頭口惜き事に思ひ取て返し首二つ提て越後の兵に紛れ繁長を目にかけて只今敵の大將を討取實檢に入れ奉らんと云ひて馬に鎧を合せかけ寄せて正宗の刀を以て胃を打つ明珍の胃なりしかと筋四ツ切削りたり繁長右馬頭を切て落し首に添て景勝に出したり刀をば本庄に返し興へられしが後故有て東照

宮の御刀となり本庄正宗といへる此刀なり

二五一

○加藤嘉明の冑の形を富士山に造りなして名をも 則富士山といふ具足の胸に天人の雲に乗たるを詩繪よしたり竹中重治が冑の一の谷明智秀俊が冑の二の谷といふ攝津一の谷二の谷相並べり又柴田伊賀守勝豊が冑の鉄蓋が峯といふ是ハ一の谷より高く峙たる山あればかく名つけしとかや此餘浦野若狭守が小水牛黒田長政の大水牛日根野が唐冠の冑原隠岐守が十王頭福島正則の四また鹿の角本多忠勝の佐藤四郎が冑蒲生氏郷の銀乃餘尾伏木久内がわり蛤 武田信玄の諏訪法性秀吉の八日の月加藤清正の長鳥帽子矢田作十郎が鯉の冑藤堂新七が帽子などいへる多し細川忠興の山鳥の尾の冑といへるも名高き關ヶ原の軍忠興かの山鳥の尾の冑を着銀の天衝の指物なりしに逢ふ見て唯舞鶴のやうに有けるを東照宮冑と指物と映あひて面白しとて乞得させ給ひ台徳院殿に参らせらる

○信長江州小谷の城攻に伊藤七藏先がけしたるに従者取付たる故上帯されて刀も脇差も堀下に落つ七藏少しもひるまじ乗込で柵の木取て敵三人たゞ伏せ功名しけり七藏父を若狭といふ相州の人にて武者修行し尾州前田村に居ける頃信長呼出されけり七藏尾州三本木の軍に事急にして編笠をかぶりながら一番鎗を合せける故信長大に賞美して編笠と呼ばれけり

後秀吉に仕へて度々功名有しかば紫袖井筒の紋廣袖の小袖を興へられければ甲の上に著たり秀吉の旗奉行と成たり

○馬場重介職家の陸奥栗屋川貞任が裔孫にて備前邑久郡北地村に來り居しが其後も安倍といひけるに京都よ來りたりし馬場氏の人豊原に居て其女を妻として遂に馬場と稱しぬ重介雅名を岩法師といひて十三歳にて邑久郡戸石の城主浮田大和守に奉公し天文十四年浮田直家の乙子の城に在て大和と軍あり直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の島よて鎗を合はせ疵を蒙りて戸石の城に歸る今年十四歳なり大和の守膝に抱上て疵の口を自ら吸れけり無双の剛の者なりとて名を二郎四郎と改めさせられぬ程なく直家花房又七近藤五郎左衛門一説は六星野十郎を大將にして戸石を攻二郎四郎白團の腰ざし指て一の城戸口に出る近藤見ていかに引か進かと詞をかくるに二郎四郎軍場に臨みて引と云ふ事やあるといひも終らぬに花房星野とも手利の射手にて弓取直し是を射る花房が矢の中指にあたり星野が矢の二郎四郎が持たる楯をもとほぎまで射貫く二郎四郎樹どもせき敵を追拂ひて歸れり天文十七年赤坂郡鳥取の砦を大和守攻て軍あり二郎四郎膝の口を飽深に射させ二町計引き退さたる所に味方に泉養坊といふ山伏來て其矢を扱ば足なへて歩む事あたひを大和守の馬に乗

三五二

て二三町引退きたりしかども馬を返してければ味方も隔りぬ敵追かけ来らば討死せんと思ふ時妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟来て馬に抱乗せたるに血鎧を越て流れ朱に成たるを敵見て深手負たりと見なしたれば十文字の鎧を取延べ頻にかけ落さんとする事幾度といふ事をしらす漸に遁れ得て歸れり首を取て見とられて見るといふ諺有り此時なるべしと二郎四郎常に言けるとなり是十七歳の事也後二郎四郎直家に奉公し與力六十八人付られたり美作三星の城の浦上宗景番手の兵をやりて守らせたるを安藝の毛利家より附城を構へ三村家親大將として度々合戦あり直家より馬場を加勢として三星にこめたり馬場愛宕精進するどて五月廿四日細き流れに行て身を清むる處に敵出たりと聞き直に行き向へば三星よりも鎧提たる士一人来て馬場を並び進む敵を追詰たれば附城より出て是を助けて城に入る門内を見れば混胃の兵十四五人折敷て鎧の先を並べ待かけたれば静々と引返す宗景感狀を與へられ直家夫より重介と名を改めさせ家の字をやられけり備前上道郡妙禪寺の皆の合戦に重介の刀敵の鎧にて相戦ひ溝を飛越て敵の手の下にくぐり入んとせしに躓てうつぶしに伏たり敵勇みかゝりておもふ所を突はづし行あまるをつと立上がり切伏て首を取る同郡土田の軍にも長六尺に餘れる梶井といふ兵を討取たるを角南惣輔見て白き浴衣を着右の肩を

はだぬぎ太刀打したる兵の有様むかしの辨慶などやかくも有らんと驚きたりといふ則重介なり永祿十年五月十日土田の上蟹目の軍に敵五人鎧を横たへ山の上より来るを重介の坂の下に有て一人射倒したれども味方につゝかせ引返す時山の腰を引退く味方敵追詰て既に討れぬべく見ゆれば返し合せ敵を切なびけ味方を助けて引取り備前岡山の城主金光與次郎を直家謀を以て殺し城を取られたれども近き邊りに敵多ければ戸川平右衛門を城番とするに寄騎六十人みな行兼たり重介我がいらんといふに何の子細か有べきといふを直家に告てゆるしたれば重介か寄騎六十人一人も辭退する者なきに戸川が與力もはげまされて重介加勢ならび行んといふにより戸川馬場三年岡山にあり美作三の宮の城を直家一時に攻らるゝ時城主村上勘兵衛士卒六十人計にて突て出る重介眞先に進み鎧武者四人薙刀武者四人と戦ひて城門の際まで追打せ敵鎧を投突にしたるを奪ひ取て歸る高城にての軍に直家重介を谷の受手とす敵来らざれば谷より上る處に山の半に鉄炮を五段にして待かけたる處に行かゝり三段追崩す四段より打たる鉄炮に右の膝より臀へかけて打透され敵聲をかくれば重介中らぞとぬうて四段をも追たてる崩れたる土手あるに胃の鏝を傾け寄添て待ちたるに柴折かけたる谷の向ふより打鉄炮者割具足の右の肩かひがら骨の内より臂まで打貫れ目暗みたり

氣を静めて見れば田中藤介間近く来れり重介田中を呼かけ大事の手合ぬ此所を退んどせば追討し遭ん爰を死所とせんといふ藤介我一支もすべしといふ重介五間ばかり歩みて郎等の肩に手をかけ静に退くを歎慕ひ来れの藤介鎗を合せ追退て歸れり鉄炮に中りし時大木を以て袋を突通そが如く覺え物の色目分れ只朝顔の花の色に見えたりと後語りけるとなり備前兒嶋入濱にて軍有浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將にて戸川平右衛門岡平内已下渡海し麥飯山の敵城近き邊りよて草を刈る時敵出て追たつる與太郎馬に輪をかけて味方の兵を求る所に鉄炮内胃に中りて馬より落つ中村宗介同じく討死す重介馬を射られ乗放し歩立に成ぬ月毛馬草毛馬黒馬に乗たる敵三騎重介を目にかけて馬を乗寄る重介敵に馬を乗かけられじと鎗の鋒を後になして脇に挟み静々と退く疲れしつ討死よと思ひたるに敵引て助りぬ戸川見て今日の働ゆる我一命を繼たりと重介を嚮たる所に寺尾孫四郎今日重介を見せといふ重介先にて見ざるか後にて見ざるか一番に進みたる敵の馬比毛色物具のいかにと問に孫四郎赤面して詞なし重介吾鎗脇に弓をめて後の證に立れよと言て敵一人射倒したる人有といへば鷹見傳兵衛進み出て某なりといふ中納言秀家大坂より備前へ下らるる時雨中の徒然に浮田修理同太郎左衛門花房又七三人を呼で軍ものがたりの時前代の鎗柱功の勝れた

るの誰ぞと問るるに馬場重介幸和織部寺尾孫四郎三人と答ふ秀家聞て幸和寺尾の武功の有つれを輕薄なりと聞きいつとても重介が人に越れたる事なしと聞つれに重介こそ勝れなんといわれしかば三人重介が武功の申に言葉もあしといふ重介貞實にて暗に城下の近き邊りに引込て此頃の耕作して有けるよしを秀家聞て三百石加祿の折紙を戸川肥後をもて重介に與へらるいかにまたりけむ事遅引を重介是を聞愈出る心なくて遂に秀家にも仕へせ七十七にて病死す士の仮初にもきたなき心有べからざるなり吾數度の戰場に臨み百死の中に一生を得て斯全く終りぬると遺言しけり其子孫池田家に仕へけり

○駿河を攻らるる時東照宮横目の人を召してむかしより普朱の鎗の柄瑠璃の柄の武功勝れたる者ならでり持せざるに近比の持せるもの數多有とさく心得がたき事なり改めよと仰出されけるに普朱の柄の鎗持せ普蒲草のたし付を着て通る者有誰ぞと問に細川越中守が士澤村大學と答ふ此よしを申ければ東照宮其大學の若き時才八といひつるが小牧よての事なりし秀吉二重湮の軍兵を引取る時秀吉六万計青塚に陣せしを吾小牧より押寄て引退く敵を打破る其時細川忠興秀吉の先陣に有て才八眞先に進みて鎗を合せし有様今も猶目の前に見るがごとく覺えたりかゝる大剛の者に持すべしとて其餘の者を禁むる事よと仰られしかば